富山市埋蔵文化財調査報告131

富山市金屋南（かなやみなみ）遺跡

発掘調査報告書Ⅱ

－金屋企業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（2）－

２００３年

富山市教育委員会

富山市埋蔵文化財調査報告131

富山市金屋南遺跡（かなやみなみ）

発掘調査報告書Ⅱ

－金屋企業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（2）－

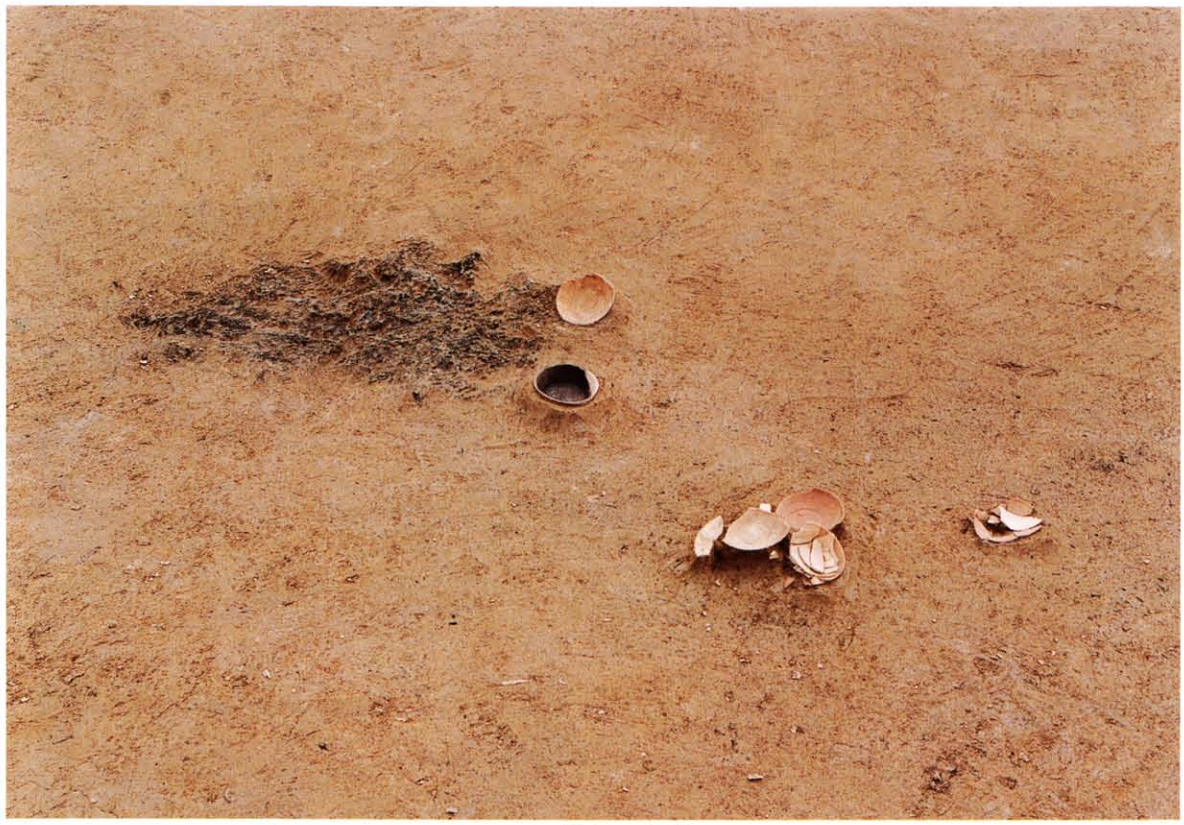
2003

富山市教育委員会

調査区全景（北から）

第53号土坑遺物出土状況

河川跡土層断面



土器祭祀遺構

出土した多量の土錘

土器祭祀遺構出土遺物（「北」の朱書）

序

富山市は、北は日本海に面し、東に3,000m級の立山連峰を仰ぎ、緑豊かな呉羽山丘陵を市の西部に擁する自然環境に恵まれた都市であります。このような土地に先人が残した遺跡は、郷土富山の歴史を知るためのかけがえのない遺産であります。これを保護し、未来へ継承していくことは現代に生きる私達の努めと考えております。

現在、富山市内には約600か所の遺跡があります。近年、大規模開発に伴い、遺跡の発掘調査が数多く行われ、先人たちが歩んだ歴史の一端が明らかになってまいりました。

呉羽山丘陵には古くは旧石器時代から人々の営みがあり、その後も絶え間なく数多くの遺跡が残されております。金屋南遺跡は丘陵の東側、神通川支流の井田川に面しており、周辺には白鳥城、大峪城、安田城が築かれるなど歴史的にも交通・物流の重要な位置にあります。

本委員会では金屋企業団地造成事業に伴い、平成８年度から平成13年度までの６か年にわたり、金屋南遺跡の発掘調査を実施いたしました。調査により、溝で区画された建物、井戸、土壙が多数発掘され、鎌倉～室町時代の大規模集落のほぼ全体像が明らかになりました。

この報告書は平成13年度に行った遺跡の南西部を対象とした第６次調査の内容をまとめたものです。この調査では主に平安時代の竪穴住居、掘立柱建物、土坑などが検出され、川べりで行われた祭祀や古代の村の姿などを探るうえで貴重な資料が得られました。

本書が富山市域における古代・中世史に新たな一頁を加えるとともに、私達の共有財産である埋蔵文化財を理解していただくうえで参考になれば幸いです。

最後に、発掘調査にあたりご協力いただきました地元金屋地区の皆様をはじめ、富山市商工労働部企業立地推進室、文化庁、富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センター、大成エンジニアリング株式会社及び各関係機関の方々に厚くお礼申し上げます。

平成15年３月28日

富山市教育委員会
教育長　大　島　哲　夫

例　言

1．本書は富山市金屋字川端地内に所在する金屋南遺跡の発掘調査報告書である。

2．本書は平成13年度に実施した第６次金屋南遺跡発掘調査のうち、西側調査区約4,700㎡についての調査報告成果を報告するものである。

3．発掘調査は、富山市金屋企業団地造成事業に伴うもので、富山市商工労働部企業立地推進室が大成エンジニアリング株式会社に委託し、富山市教育委員会が監理した。

調査面積　　9,600㎡
調査期間　　平成13年５月14日～平成13年12月13日
調査担当者　小林高範（富山市教育委員会埋蔵文化財センター）
受託機関　　大成エンジニアリング株式会社
　　埋蔵文化財調査室（室長　早川泉）
　　統括調査員　板野伸彦
　　調査員　小林貴郎
　　監督員　金子明浩

4．出土品整理・報告書作成業務は富山市商工労働部企業立地推進室の委託を受けて、富山市教育委員会の監理のもとに大成エンジニアリング株式会社が実施した。

実施期間　平成14年７月14日～平成15年３月28日

5．自然化学分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に分析を依頼し、その成果を附編として掲載した。

6．本書の執筆担当は以下のとおりである。

Ⅰ・Ⅱ－２・Ⅲ・Ⅳ章　　小林貴郎
Ⅱ－１章　　小林高範

7．本書の挿図・写真の表示は次のとおりである。

⑴方位は真北、水平標準は海抜高である。
⑵遺構の表記は、竪穴住居：ＳＩ、掘立柱建物：ＳＢ、溝：ＳＤ、土坑：ＳＫ、ピット：Ｐ、不明遺構：ＳＸを用いた。
⑶出土品及び原図・写真類は富山市教育委員会が保管している。

8．本書の作成にあたり、下記の諸機関、諸氏から指導・助言・協力をいただいた。記して謝意を表します。（敬称略・順不同）

岡田　茂弘、平川　南、富山県埋蔵文化財センター、富山県立図書館、名古屋市博物館

目　次

Ⅰ　遺跡の位置と環境 …… 1

Ⅱ　調査の経緯 …… 4

Ⅲ　調査の概要 …… 6
　第１節　古代の遺構 …… 6
　第２節　近世の遺構 …… 50
　第３節　時期不明の遺構 …… 57
　第４節　包含層出土の遺物 …… 61

Ⅳ　調査のまとめ …… 63

附編　金屋南遺跡の自然科学分析 …… 68

写真図版１～10（遺構） …… 82
写真図版11～16（遺物） …… 92

Ⅰ　遺跡の位置と環境

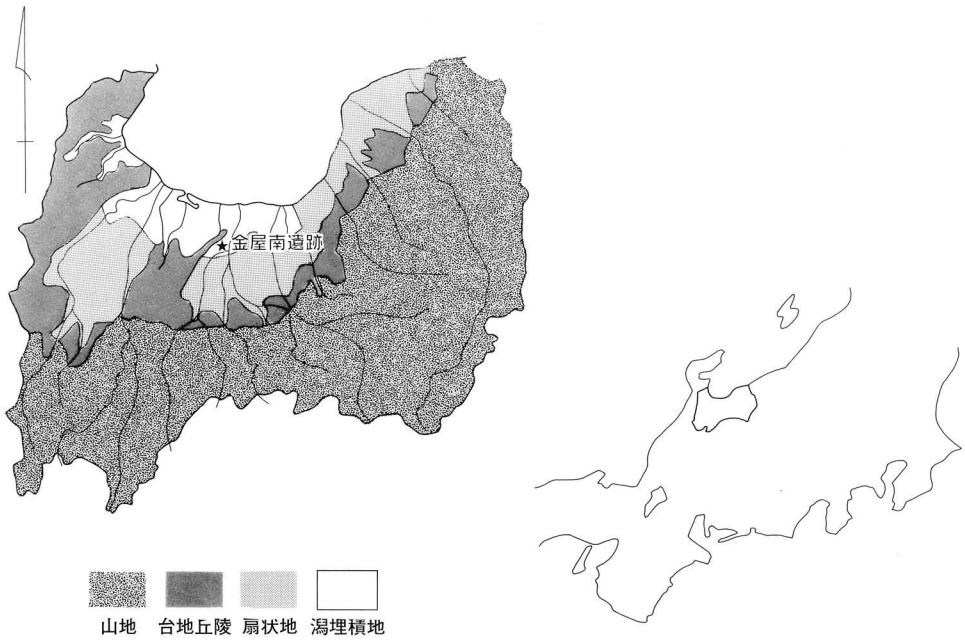
金屋南遺跡はＪＲ高山本線西富山駅の南西方向約２㎞、富山市南西端の金屋字川端地内に所在する。金屋周辺は、主要地方道富山・庄川線に沿って集落が連なり、その周囲には水田が展開する閑静なたたずまいを残している。しかし近年、金屋企業団地や分譲住宅の造成もはじまり、次第に都市化の進んできた地域でもある。

遺跡の西方約500mには呉羽山丘陵が南北に連なり、西の砺波平野と東の富山平野を分離している。南方約200mには井田川が蛇行しており、一帯の現状は標高11mを測る平坦地である。

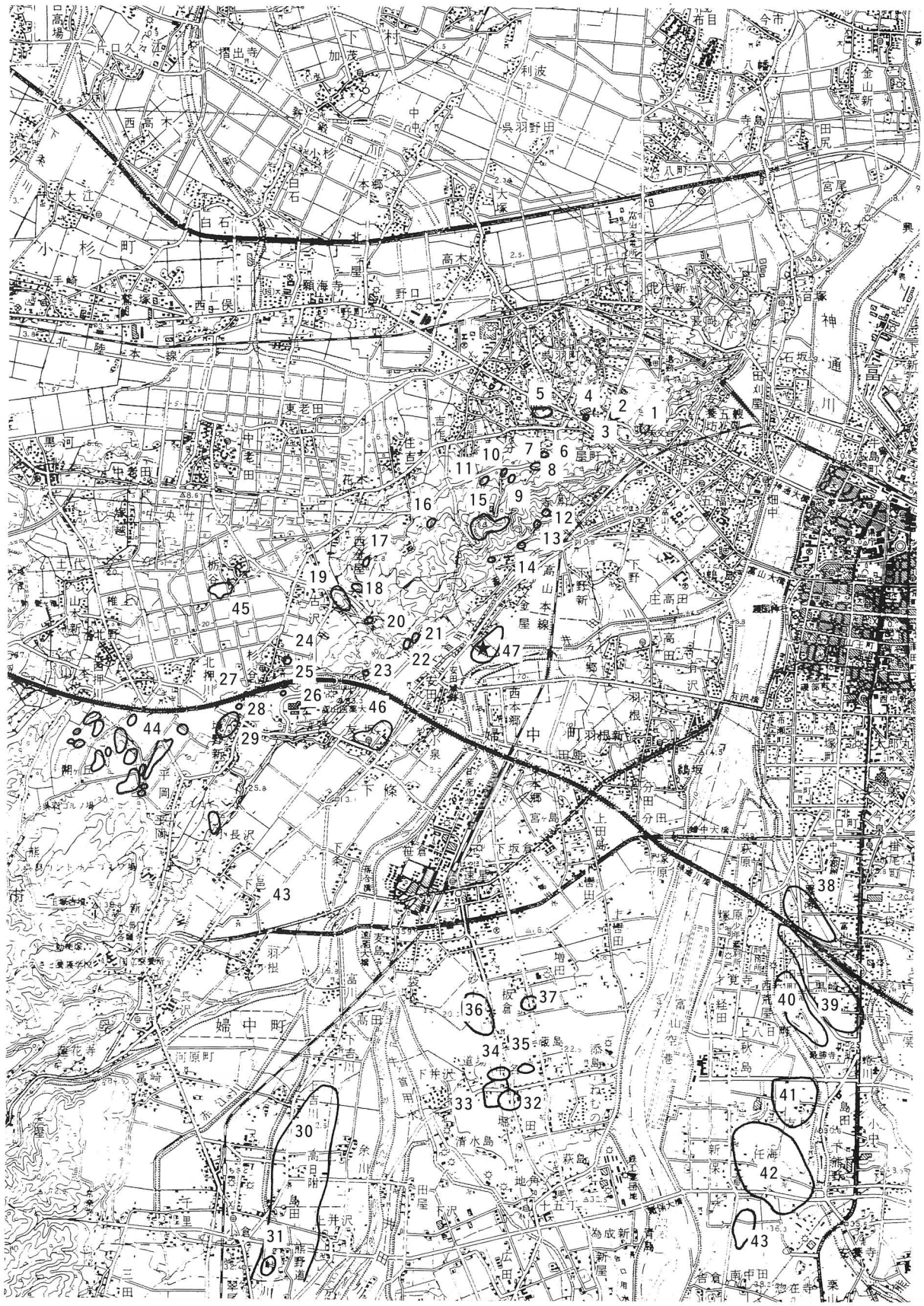
ここで、富山県全体の自然地形について概観してみる。富山県の地形を見ると、東部・南部には山地が、北部の臨海部には扇状地及び潟埋積地の平野が広がっており、その中間には帯状に台地・丘陵地が展開する。県内の平均標高は600mを超えるが、これは全国を見ても、富山県・岐阜県・長野県・群馬県・山梨県の５県のみであり、さらにこのうち富山県が唯一の臨海県である。この事実は山間部から平野部への傾斜が非常に急峻であることを物語っている。

遺跡が立地する富山平野は、太古の井田川や神通川・常願寺川など数多くの大小河川が形成した「複合扇状地」と海岸地帯にあたる「自然堤防帯・潟埋積地」に大別される。富山市金屋の地は、このうち「自然堤防帯・潟埋積地」上に立地するが、複合扇状地の先端部とは至近の位置にある。日本有数の多雨地帯を上流に持つ神通川や井田川の洪水により、多量の土砂がこの地にもたらされ、堆積したことにより、現状のような平坦な土地が形成されたことは想像に難くない。またその事実は、一方で、平坦な現状では把握できない土地の起伏が地中に眠っている事も同時に示す。

金屋南遺跡は古代・中世と、およそ二つの時期にわたる集落跡であるが、今回報告する地区の調査



第１図　富山県の自然地形


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47

第２図　周辺の遺跡分布

では主に平安時代の遺構を検出した。そのために、ここでは該期の主要な遺跡について概観する。

金屋南遺跡と同じく井田川の氾濫によって形成された自然堤防上に立地する遺跡としては、市境を越えた、本遺跡より南西２㎞の婦中町友坂地区に所在する友坂遺跡を挙げる事ができる。9次にわたる調査のうち、７次調査では遺跡の東端を画すると思われる谷状の落ち込みが検出され、ここに７世紀後半から９世紀初頭の須恵器、土師器が廃棄されていた。この谷状の落ち込みは井田川の旧流路であると思われるが、この落ち込みと今回検出された河川跡はおよそ延長線上に所在している。

東方に目を転じると、富山市南部の神通川と熊野川に挟まれた複合扇状地には任海宮田遺跡が所在する。９世紀前半が遺跡の中心と考えられ、礎石を持つ建物跡、大型の掘立柱建物跡や土師器焼成遺構が検出され、また多数の墨書土器が出土しており、地方豪族の居館跡等と考えられている。神通川左岸には婦中町中名Ⅰ遺跡、中名Ⅱ遺跡、中名Ⅳ遺跡などがあり、中世を主体としながら８～９世紀の古代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡などが検出され、金屋南遺跡と様相が似ている。

一方、西方の丘陵地では、金草第一古窯跡などの須恵器窯が早くから知られているが、最近の調査により、集落跡のほかに起伏の多い地形を利用した窯跡などの生産遺跡も発見されている。向野池遺跡では９世紀中葉から10世紀初頭にかけての掘立柱建物跡や井戸跡、土師器焼成遺構が検出されている。このうち井戸には焼成に失敗した瓦塔を一括投棄しており、検出された土師器焼成遺構で瓦塔が焼かれていた可能性が指摘されている。また開ヶ丘中遺跡では、およそ９世紀代と考えられる竪穴住居跡、掘立柱建物跡、礎石建物跡、土師器焼成遺構が検出されている。このうち礎石建物跡は瓦塔の出土と関連するものとされ、祀堂と考えられている。須恵器の焼成不良品も出土している事から須恵器生産との関わりが指摘されており、周辺の土師器生産の中心的な位置を占める工人集落と考えられている。

周辺の奈良・平安時代の遺跡　（番号は第２図に対応する）

1　富山市　安養坊遺跡
2　富山市　茶屋町峠山ノ下遺跡
3　富山市　茶屋町裏山遺跡
4　富山市　呉羽向開遺跡
5　富山市　呉羽モグラ池遺跡
6　富山市　茶屋町南Ⅰ遺跡
7　富山市　茶屋町南Ⅲ遺跡
8　富山市　呉羽町長谷遺跡
9　富山市　呉羽町大谷Ⅰ遺跡
10　富山市　追分茶屋大谷遺跡
11　富山市　吉作南Ⅳ遺跡
12　富山市　寺町城乗Ⅰ遺跡
13　富山市　寺町城乗Ⅱ遺跡
14　富山市　寺町大平下遺跡
15　富山市　白鳥城跡
16　富山市　金草Ｂ遺跡
17　富山市　西金屋スキー場遺跡
18　富山市　古沢Ａ遺跡
19　富山市　古沢遺跡
20　富山市　古沢東窯跡
21　富山市　古沢宮の山遺跡
22　富山市　法尻道遺跡
23　富山市　古沢塚山Ⅶ遺跡
24　富山市　杉谷北遺跡
25　富山市　杉谷Ⅱ遺跡
26　富山市　杉谷Ｈ遺跡
27　富山市　杉谷67遺跡
28　富山市　境野新遺跡
29　富山市　境野新南Ⅰ遺跡
30　婦中町　南部Ⅰ遺跡
31　婦中町　小倉雑水河原遺跡
32　婦中町　中名Ⅰ遺跡
33　婦中町　中名Ⅴ遺跡
34　婦中町　中名Ⅳ遺跡
35　婦中町　持田Ⅰ遺跡
36　婦中町　砂子田Ⅰ遺跡
37　婦中町　板倉Ⅱ遺跡
38　富山市　黒瀬大屋遺跡
39　富山市　黒崎種田遺跡
40　富山市　八日町遺跡
41　富山市　友杉遺跡
42　富山市　任海宮田遺跡
43　富山市　吉倉Ｂ遺跡
44　富山市　開ヶ丘地区の遺跡群
45　富山市　栃谷南遺跡
46　婦中町　友坂遺跡
47　富山市　金屋南遺跡

Ⅱ　調査の経緯

1　調査に至る経緯

平成５年12月、富山市金屋地内での遺跡分布調査により、金屋孫八遺跡、金屋南遺跡の２遺跡が新たに確認され、『富山市遺跡地図改訂版』に追加登載された。

平成６年に富山市では富山西インターチェンジ周辺開発事業として、金屋地内で企業団地を造成する計画（市商工労働部）を明らかにした。計画地にはこの２遺跡が含まれていたため、市教育委員会と市商工労働部で協議を行い、試掘確認調査を実施することとした。

試掘確認調査は、平成８年４月～５月に約69,000㎡を対象として実施した。調査により、２遺跡が約62,500㎡の範囲にまとまっており、同一遺跡であると確認されたため、「金屋南遺跡」として名称を統合した。遺跡は、全域に中世（鎌倉～室町時代）の遺構が広がり、南部の一部には平安時代の遺構の重複が確認された。

この調査結果をもとに工事計画との調整を行ったところ、幹線・区画道路、造成敷地部分について事前の発掘調査が必要であり、公園・緑地帯部分約5,300㎡は盛土保存することで協議が整った。

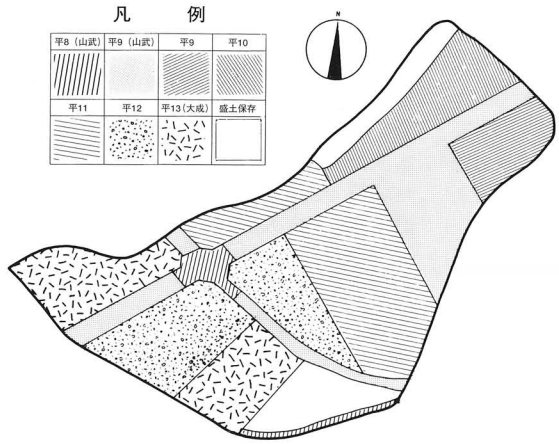
発掘調査は、平成８年度から13年度まで約57,200㎡を対象として実施した。平成８年度及び９年度調査の一部については、山武考古学研究所に発掘調査を委託し、市教育委員会が監理を行った（富山市教育委員会1999）。

平成９年度から12年度までは市教育委員会が発掘調査を実施した。調査により、溝で区画された短冊状の敷地に掘立柱建物、井戸、土壙が密集し、周囲に畠が広がるなど鎌倉～室町時代を中心とした計画的な集落構造が明らかになった。平成11年度の調査では、集落東側の川べりで溶解炉、廃滓場を確認した。廃滓場から鉄鍋や梵鐘の鋳型、炉壁、鉄滓、炭等が大量に出土し、室町時代後半（15世紀）に鋳物生産を行っていたことが判明した。また、溶解炉から15m離れた川の中から鏡や太刀部品の入った提子が出土した。一括出土の例としては初めてであり、文化庁主催の「発掘された日本列島2001－新発見考古速報展－」に取り上げられ、全国で巡回展示された。

平成13年度は、造成敷地部分約9,600㎡について、大成エンジニアリング株式会社に発掘調査を委託し、市教育委員会が監理を行った。13年度ですべての現地調査を完了した。

年度	面積㎡	主な遺構	主な遺物	備　考
8	2,200	土壙、溝、畠	土師器、須恵器、土錘、珠州焼、中世土師器、青磁、銅銭	受託：山武考古学研究所
9	15,200	堀立柱建物、井戸、土壙、溝、畠、道路	土師器、須恵器、土錘、珠州焼、中世土師器、八尾焼、青磁、銅銭、石製品	受託：山武考古学研究所
	2,940	堀立柱建物、土壙、溝	珠州焼、中世土師器、青磁、銅銭、越中瀬戸焼	堀立柱建物がまとまって検出
10	5,960	堀立柱建物、土壙、溝、畠	珠州焼、中世土師器、青磁、白磁、銅銭、越中瀬戸焼	
11	10,800	堀立柱建物、井戸、土壙、溝、畠、溶解炉、廃滓場、河川	須恵器、土師器、土錘、土馬、珠州焼、中世土師器、青磁、銅銭、馬歯、鋳型、炉壁、鉄滓、提子、鏡、太刀部品	鏡や太刀部品の入った提子が出土した
12	10,500	竪穴状遺構、堀立柱建物、井戸、土壙、溝、畠	須恵器、土師器、土錘、珠州焼、中世土師器、青磁、銅銭、漆椀、唐津（墨書「金屋右衛門」ヵ）	井戸の石組み内から漆椀が出土した
13	9,600	竪穴状遺構、堀立柱建物、溝、畠	須恵器、土師器、土錘、珠州焼、中世土師器、青磁	委託：大成エンジニアリング
計	57,200			

表　年度別調査一覧



第３図　年度別発掘調査区割図

2　調査の経過

平成13年度の調査対象地区は第３図に示した年度別発掘調査区割図に示したが、道路を挟んで東西に離れて所在している。調査時は便宜上の通称として東側をＡ区（ＫＹＭ５Ａ、約4,900㎡）、西側をＢ区（ＫＹＭ５Ｂ、約4,700㎡）と呼称し、同時並行して調査を実施した。本書はこのうちＢ区の調査成果に関する報告書である。ここではＢ区を中心に調査経過の概略を以下に示す。

なお、Ｂ区の調査は排土置き場を設定する理由から南北に二分割（Ｂ－１・Ｂ－２区）して行った。Ｂ－１区の調査時にはＢ－２区に、Ｂ－２区調査時には調査の完了したＢ－１区へと排土置き場を移動した。

調査日誌抄

平成13年５月10日	富山市教育委員会埋蔵文化財センターにて事前の打ち合わせを行う。
14日	現地にて事務所施設・トイレなどを設置。
16日	Ａ区、重機による表土掘削開始。
21日	Ｂ－１区、重機による表土掘削開始。
30日	全調査区の表土掘削完了。
31日	調査開始を前に全作業員を対象に安全講習会を実施。
６月１日	Ａ区、Ｂ－１区調査開始。整理作業も同時並行で開始する。
７月23日	Ｂ－１区調査完了
24日	Ｂ－１区航空測量・写真撮影を実施。
30日	Ｂ－１区埋め戻し、Ｂ－２区表土掘削開始。
８月８日	Ｂ－２区表土掘削完了。
８日	Ｂ－２区調査開始。
21日	大型の台風が接近。調査区の養生を徹底する。
９月７日	排水対策強化のため現場内の電力を増設する。
10月４日	Ｂ－２区航空測量・撮影。
10日	Ｂ－２区調査完了。
17日	Ａ区航空測量・撮影実施。
20日	市民対象の現地説明会を実施。約100名の参加を得る。
22日	引き続き調査を行う。整理作業に従事する作業員を増員する。
31日	Ａ区調査完了。
11月１日	整理作業に従事する作業員を増員する。
30日	整理作業完了。現地調査が完了した。
12月３日	現地事務所施設の撤去作業を開始する。
13日	施設の撤去を全て完了。現地の引渡しを行った。

Ⅲ 調査の概要

第１節　古代の遺構

検出した遺構の概要

平安時代の竪穴住居跡５棟、掘立柱建物跡１棟、柵列１基、土坑２基、畠畝遺構14群、土器祭祀遺構１ヶ所、河川跡１ヶ所、自然地形の落ち込み１ヶ所を検出した。出土した遺物の年代観から、ほとんどが９世紀後半から10世紀前半のものと考えられる。

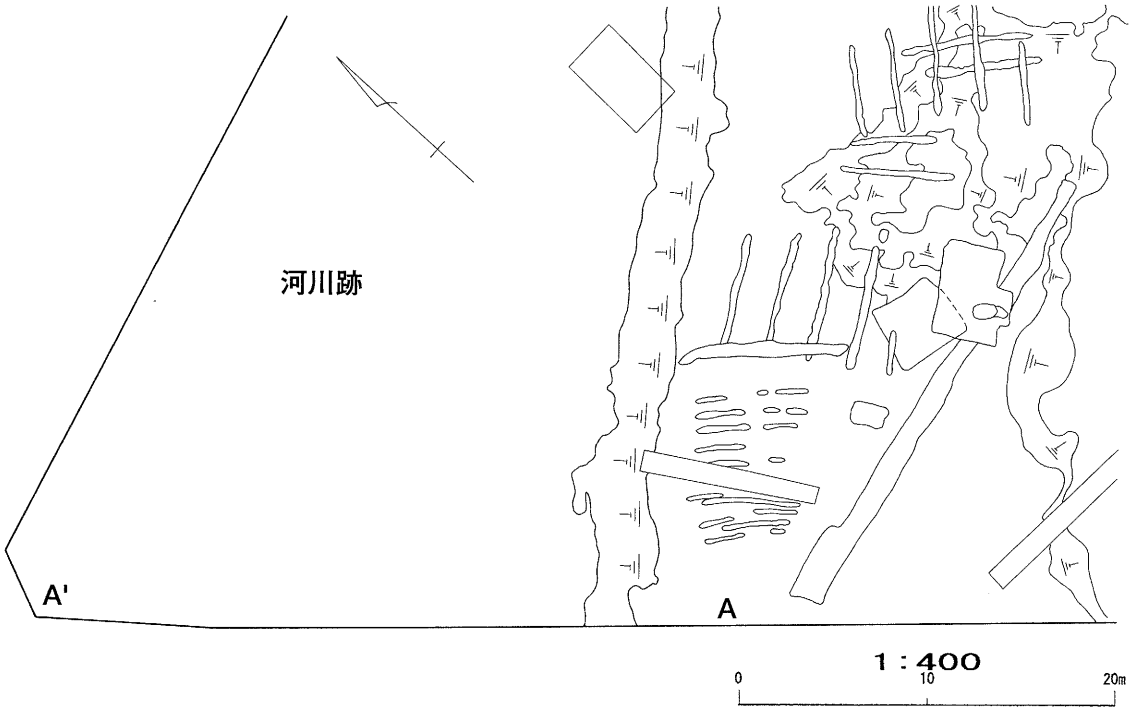
古代集落は現在の県道富山・庄川線に沿う形で南北に伸びると推定される自然堤防上に立地している。洪水による土砂流失によるものか、遺構、とりわけ竪穴住居跡の遺存状態は非常に悪く、その深度は20㎝に満たない。

検出した竪穴住居跡、掘立柱建物跡は、おしなべて西側の河川跡（流水を伴わない湿地の可能性もある）に沿うような配置をみせている。また、第４・５号竪穴住居跡は調査区東側の自然地形の落ち込みの真際に位置している。これらの事から、往時の自然地形による集落展開の立地的な制約を認めることが出来る。

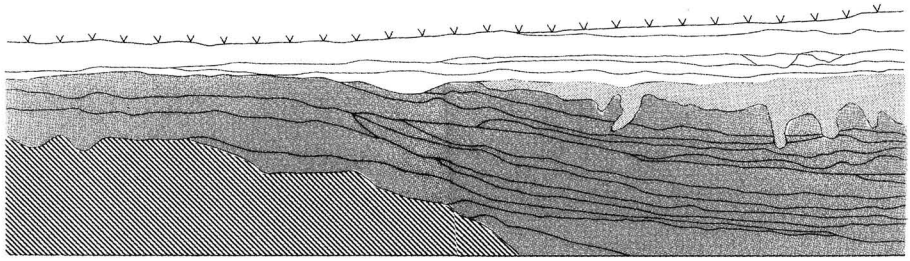
畠畝遺構は、方向性や重複関係から、計14グループのまとまりを確認した。出土遺物がごく僅かではあるが、河川跡の土層断面で確認した古代の洪水堆積土（黄褐色土）に覆土がほぼ近似する事から、古代の所産ととらえた。

土坑では、土錘が大量に出土した第5号土坑、土師器の甕の底部を蓋にした小甕を埋納した第53号土坑などバラエティーに富んだものを検出した。

土器祭祀遺構は、河川跡の掘り込み（肩）が少し河川跡側に入った位置で検出した。祭祀遺構



第４図　河川跡周辺（Ｓ＝1/400）



・・・　中世遺物包含層？

・・・　古代遺物包含層

・・・　遺跡基盤層（地山）

第５図　基本層序（Ｓ＝1/100）

は、７つの土師器の椀（うちひとつには「北」の朱書きがある）と炭化物集中区で構成されている。

基本層序

ここでは、河川跡の土層断面図を用いて遺跡の基本層序を捉え、今回報告する調査区のみでなく金屋南遺跡の環境全般について年代観をまじえてその解釈を試みたい。（土層番号は、第７図　河川跡土層断面図のものによる）

１層は地山とした基盤層で、遺構確認面である。既刊の報告書（富山市教育委員会1999）では「浅黄色シルト」と報告されている層に相当するものと思われる。

２層から19層は古代遺物包含層である。４層以下19層に至るまで草木腐食土と洪水堆積土が交互に堆積する。現地調査時に実施した自然科学分析では、草木腐植土中からイネ科やナデシコ科などの植物遺体が検出された。また、５層などからは井田川上流域の八尾累層・音川累層といった海成層から流出してきたものと考えられる海水生種が多量に検出された。これは同層が、洪水によって上流域からもたらされた洪水堆積土である事を示している。後述する土器祭祀遺構（１号不明遺構）は４層中で検出した。よって本遺構が指標する、９世紀末から10世紀初頭という年代を４層に与える事が可能である。

20層は草木腐食土である。同質の21層～24層を含めると、他層に比べ圧倒的な厚さをもって堆積している。これは堆積した時期がこの地に洪水の影響を受けずに草木類が安定して生育し得た環境であった事を強く示唆している。そこで、この地の洪水を防ぐ何らかの治水事業が行われた可能性を考える事ができる。これまでの発掘調査の成果により、この地に治水事業を行い得る規模の人の営みが認められるのは、金屋南遺跡が大規模鋳造集落であった15世紀であることが判明しており、年代を示す土器の出土がないものの、20～24層の堆積時期をおよそ15世紀以降に比定し得ると考えたい。また、20層からイネ属が検出された事から水稲耕作が行われていた可能性を指摘できる。

ちなみに、大型掘立柱建物跡と同時期であると考えられる１号溝状遺構は、水田耕作土直下の本層（23層に相当か）より掘り込まれている。

25層～33層は水田耕作土で、調査時は重機により除去した。土層観察によると26層の堆積に至りこの河川跡は窪地でなくなり、水田が広がる平坦な景観が現出されたようである。34層の、およそ

３ｍ間隔に溝が走るという有り様は畝などを惹起させる。年代については、調査区周辺が企業団地造成前には水田であった事から、最上面の33層がごく最近のものである事は確かだが、最下面の25層・26層については出土遺物にも恵まれず具体的には不明である。ただし、周辺の状況などから推定すると近世初頭の17世紀前半になる可能性がある。

河川跡

以上の層序観察によって得られた情報をまとめ、以下に各時代の河川跡の姿について述べる。

今回検出した河川跡は調査区のほぼ1/3を占める。一方の岸辺を確認したが、その対岸はさらに西方の呉羽山丘陵方向にあると考えられるが、現状の観察からはその存在をうかがい知る事はできない。

遺構確認面を追って精査を進めた結果、標高11.00ｍの等高線ラインを頂点に西方になだらかな傾斜をみせた。４層中より９世紀末～10世紀初頭の土師器椀が出土したが、同層が草木腐食土層である事をふまえると古代集落があった頃の河川跡の姿は、深さ１ｍ以上の窪地ではあったが標高11ｍ、つまり地表面付近にまで植物が生い茂る湿地であったと考えられる。

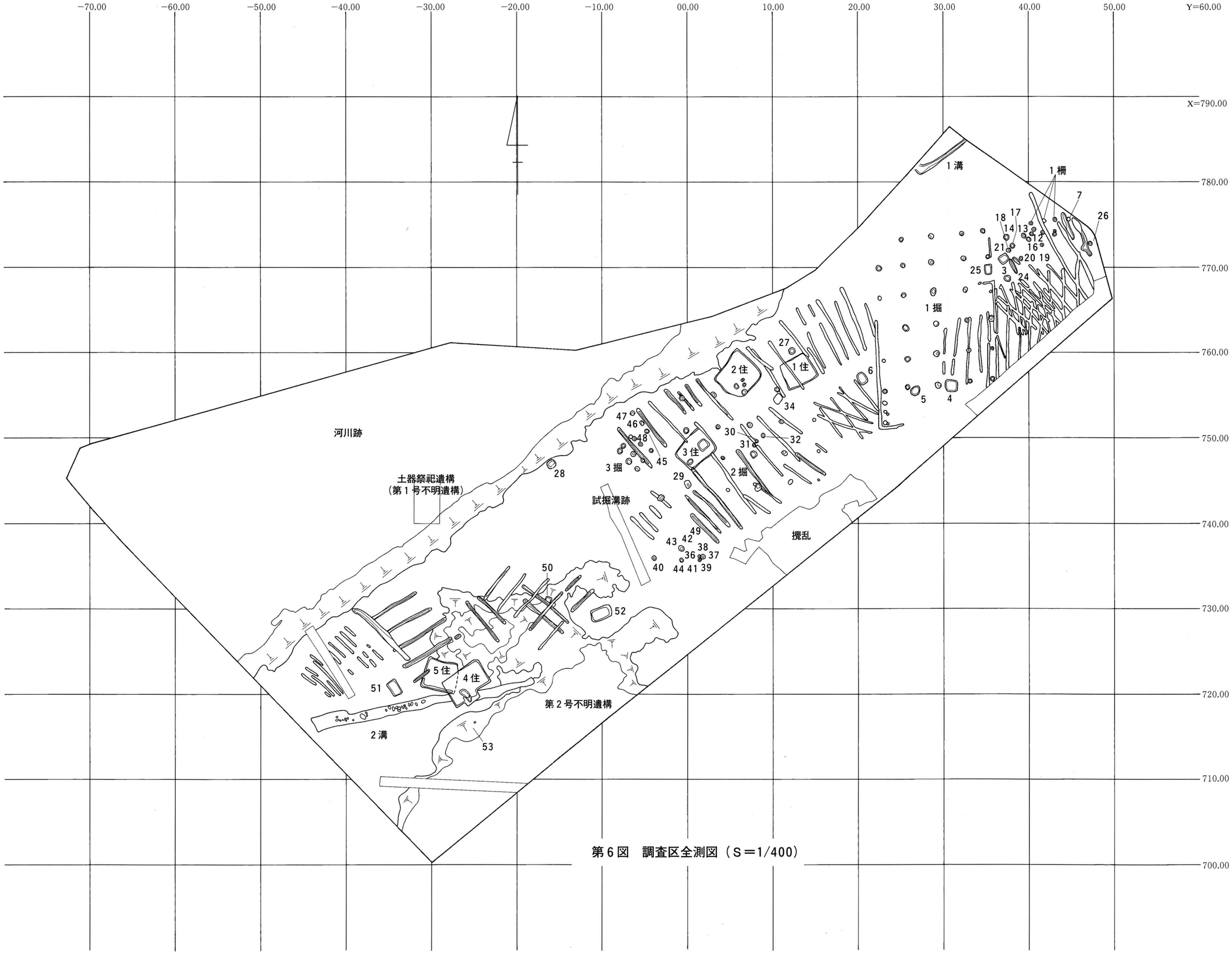
その後、中世に至るまでにこの地は８回の洪水を経験している。その間に堆積した土の厚さは確認しただけでも２ｍを超える。15世紀に至り、中世大集落が築かれて再び人々の生活がこの地に営まれると、治水事業が進んだのか、この地に洪水の痕跡を確認できなくなる。集落の中心は遺跡の東側であり本調査区はムラのはずれであったようで、この河川跡も古代のものとさほど規模を変えず、草木が生い茂る深さ１ｍほどの湿地であったようだ。ただし、前述したとおり、中世集落に伴う水田が営まれていた可能性がある。

中世集落廃絶の後、近年に至るまでこの地は水田になったようで、計８面の水田面を確認することができた。この時点において河川跡の窪地は均されてしまい、現在のような一面の平坦な地形が現出されて、人々の記憶から河川跡の存在は忘れ去られたようである。

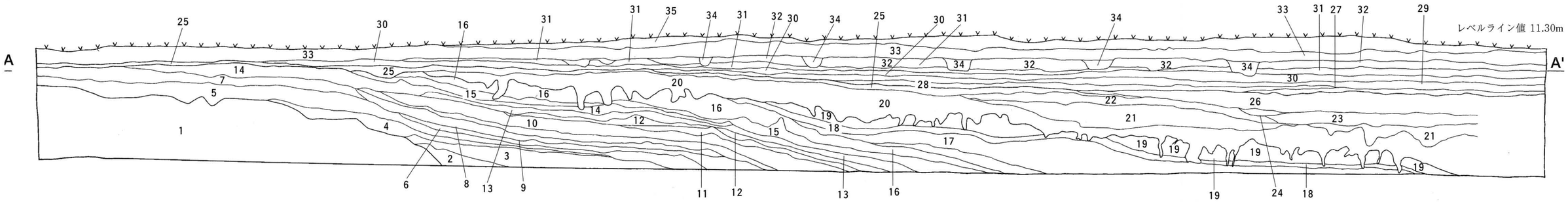
ちなみに調査終了間際に、河川跡の底を探るべく試掘溝を設定して掘削を試みた。軟弱な土質で絶えず土砂の崩落があったため図化記録ができなかったが、以下にその観察記録を書き留めておく。

基盤層の１層は標高約９ｍの深さに至り、水平堆積に移る。その上面には変わらず草木腐食土の４層が約20㎝の厚さで堆積する。流水の存在をしめす砂粒などの痕跡は確認されなかった。１層の下方には約１ｍの厚さで、酸化鉄を多く含んだ青灰色粘土が堆積している。さらにその下方の標高約9.40ｍでは、酸化した赤銅色を呈す砂礫層に至る。これは湧水帯にあたりその水量は激しく、排水ポンプを設置しなければ5ｍ×10ｍの試掘溝が半日で満水になる有り様であった。この地山１層以下の二つの層も、上方層と同様、西に向かって傾斜をみせている。おそらくこの二つの層が堆積した時点、すなわち古代以前の井

河川跡下層断面状況



第6図　調査区全測図（S＝1/400）

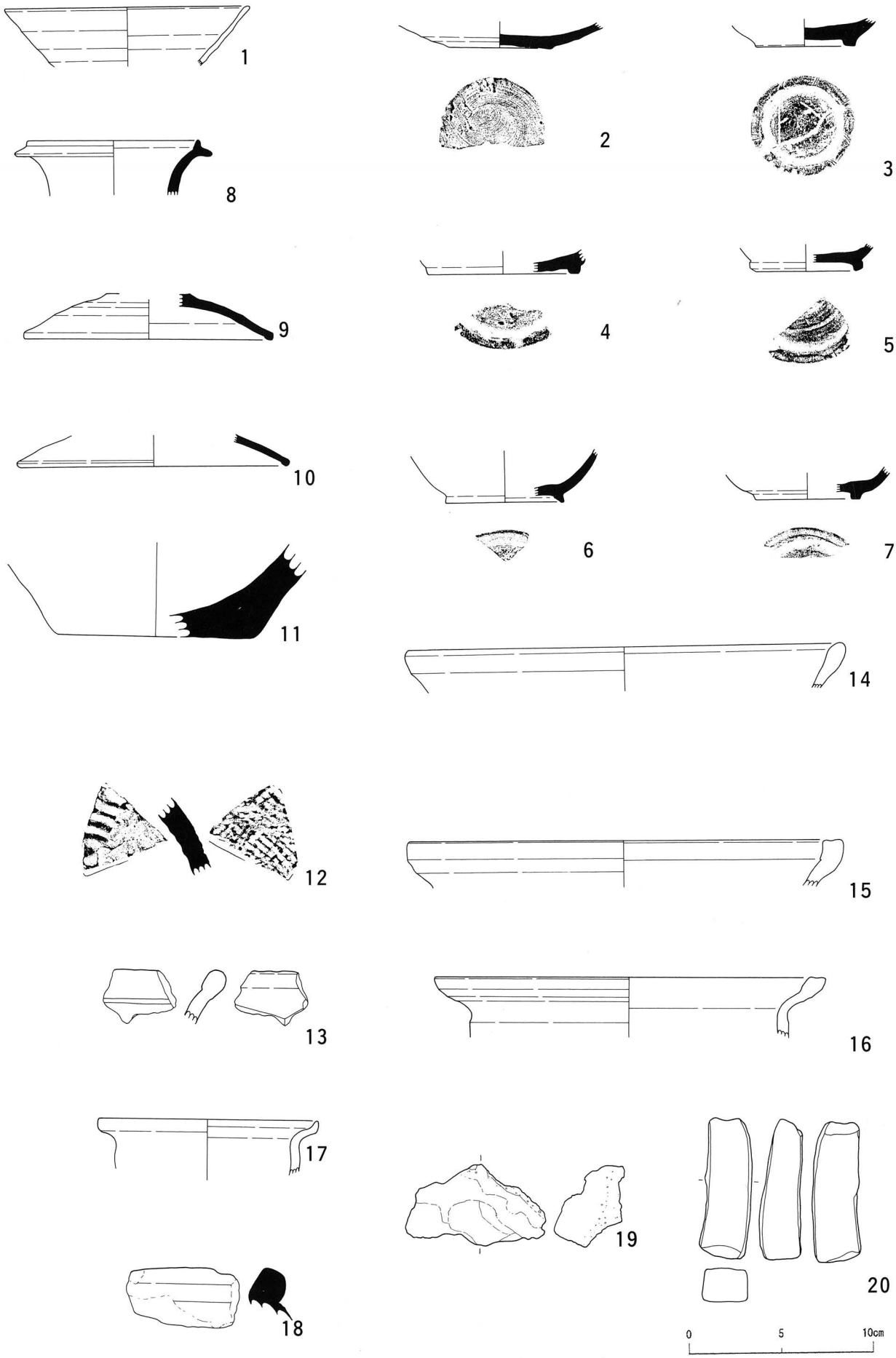


河川跡(基本層序)土層注記

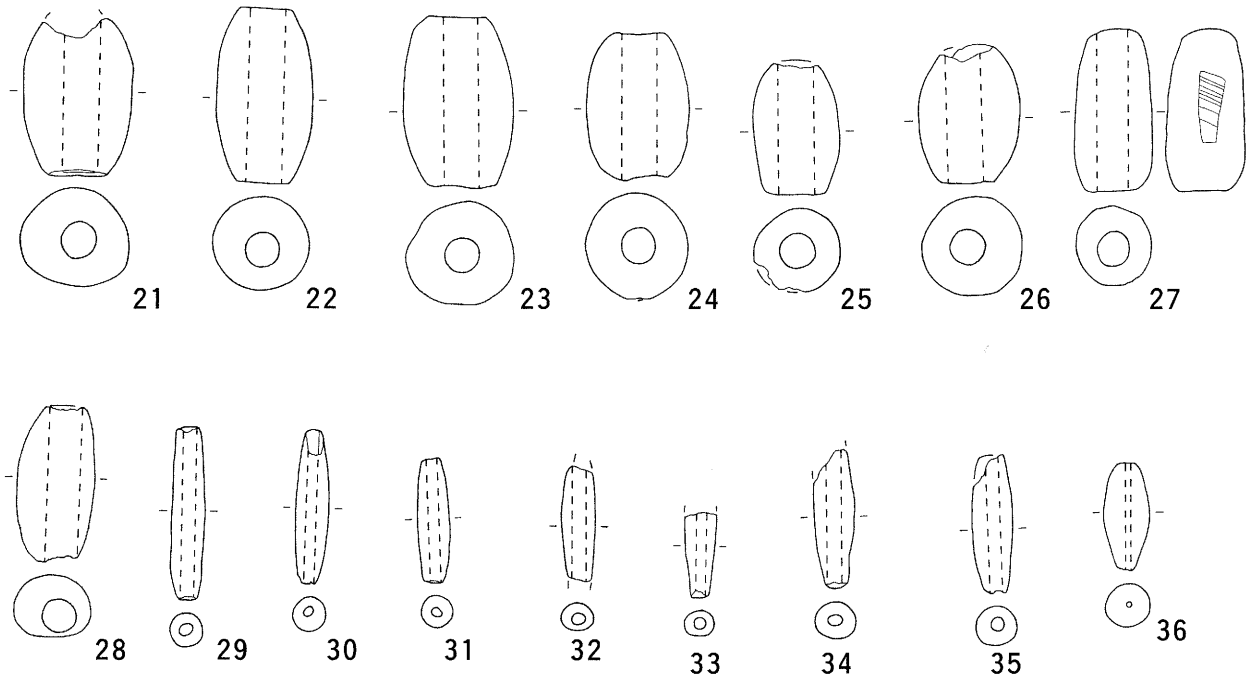
1	灰オリーブ色土	シルト質。下方になるにつれ色調は明るくなる。しまり良い。 最上面が遺構確認面。地山。
2	オリーブ黄色土	砂質。しまり悪い。酸化鉄ブロック混入。1層地山が崩落したもの。
3	オリーブ黄色土	2層に近似するものの炭化物(少量)混入。
4	黄灰色土	粘性あり。しまり悪い。炭化物(多量)混入。[草木腐食土]
5	黄褐色土	粘性あり。しまり良い。炭化物(極微量)混入。[洪水堆積土]
6	黄灰色土	粘性あり。しまり悪い。炭化物(多量)混入。[草木腐食土]
7	黄褐色土	5層に近似する。しまりはさらに良く、混入物皆無。[洪水堆積土]
8	黄褐色土	粘性あり。しまり良くない。炭化物(微量)混入。7層が崩落したものか。
9	黄灰色土	粘性あり。しまり悪い。炭化物(多量)混入。[草木腐食土]
10	にぶい黄褐色土	粘性あり。しまり良い。[洪水堆積土]
11	黄灰色土	粘性あり。しまり非常に悪い。炭化物(多量)混入。[草木腐食土]
12	にぶい黄褐色土	粘性あり。しまり悪い。炭化物(少量)混入。[洪水堆積土]
13	暗灰黄色土	粘性あり。しまり悪い。炭化物(多量)混入。[草木腐食土]
14	灰黄褐色土	しまり良い。炭化物(微量)混入。酸化鉄(少量)含む。[洪水堆積土]
15	黄灰色土	粘性あり。しまり悪い。炭化物(多量)混入。[草木腐食土]
16	灰黄色土	粘性あり。しまり良い。炭化物・酸化鉄粒(微量)混入。[洪水堆積土]
17	灰黄色土	砂質。しまり良い。混入物皆無。[砂質=洪水堆積土?]
18	明黄褐色土	粘性あり。しまり良い。混入物皆無。[洪水堆積土]
19	灰黄褐色土	粘性あり。しまり良い。炭化物(極微量)混入。[洪水堆積土]
20	褐灰色土	粘性あり。しまりよい。14層が粒子状に多量混入する。[草木腐食土]
21	にぶい黄褐色土	粘性あり。しまり良い。基本的に20層と同質。[草木腐食土]
22	灰黄褐色土	粘性あり。しまり良い。[草木腐食土]
23	にぶい黄褐色土	粘性あり。しまり良い。炭化物(少量)混入。[草木腐食土]
24	にぶい黄褐色土	23層と同質。混入物皆無。[草木腐食土]
25	灰褐色土	しまり良い。ガチガチ。酸化鉄粒子(少量)混入。[水田耕作土]
26	明褐灰色土	粘性あり。しまり良い。最下部に酸化鉄が帯状に堆積する。[水田耕作土]
27	灰褐色土	粘性あり。しまり良い。最下部に酸化鉄が帯状に堆積する。[水田耕作土]
28	灰褐色土	粘性あり。しまり良い。最下部に酸化鉄が帯状に堆積する。[水田耕作土]
29	灰褐色土	粘性あり。しまり良い。最下部に酸化鉄が帯状に堆積する。[水田耕作土]
30	灰褐色土	粘性あり。しまり良い。最下部に酸化鉄が帯状に堆積する。[水田耕作土]
31	灰褐色土	粘性あり。しまり良い。最下部に酸化鉄が帯状に堆積する。[水田耕作土]
32	灰褐色土	粘性あり。しまり良い。最下部に酸化鉄が帯状に堆積する。[水田耕作土]
33	灰褐色土	粘性あり。しまり良い。最下部に酸化鉄が帯状に堆積する。[水田耕作土]
34	灰白色土	粘性あるもののしまり無い。酸化鉄粒(多量)混入。
35	表土	

0　1　6m

第７図　河川跡土層断面図（Ｓ＝1/100）



第８図　河川跡出土遺物（Ｓ＝1/3）



第９図　河川跡出土遺物（Ｓ＝1/3）

0　5　10cm

河川跡出土遺物

遺物番号	出土地点	種別	器種	口径(基径)	底径	器高	重量(g)	胎土混入物	焼成	形態・手法の特徴・その他
1	河川跡	土師器	椀か	(13.5)				白色砂粒	良	ロクロ調整痕明瞭。内面赤彩？
2	河川跡	須恵器	皿か		(5.7)			白色砂粒	良・堅緻	底部右回転糸切り痕。
3	河川跡	須恵器	坏B		5.4				不良	付高台。底部回転糸切り痕。摩滅顕著。
4	河川跡	須恵器	坏B		(8.3)			白色針状物質	やや不良	付高台。底部回転糸切り痕。摩滅顕著。
5	河川跡	須恵器	坏B		(5.5)			白色針状物質	やや良	付高台。底部回転糸切り痕。摩滅顕著。
6	河川跡	須恵器	坏B		(3.5)			白色砂粒	良・堅緻	付高台。
7	河川跡	須恵器	坏B		(5.7)			白色砂粒・白色針状物質	良・堅緻	付高台。
8	河川跡	須恵器	長頸壺	(9.4)					良・堅緻	
9	河川跡	須恵器	蓋	(13.8)				白色針状物質	やや良	口辺外面にナデ調整。端部やや丸みを帯びる。
10	河川跡	須恵器	蓋	(15.1)					やや良	
11	河川跡	須恵器	壷の底部か		(10.9)			白色砂粒・白色針状物質	やや良	
12	河川跡	須恵器	甕					白色砂粒	やや不良	体部内外面ともに当て具痕
13	河川跡	土師器	鍋か					白色砂粒	良	口縁端部を折り返し丸く成型。
14	河川跡	土師器	鍋か	(24.2)				白色針状物質	良	口縁端部を折り返し丸く成型。
15	河川跡	土師器	鍋か	(24.1)				白色砂粒	やや良	口縁端部を折り返し方形に成型。
16	河川跡	土師器	甕	(21.6)				白色砂粒	やや良	口縁端部を折り返し方形に成型。
17	河川跡	土師器	小型甕	(12.2)					不良	屈曲した口縁端部が直立する。
18	河川跡	須恵器	甕					白色砂粒	やや良	口縁部破片。摩滅顕著
19	河川跡	鉄滓					70.2g			
20	河川跡	砥石					85.0g			全ての面が磨耗

遺物番号	出土地点	種別	器種	全長	外径	孔径	重量(g)	胎土混入物	焼成	形態・手法の特徴・その他
21	河川跡	土錘		6.2	4.2	1.4	86.3	白色砂粒	やや良	
22	河川跡	土錘		6.9	3.8	1.4	86.6	白色砂粒	やや良	
23	河川跡	土錘		6.8	4.3	1.4	97.2	白色砂粒	やや良	
24	河川跡	土錘		5.8	4.1	1.4	87.6	白色砂粒	やや良	
25	河川跡	土錘		5.2	3.4	1.4	45.8	白色砂粒	やや不良	
26	河川跡	土錘		5.45	4.0	1.4	70.1	白色砂粒	やや良	
27	河川跡	土錘		6.4	3.1	1.35	58.4	白色砂粒	やや良	中位に整形痕？
28	河川跡	土錘		6.1	3.0	1.3	35.1	白色砂粒	良	
29	河川跡	土錘		6.8	1.3	0.6	10.0	白色砂粒	良	
30	河川跡	土錘		6.1	1.3	0.4	8.5	白色砂粒	やや良	
31	河川跡	土錘		4.9	1.25	0.4	7.4	白色砂粒	良	
32	河川跡	土錘			1.3	0.55	6.5	白色砂粒	やや良	
33	河川跡	土錘			1.25	0.4	3.8	白色砂粒	やや良	
34	河川跡	土錘		5.45	1.6	0.6	11.3	白色砂粒	良	
35	河川跡	土錘		5.4	1.6	0.5	11.1	白色砂粒	良	
36	河川跡	土錘		5.8	4.1	1.4	87.6		やや良	

田川は現在のように遺跡の南方で東に蛇行することなく、そのまま直進ないしは西方に流れており、この作用によって古代集落が立地することになる自然堤防が形成されたのではないだろうか。結果、この微高地に流れを遮られた井田川は東にその流れを変えて、現在のような流路を形成したのであろう。

出土遺物量は掲載分も含めて、須恵器片57点、土師器片268点、土錘16点、陶器15点、鉄滓１点、小石19点である。

図版には掲載していない出土遺物のうち、陶器は近世の越中瀬戸焼の破片であると思われるが、ほとんどが図化不可能な程の小破片ばかりである。その他には径10～15ｃｍの川原石が2層から24層を掘削する中で出土した。洪水に伴い流れてきたものであろう。

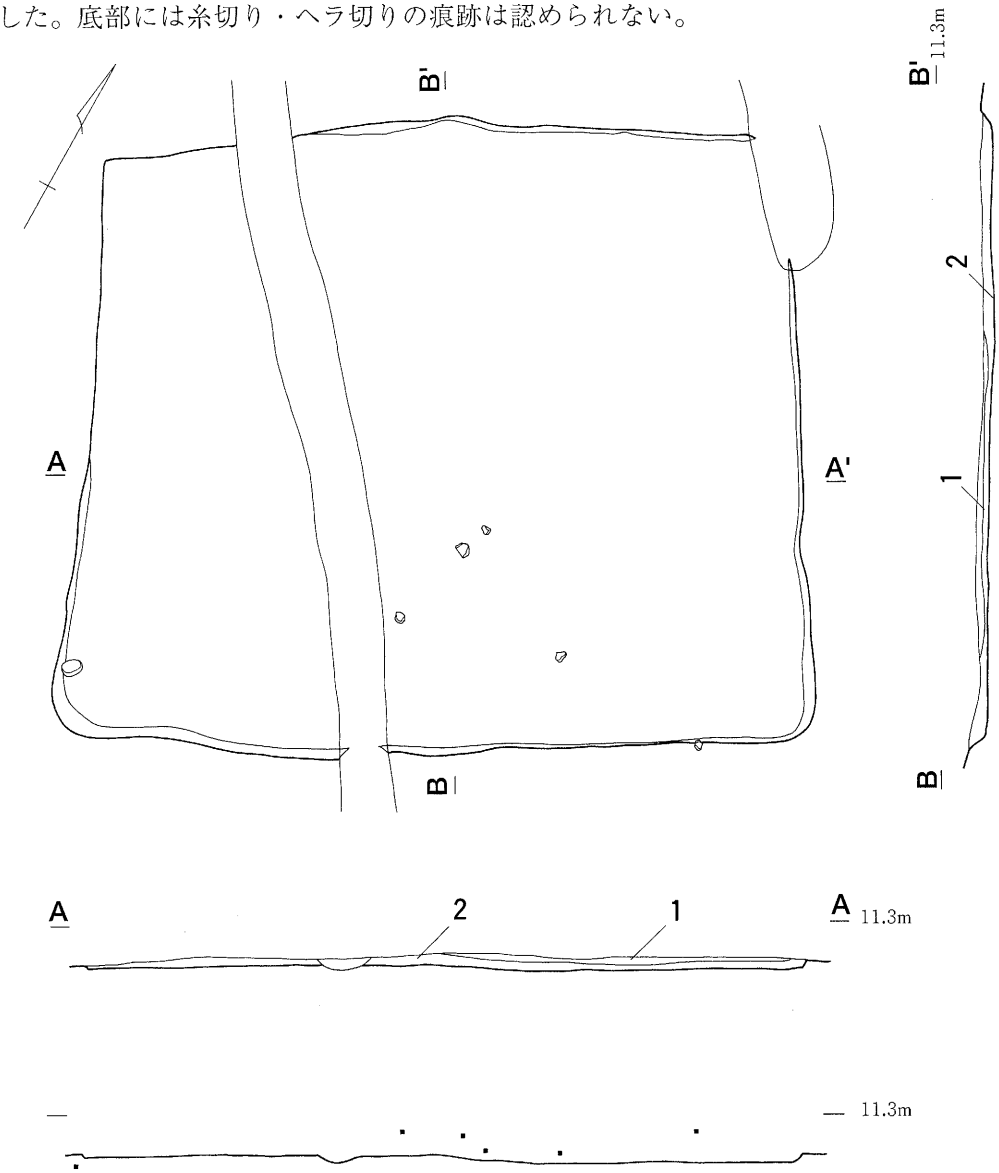
遺物の年代は４層の９世紀末～10世紀初頭におおよそ比定できる。摩滅の激しい破片もある事から、中には上流の別集落から流れ込んだものも含まれる可能性はある。土錘も例えば１ヶ所にまとまって出土するという事はなく、河川跡全体から漫然と出土した。

第１号住居跡

調査区中央やや東側で検出した。第２～３号住居跡や第３号掘立柱建物跡で構成される、河川跡きわの遺構群のうちのひとつである。畠畝跡第４群と重複し、これに前出する。全面にわたって削平されており、遺構確認面から床面へは６㎝程の深さを残すのみである。カマドや柱穴、壁周溝といった施設は検出されない。貼り床も構築されず、遺構の掘り方をそのまま床面として使用していたようだが、硬化面は確認されなかった。覆土には黄褐色シルトが充填されており、自然堆積の様相を呈している。

出土遺物は少なく、掲載分も含めて須恵器片1点と土師器片５点が出土したのみである。そのほとんどが覆土の中～上位よりの出土で、僅かに掲載した壺の底部（37）の１点のみが床面近くより

出土した。底部には糸切り・ヘラ切りの痕跡は認められない。



第１号住居跡

1　黄褐色土　　しまり良くない。炭化物(微量)混入。

2　黄褐色土　　1層に比して色調が暗い。炭化物・焼土粒子(少量)混入。

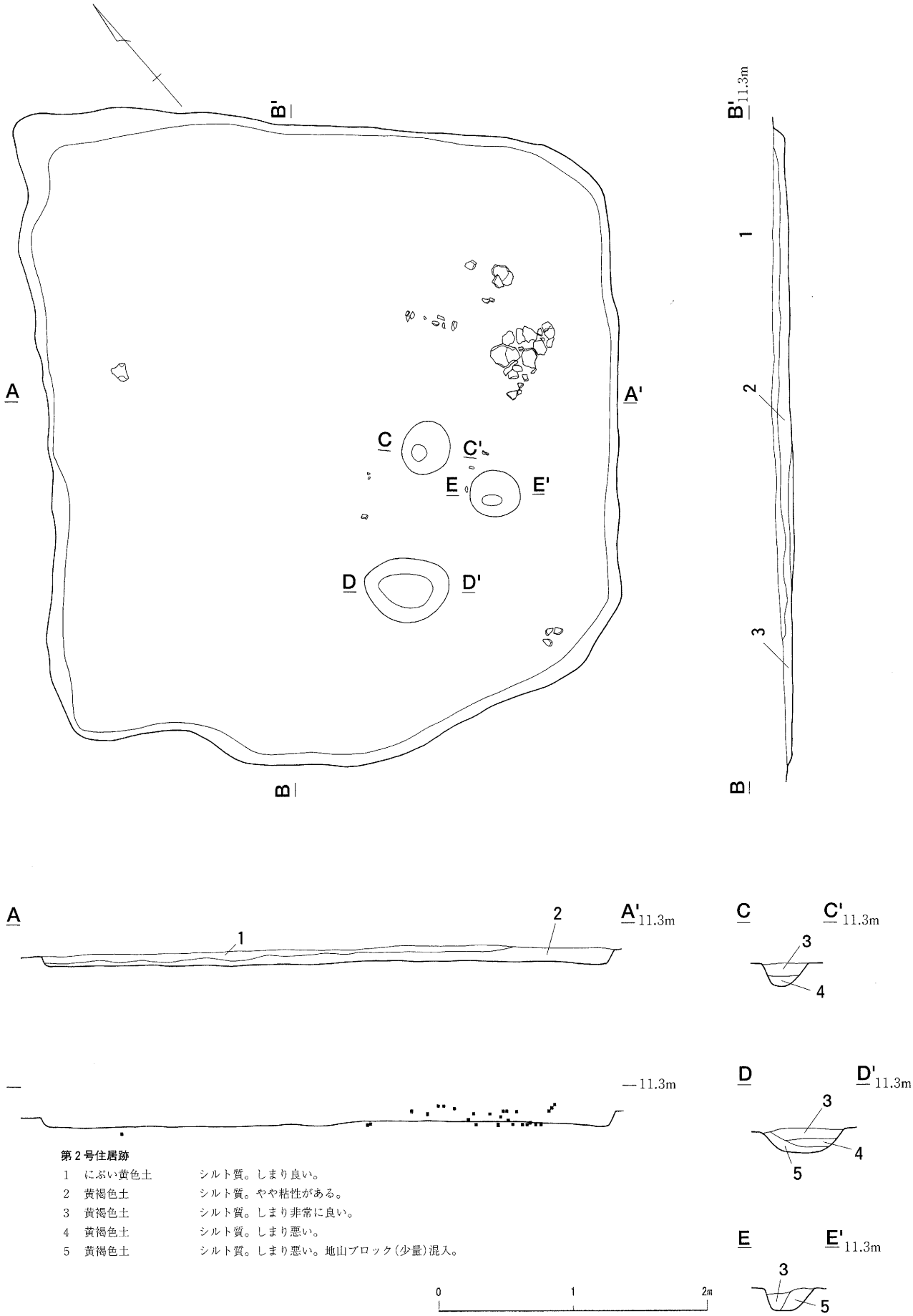
0　1　2m

第10図　第１号住居跡（Ｓ＝1/40）

第11図　第１号住居跡出土遺物（Ｓ＝1/3）

第１号住居跡

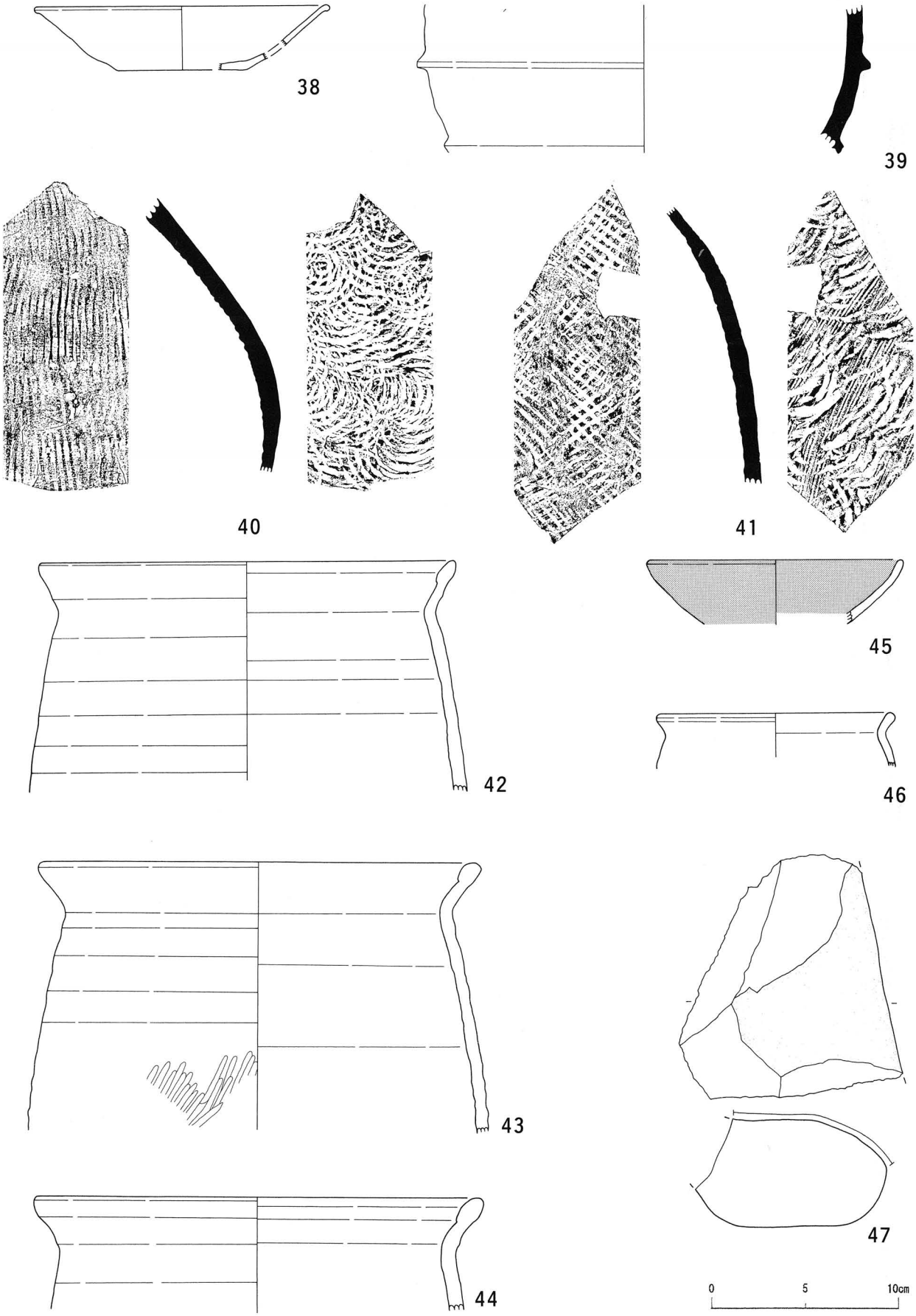
遺物番号	出土地点	種別	器種	口径(基径)	底径	器高	重量(g)	胎土混入物	焼成	形態・手法の特徴・その他
37	1号住居跡	須恵器	壷		(6.4)			白色砂粒	良・堅緻	付高台。



第２号住居跡

1	にぶい黄色土	シルト質。しまり良い。
2	黄褐色土	シルト質。やや粘性がある。
3	黄褐色土	シルト質。しまり非常に良い。
4	黄褐色土	シルト質。しまり悪い。
5	黄褐色土	シルト質。しまり悪い。地山ブロック(少量)混入。

第12図　第２号住居跡（S＝1/40）



第13図　第２号住居跡出土遺物（Ｓ＝1/3）

第２号住居跡

調査区中央やや東側で検出した。前述の河川跡きわの遺構群のうちのひとつである。平面形態はやや不整の方形を呈しており、第１号住居跡ほどではないが全面に削平を受けている。

カマドや壁周溝などの施設は検出されなかった。遺構中央よりやや南方にはピットを３基検出した。その配置から３本の柱（大型の１本を小型の２本が支えるような）の姿を惹起させるが、土層断面では柱痕等その痕跡を見つけ出す事ができなかった。

貼り床は構築されず、掘り方をそのまま床面として使用していたようだ。硬化面は土器が集中して出土した付近に、部分的に認められたが全面には広がらない。覆土には第１号住居跡と同質な黄褐色シルトが充填されており、自然堆積の様相を呈している。

出土遺物量は掲載分も含めて、土師器片22点、須恵器片４点、石製品２点である。掲載した遺物はすべて床面直上もしくはその付近より出土した。

38は土師器の皿である。非常に薄手で他の埦とは異質な印象を受ける。39は双耳瓶の体部破片である。第４号住居跡出土(61)に後出する形式である。45は土師器の埦で、内外面に赤彩を施している。47は石製品で、全面を磨耗しており床直上から出土した事を考えあわせて砥石として用いられたと判断した。

２号住居跡出土遺物

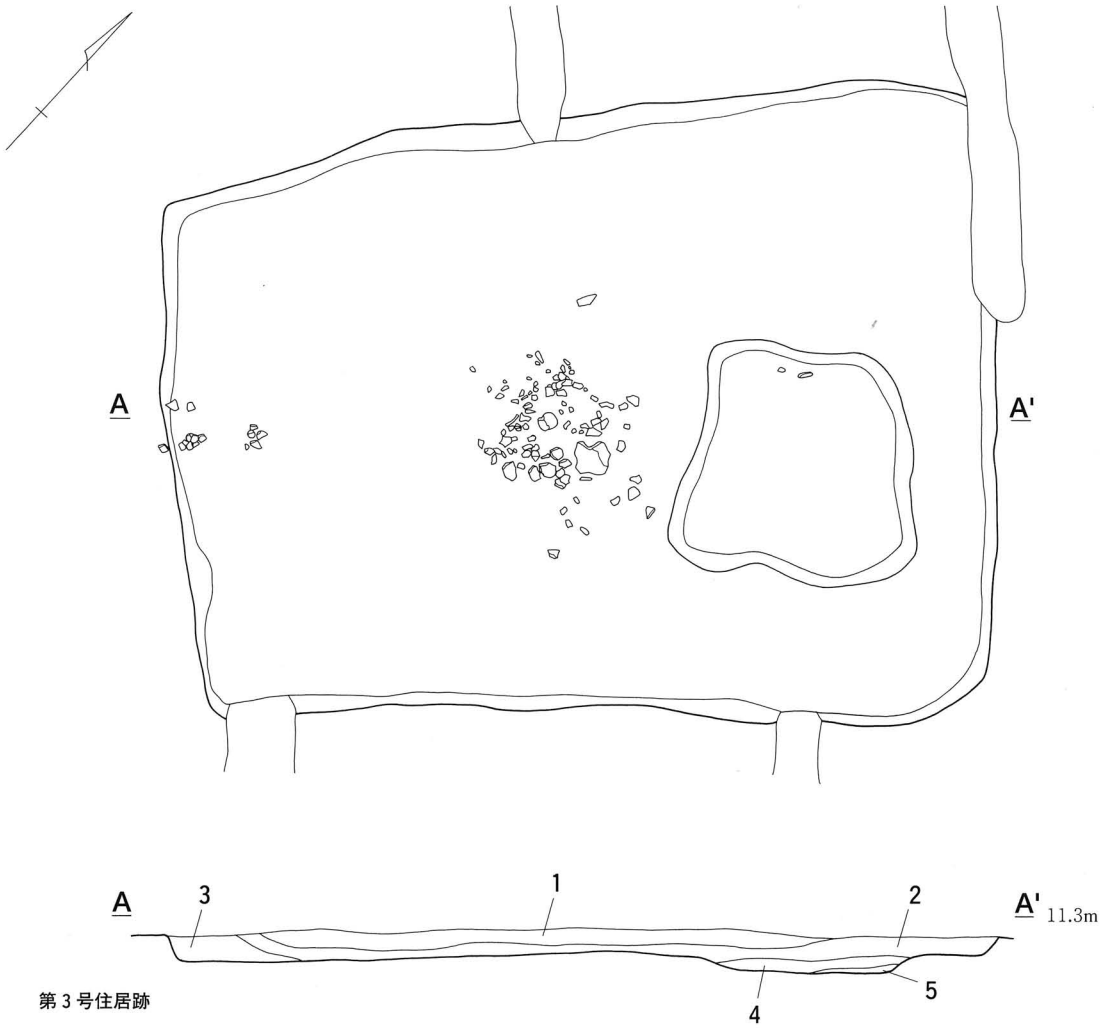
遺物番号	出土地点	種別	器種	口径(基径)	底径	器高	重量(g)	胎土混入物	焼成	形態・手法の特徴・その他
38	2号住居跡	土師器	皿か	(15.1)	(6.8)	(3.5)		白色砂粒・白色針状物質	やや良	底部回転糸切り痕。摩滅顕著。
39	2号住居跡	須恵器	双耳瓶					白色砂粒	不良	
40	2号住居跡	須恵器	甕					白色砂粒・白色針状物質	良・堅緻	肩～体部上方。自然釉かかる。
41	2号住居跡	須恵器	甕					白色砂粒	良・堅緻	体部破片。内外面に叩き・当て具痕。
42	2号住居跡	土師器	甕	(26.5)				白色砂粒・白色針状物質	良	
43	2号住居跡	土師器	甕	(24.1)				白色砂粒	良	胴部中位にヘラ削り調整。
44	2号住居跡	土師器	甕	(24.2)				白色砂粒	良	
45	2号住居跡	土師器	埦	(14.0)				白色砂粒	やや良	内外面に赤彩？
46	2号住居跡	土師器	小型甕	(13.0)				白色砂粒	やや良	口縁部内面に煤付着。
47	2号住居跡	砥石？					1151.3			表面が磨耗している。

第３号住居跡

調査区のほぼ中央で検出した。前述の河川跡きわの遺構群のうちのひとつである。畠畝跡第７・９群と重複し、これらに前出する。カマドや壁周溝は検出されなかった。遺構中央より東側には不整の隅丸方形のくぼみがある。土層断面の観察によると住居跡本体と同時に自然堆積によって覆土が充填されており、この事からこのくぼみは住居機能時には開口していたものと考えられる。貼り床は構築されず、掘り方をそのまま床面として使用していたようだ。硬化面は全く認められない。

出土遺物は掲載分も含めて土師器片115点、須恵器片４点、石（製品？）８点である。遺構の中央より集中して遺物（49～53など）が出土したが、これらは覆土上～中層よりのものである。多量の出土にもかかわらず接合しなかった事は、これらが別の場所から持ち込まれて投棄された土器片であり、本住居跡が機能終了後にゴミ捨て場として利用されていた事を示す。

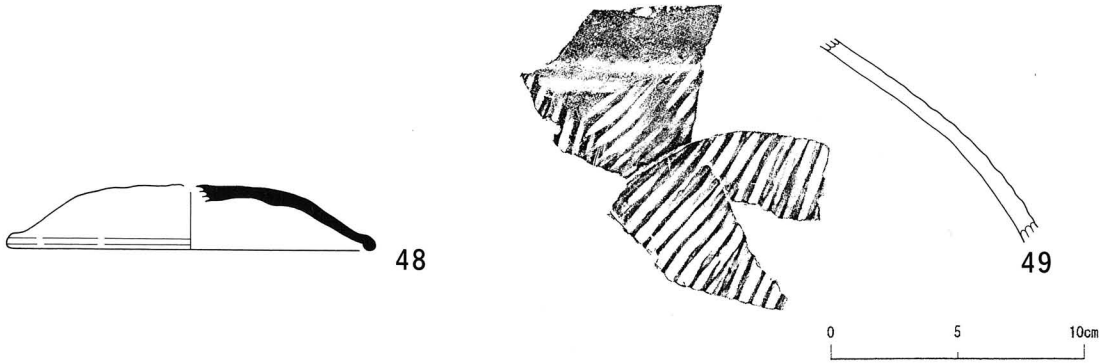
48は住居跡の西壁沿いの、床面に近い覆土中から出土した。ほぼ住居跡の年代を示すものとしてよいであろう。



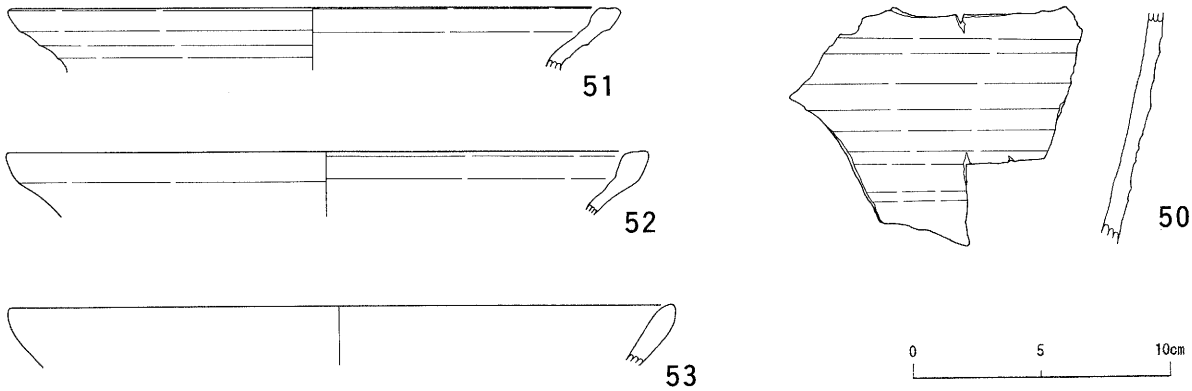
第３号住居跡

1	にぶい黄色土	シルト質。しまり良くない。炭化物(微量)混入。
2	黄褐色土	シルト質。しまり良くない。
3	黄褐色土	シルト質。しまり非常に良い。
4	オリーブ黄色土	非常にしまり良くない。酸化鉄粒(多量)混入。
5	オリーブ黄色土	４層と同質。地山に近似するもののしまり良くない。炭化物(少量)、焼土粒子(微量)混入。

第14図　第３号住居跡（Ｓ＝1/40）



第15図　第３号住居跡出土遺物（Ｓ＝1/3）



第16図　第３号住居出土遺物（Ｓ＝1/3）

３号住居跡出土遺物

遺物番号	出土地点	種別	器種	口径(基径)	底径	器高	重量(g)	胎土混入物	焼成	形態・手法の特徴・その他
48	3号住居跡	須恵器	蓋	14.8				白色砂粒	やや不良	ツマミは欠損。
49	3号住居跡	土師器	甕					白色砂粒	良	胴部外面に叩き痕
50	3号住居跡	土師器	甕					白色砂粒	良	
51	3号住居跡	土師器	鍋か	(24.2)				白色砂粒	やや良	口縁端部を折り返し方形に成型。
52	3号住居跡	土師器	鍋か	(25.2)					良	口縁端部を折り返し方形に成型。
53	3号住居跡	土師器	甕	(26.4)					良	口縁端部を折り返し丸く成型。

第４号住居跡

調査区の南方で検出した。前出の第１～３号住居跡が構成する遺構群とはやや離れた場所に位置する。丁度、本住居跡付近を頂点に東南方向に自然地形が緩やかな傾斜をみせる（２号不明遺構)。第５号住居跡と重複し、これに後出する。また２号溝状遺構とはこれに前出する関係にある。

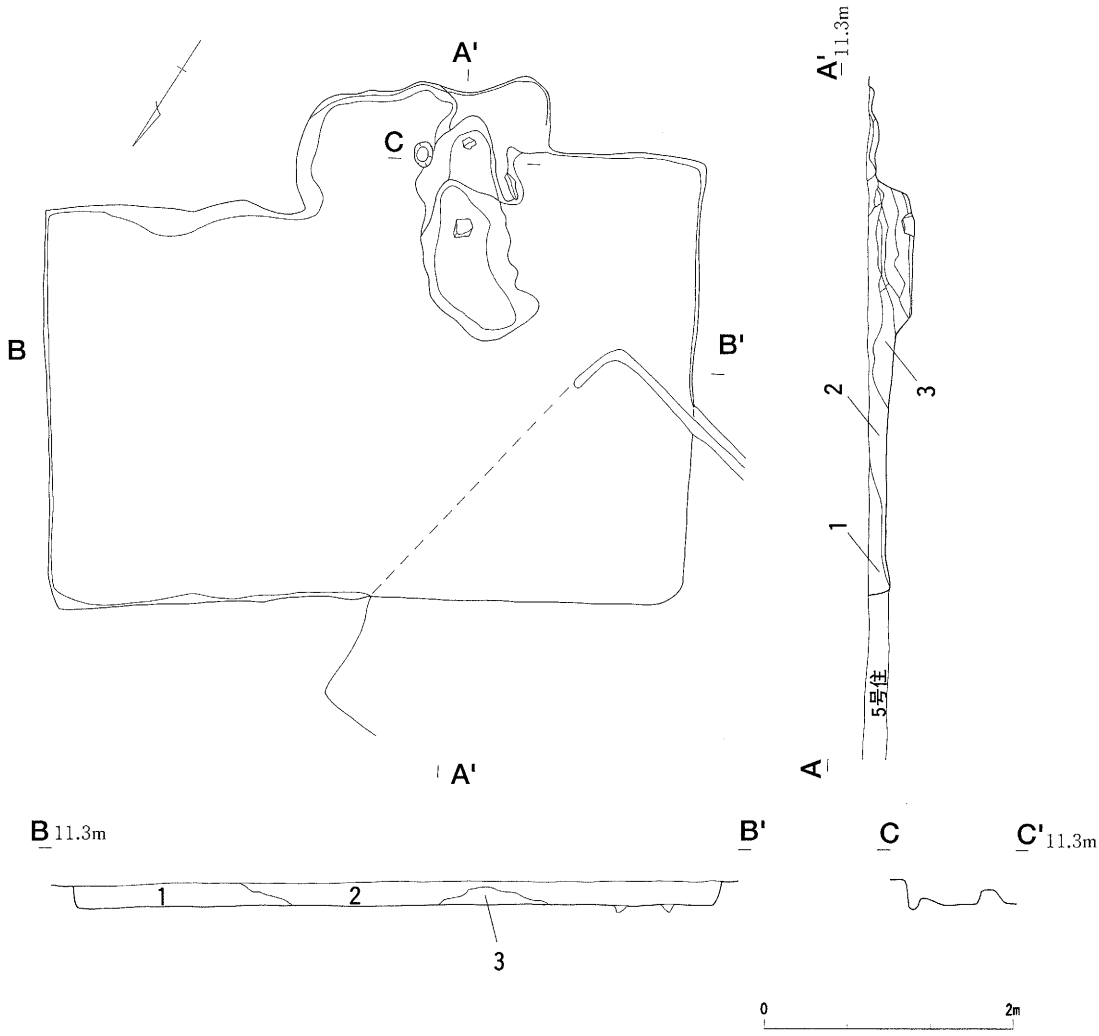
遺構の残存状況も良く、今回の調査で検出した竪穴住居跡の中では随一である。カマドは住居跡南壁に設置されている。カマドに付属するものなのか、住居跡のプランはこの南壁のみが一部張り出している。カマド焚口部は大きく広がっており、その端は住居跡のほぼ中央にまで至る。カマド燃焼部には支脚に用いられたと思われる切石が設置されており、約５cmの厚さで灰層を検出した。

土層観察によるとカマドの天井部は厚さ約10cmの白色粘土で構築されており、住居跡が廃絶されるのと同時に南方向からの土砂流入の圧力により崩落したようである。カマドのソデ構造を示すものは検出できなかった。天井部と同様に粘土で構成されていたものと推定されるが、詳細は不明である。

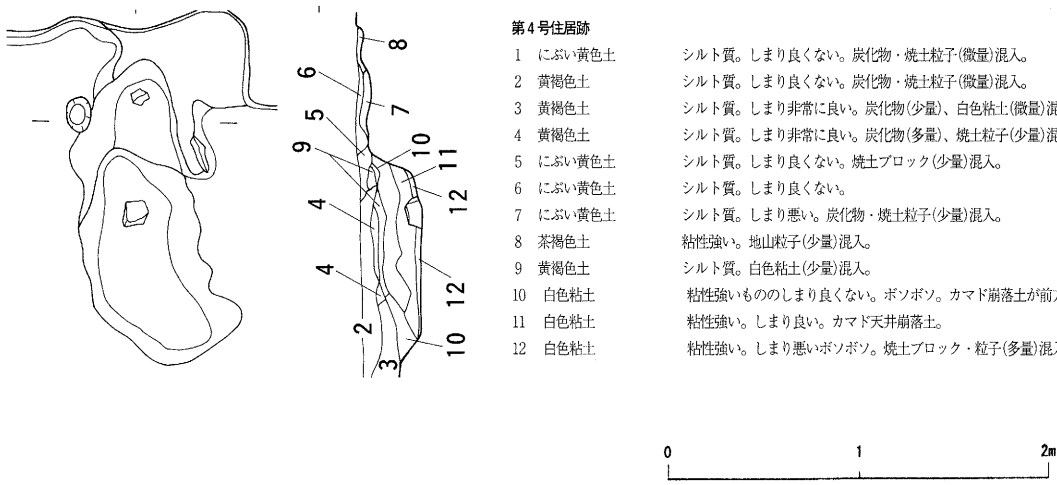
ただし、煙出部の脇に細長い切り石を検出し、あるいはソデの補強材として用いられたものかもしれない。煙出部のもう一方の脇には直径約10cm、深さ20cmの小ピットがある。これもカマドに付随する可能性が高い。貼り床は構築されず、掘り方をそのまま床面として使用していたようだ。カマド付近にのみ床が硬化している。

出土遺物は掲載分も含めて、土師器252点、須恵器23点、石（製品）７点、土錘１点、鉄製品１点である。55、56、57は底部の高台状を意識したようなつくりで、土器祭祀遺構（１号不明遺構）出土の埦に類似する。61の双耳瓶は10世紀の第１四半期、65～66の小型・中型甕は９世紀第４四半期～10世紀第１四半期を指標する。

ちなみに、土師器小型甕を埋納した単独の柱穴跡である第53号土坑は本住居跡の丁度真南に位置し、出土遺物の年代もほぼ同じであり、このふたつの遺構が直接的・間接的な関係にあった事も推察できる。



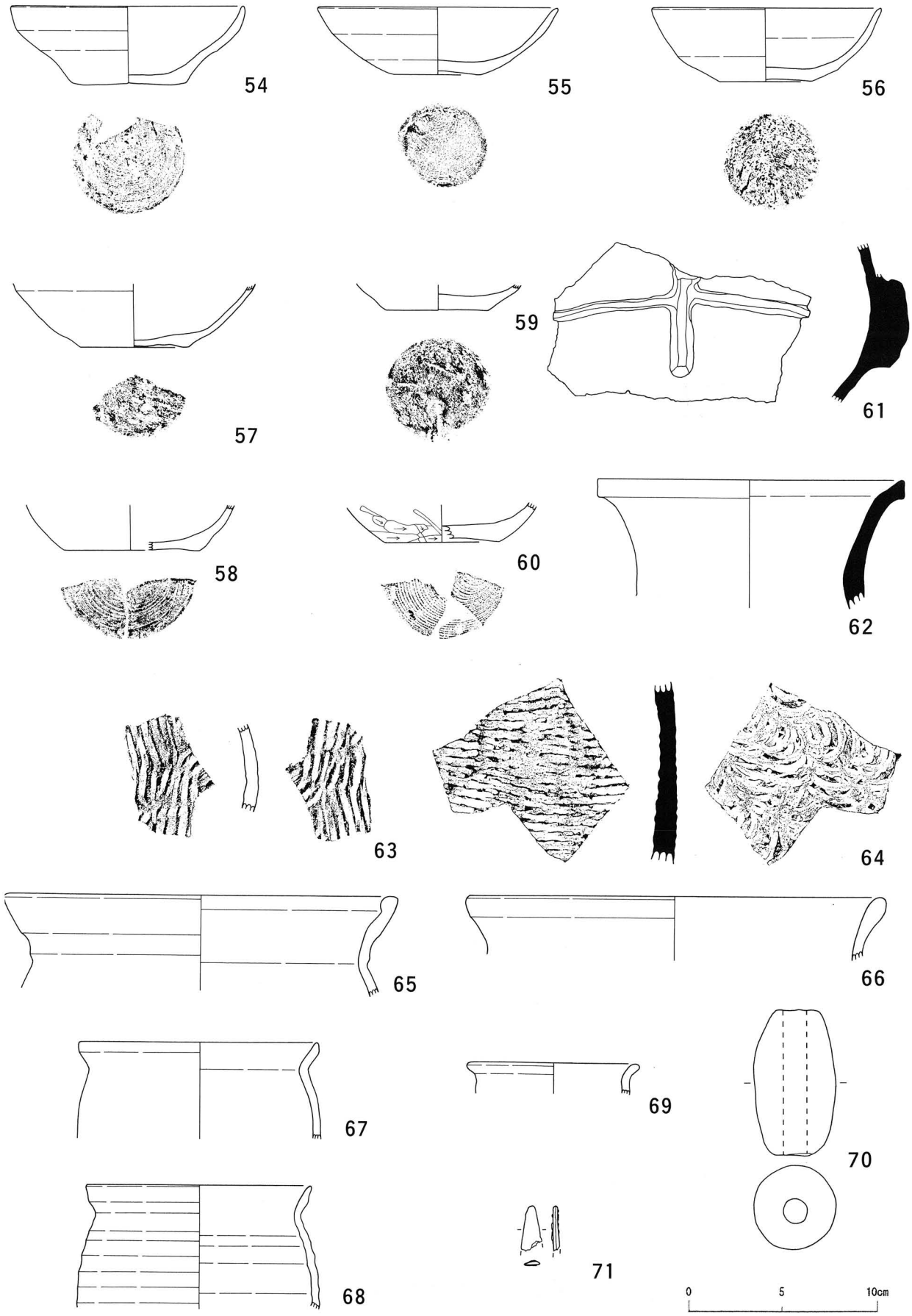
第17図　第４号住居跡（Ｓ＝1/60）



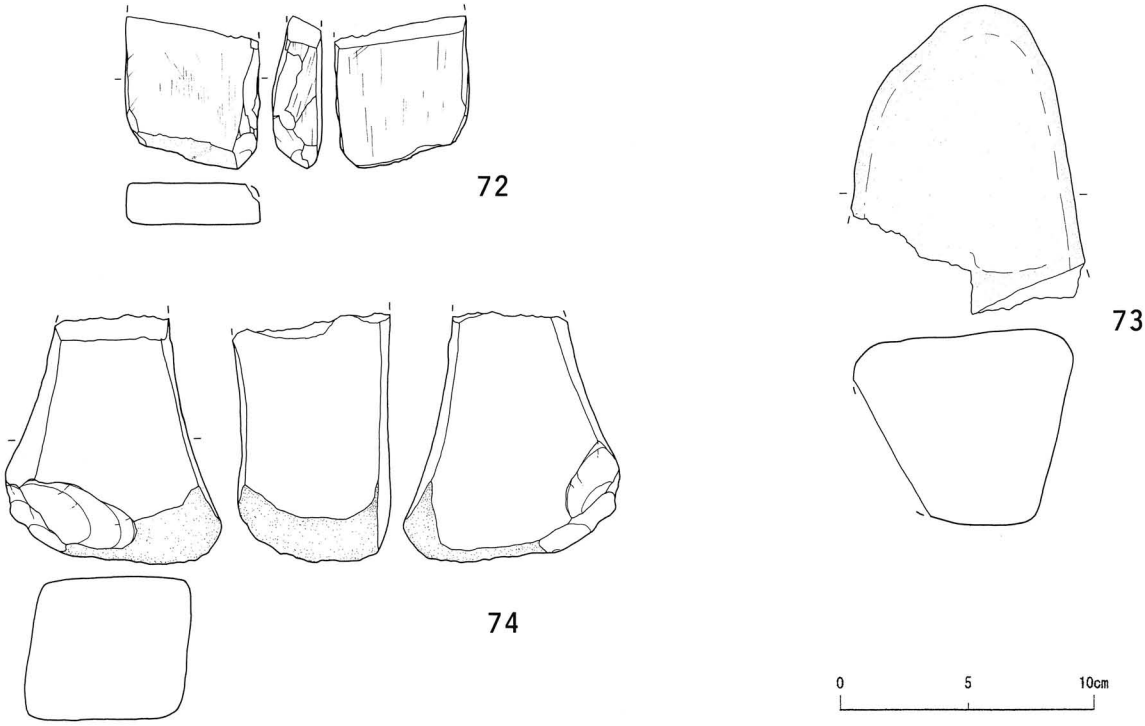
第４号住居跡

1	にぶい黄色土	シルト質。しまり良くない。炭化物・焼土粒子(微量)混入。
2	黄褐色土	シルト質。しまり良くない。炭化物・焼土粒子(微量)混入。
3	黄褐色土	シルト質。しまり非常に良い。炭化物(少量)、白色粘土(微量)混入。
4	黄褐色土	シルト質。しまり非常に良い。炭化物(多量)、焼土粒子(少量)混入。
5	にぶい黄色土	シルト質。しまり良くない。焼土ブロック(少量)混入。
6	にぶい黄色土	シルト質。しまり良くない。
7	にぶい黄色土	シルト質。しまり悪い。炭化物・焼土粒子(少量)混入。
8	茶褐色土	粘性強い。地山粒子(少量)混入。
9	黄褐色土	シルト質。白色粘土(少量)混入。
10	白色粘土	粘性強いもののしまり良くない。ボソボソ。カマド崩落土が前方に流出したもの。
11	白色粘土	粘性強い。しまり良い。カマド天井崩落土。
12	白色粘土	粘性強い。しまり悪いボソボソ。焼土ブロック・粒子(多量)混入。カマド天井崩落土。

第18図　第４号住居跡カマド（Ｓ＝1/40）



第19図　第４号住居跡出土遺物（Ｓ＝1/3）



第20図　第４号住居跡出土遺物（Ｓ＝1/3）

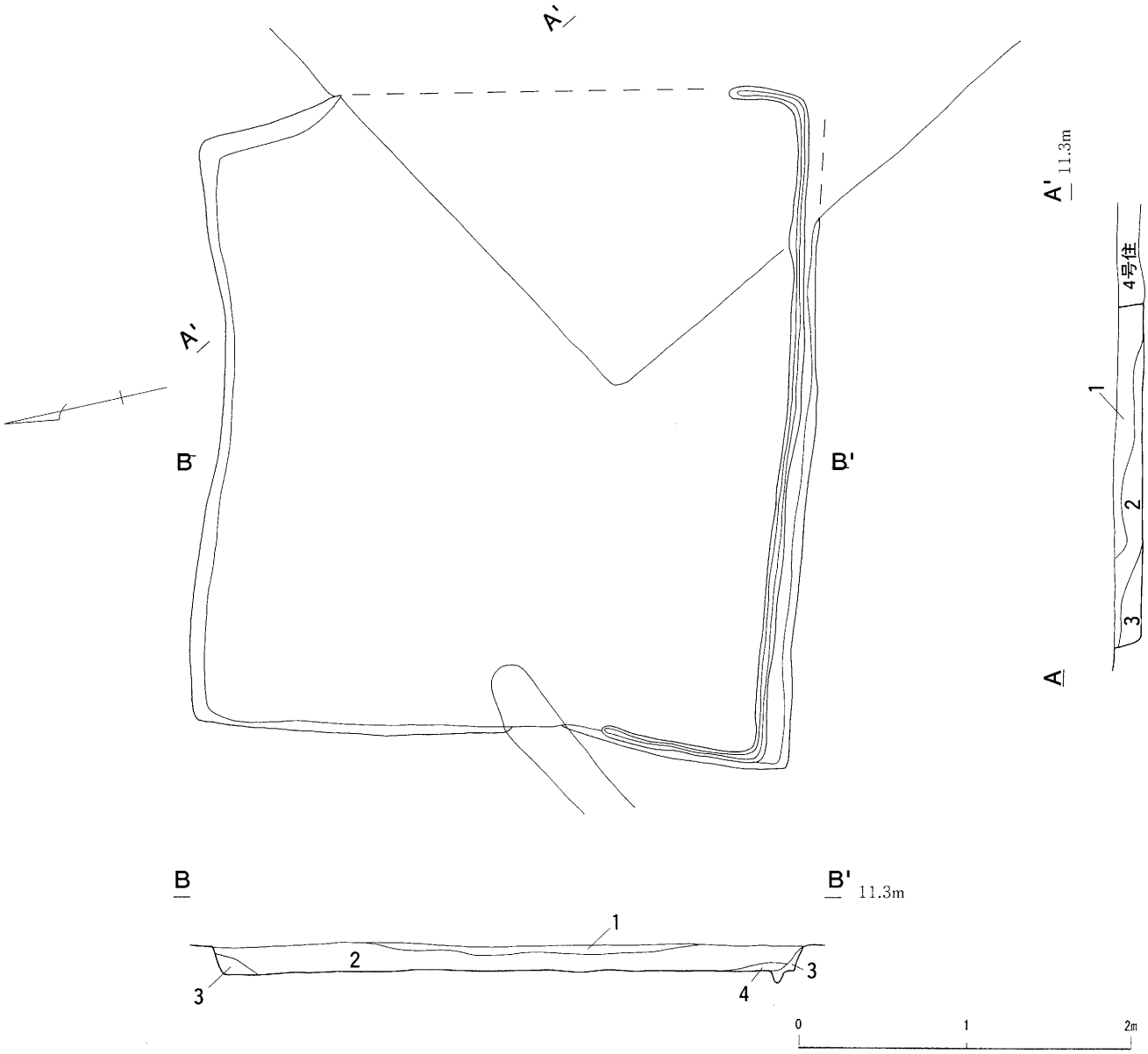
第21図　第４号住居跡遺物出土状況（Ｓ＝1/60）

4号住居跡出土遺物

遺物番号	出土地点	種別	器種	口径(基径)	底径	器高	重量(g)	胎土混入物	焼成	形態・手法の特徴・その他
54	4号住居跡	土師器	椀	(12.6)	(6.0)	4.35		雲母粒	やや不良	底部には右回転糸切り痕。底部を高台状に残す。外面は口縁部にナデ調整を施すが体部は無調整のままで、ロクロ成形痕が明瞭に残る。内面は底部が未調整のまま。
55	4号住居跡	土師器	椀	(13.0)	4.6	4.0		雲母粒	良	底部には右回転糸切り痕。内外面ともに丁寧なナデ調整を施す。
56	4号住居跡	土師器	椀	12.4	5.0	4.1			不良	底部には右回転糸切り痕。内外面ともに丁寧なナデ調整を施す。
57	4号住居跡	土師器	椀		(5.8)				不良	底部には回転糸切り痕が僅かに認められる。全体の摩滅が顕著で調整等の詳細は不明。
58	4号住居跡	土師器	椀		(7.0)			白色針状物質	良	底部には回転糸切り痕。内外面ともに丁寧なナデ調整を施し、焼成も良く丁寧なつくり。
59	4号住居跡	土師器	皿か		5.5			白色砂粒	不良	底部には回転糸切り痕。摩滅が顕著で調整方法などは不明。
60	4号住居跡	土師器	甕か		(6.2)				良	底部には回転転糸切り痕。内面に有機物が付着する。
61	4号住居跡	須恵器	双耳瓶						良・堅緻	
62	4号住居跡	須恵器	壷	(10.0)				白色砂粒	やや不良	
63	4号住居跡	土師器	甕						やや不良	胴部破片。内外面に叩き・当て具痕が認められる。
64	4号住居跡	須恵器	甕					白色砂粒	良・堅緻	体部破片。内外面に叩き・当て具痕が認められる。
65	4号住居跡	土師器	甕	(21.4)				白色砂粒	良	口縁端部を折り返し丸く成型。
66	4号住居跡	土師器	甕	(22.4)					不良	口縁端部を丸く成型。
67	4号住居跡	土師器	小型甕	(12.9)					良	
68	4号住居跡	土師器	小型甕	(12.0)					良	
69	4号住居跡	土師器	小型甕	(9.4)					やや良	
70	4号住居跡	土錘		全長8.05	外径4.6		孔径168.0	白色砂粒	良	
71	4号住居跡	刀子		残存長2.5	最大幅1.1	最大厚0.5	1.0			
遺物番号	出土地点		器種	全長	最大幅	最大厚	重量(g)	岩石の種類		
72	4号住居跡	砥石		6.15	5.35	1.9	88.9	頁岩		全ての面を使用している。
73	4号住居跡	自然石		9.35	12.4	8.0	1008.9	花崗岩		平坦面を持つ自然石。カマドの至近より出土し、全面に被熱を受けている。カマドの構造物か。
74	4号住居跡	砥石		10.05	8.55	6.2	706.9	砂岩		バチ状を呈する。それ程使い込まれていない。一部被熱を受けている。

第5号住居跡

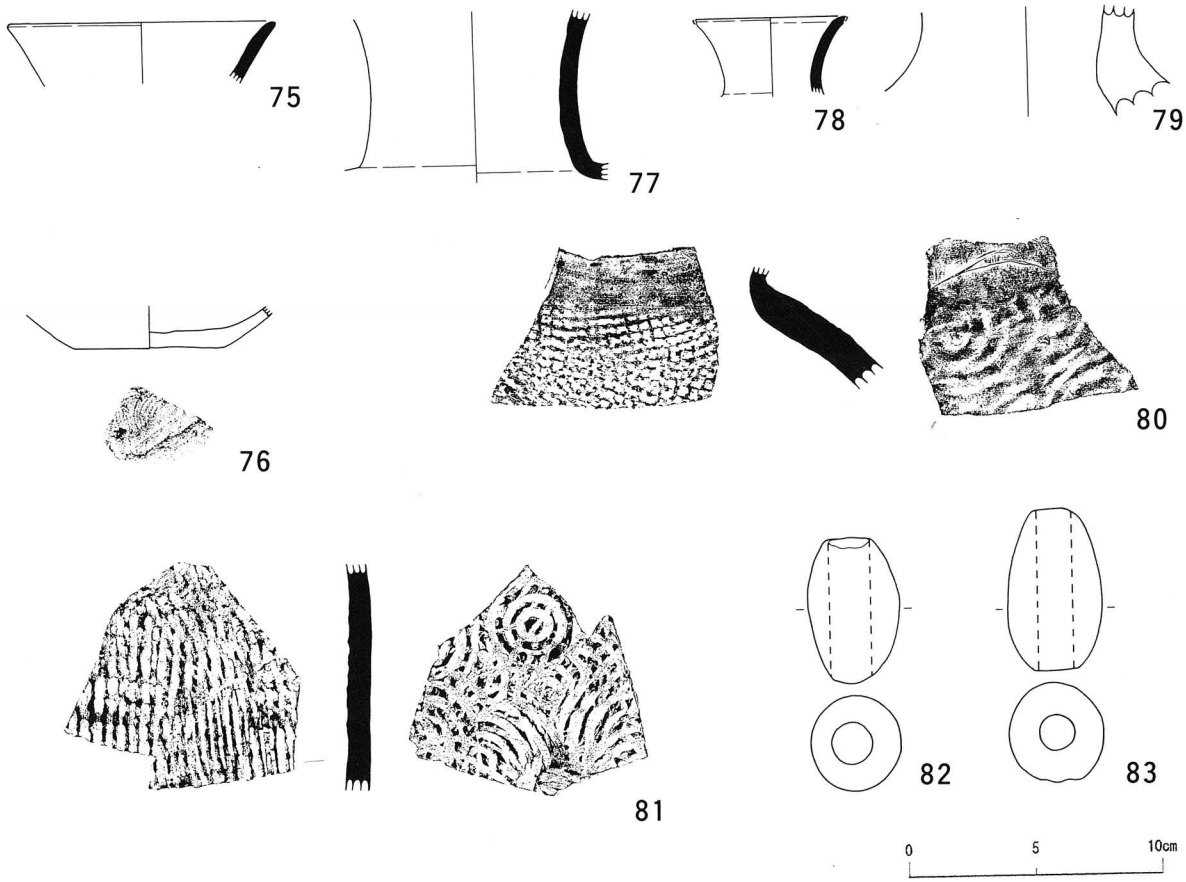
調査区南方で検出した。第4号住居跡、畠畝跡第13群と重複し、これらに前出する。カマドは検出できなかった。第4号住居跡によって壊されたのかもしれないが、掘り方の痕跡も見つからなかった事から第1～3号住居跡と同様にもともとカマドの無い住居跡であった可能性が高い。今回の調査で検出した住居跡のなかでは壁周溝を唯一確認した。貼り床は構築されず、掘り方をそのまま床面として使用していたようだ。硬化面は認められない。覆土には暗褐色シルトが充填されてお



第５号住居跡

1	黄褐色土	シルト質。しまり良くない。炭化物・焼土粒子(微量)混入。
2	暗褐色土	シルト質。しまり良くない。炭化物(少量)混入。
3	暗褐色土	シルト質。しまり非常に良い。地山粒子(多量)混入。
4	暗褐色土	シルト質。炭化物(少量)混入。

第22図　第５号住居跡（Ｓ＝1/40）



第23図　第５号住居跡出土遺物

５号住居跡出土遺物

遺物番号	出土地点	種別	器種	口径(基径)	底径	器高	重量(g)	胎土混入物	焼成	形態・手法の特徴・その他
75	5号住居跡	須恵器	坏	(10.8)						
76	5号住居跡	土師器	埦		(6.0)					
77	5号住居跡	須恵器	長頸壺							
78	5号住居跡	須恵器	小壺	(6.0)				白色砂粒	良・堅緻	
79	5号住居跡	土師器	甕					白色砂粒	不良	頸部破片。焼成が悪く土師質。
80	5号住居跡	須恵器	甕					白色砂粒	良・堅緻	頸部～肩部破片。
81	5号住居跡	須恵器	甕							体部破片。
遺物番号	出土地点	種別	器種	全長	外径	孔径	重量(g)	胎土混入物	焼成	形態・手法の特徴・その他
82	5号住居跡	土錘		5.6	3.8	1.6	61.8		やや良	
83	5号住居跡	土錘		6.5	4.0	1.4	87.4		やや良	

り、自然堆積の様相を呈する。出土遺物量は掲載分も含めて土師器片25点、須恵器片７点、土錘２で、全てが覆土中～上層よりのものである。

ちなみに「北」と朱書きされた土師器埦を出土した土器祭祀遺構の真北に本住居跡は位置しており、出土遺物の年代も凡そ合致する事から、二つの遺構は直接的な関係にあった可能性がある。

第53号土坑

調査区南側、自然地形の落ち込みの中程の標高約10.95mの位置で検出した。

土層断面の観察から柱の抜き取られた痕跡を持つ柱穴であると判断したので、周囲を注意深く精査しこれに並ぶ柱穴等を探したが、何の存在も確認できなかった。ゆえに本遺構は、単独で存在す

る柱穴であると判断せざるを得ない。

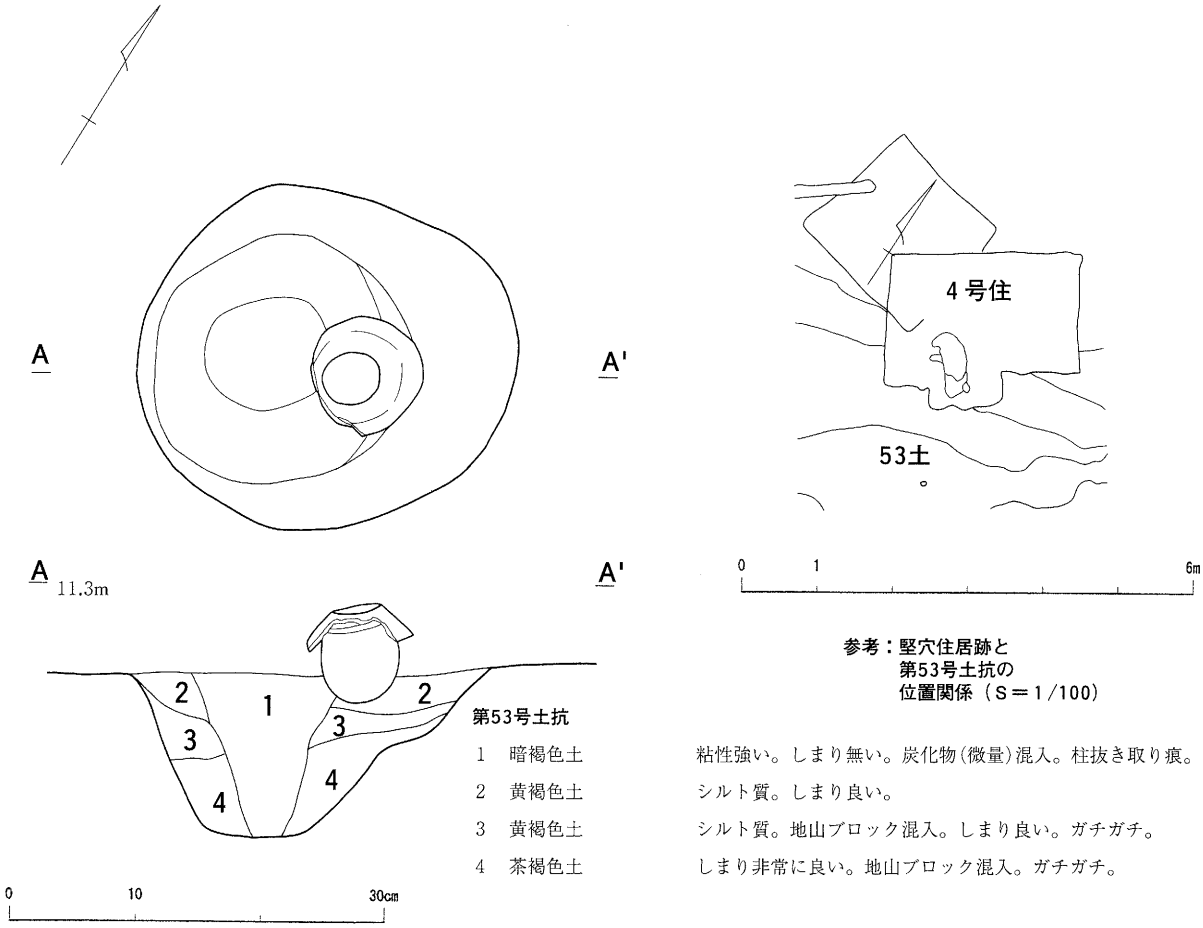
柱痕から推定される往時の柱の直径は32cmで、これを固定するために、つき固めた締りの良い土を３度投入している。

柱を抜き取った後に土師器の甕の底部（85）を蓋にした小型甕（84）を埋納したようである。85は土師器の中型甕の体部～底部の破片で、割れ口を摩滅させるなど蓋として使う際の二次成形は施していない。

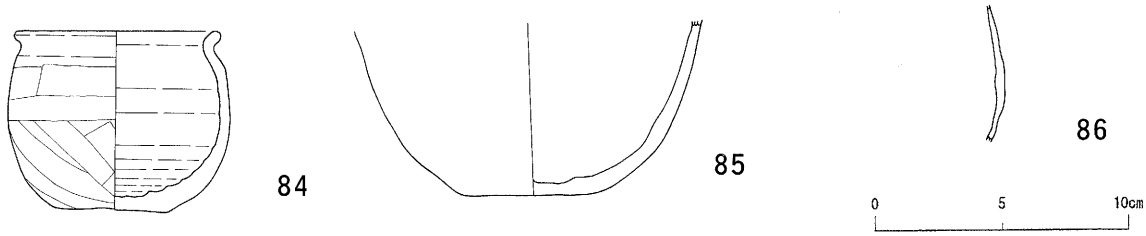
なお調査進行の便宜上、本来の遺構確認面より10cmほど下げて本遺構を検出したために、検出状況（第24図・写真図版３）では小型甕の上部まであらわになっているが、往時の姿は「蓋」が僅かに露頭するかしないかの状態であったと思われる。

この小型甕の内部には土が充填されており、炭化物の混入が認められたために自然化学分析を実施した。結果、種実遺体は検出されなかった。一方で動物に由来するリン酸が高濃度で認められた。

本遺構は第４号竪穴住居跡の丁度真南に位置する。出土遺物の年代もほぼ同じであり、このふたつの遺構の間に直接的・有機的な関係があった可能性もある。



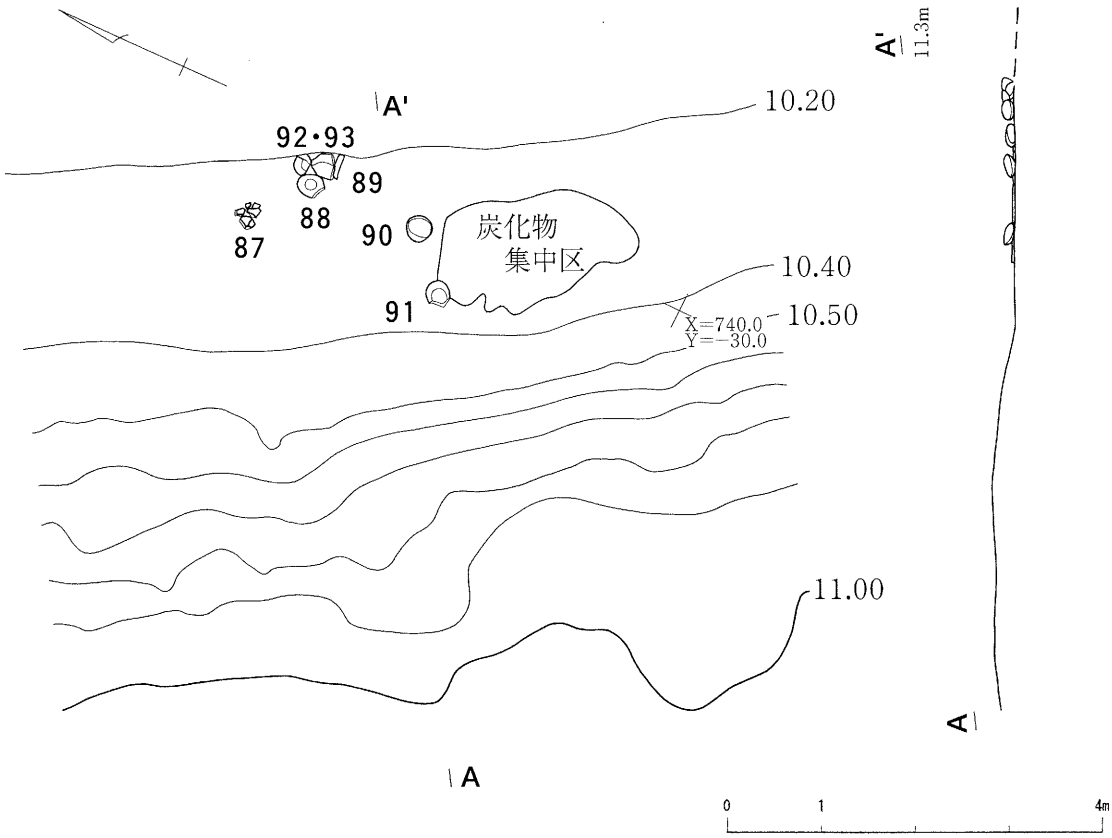
第24図　第53号土抗（S＝1/6）



第25図　第53土坑出土遺物（S＝1/3）

53号土坑出土遺物

遺物番号	出土地点	種別	器種	口径(基径)	底径	器高	胎土混入物	焼成	形態・手法の特徴・その他
84	53号土坑	土師器	小型甕	8.3	4.4	7.3	白色砂粒	良	体部外面中位～下方に斜方向のヘラ削り調整。底部には回転糸切り痕が認められるものの、摩滅が激しく詳細は不明瞭。内面には全体的にロクロ成形痕が明瞭に残る。
85	53号土坑	土師器	甕		5.3		白色砂粒	良	底部には回転糸切り痕が認められるものの、摩滅が激しく詳細は不明瞭。割れ口には調整を施さず。
86	53号土坑	土師器	甕か				白色砂粒	やや不良	土師器甕の体部破片であると思われる。



第26図　土器祭祀遺構（S＝1/80）

土器祭祀遺構（第１号不明遺構）

調査区中央部やや西方の河川跡より検出した。川べり（湿地きわ）に設けられた土器祭祀遺構である。７つの土師器埦と１ヶ所の炭化物集中区で構成されている。

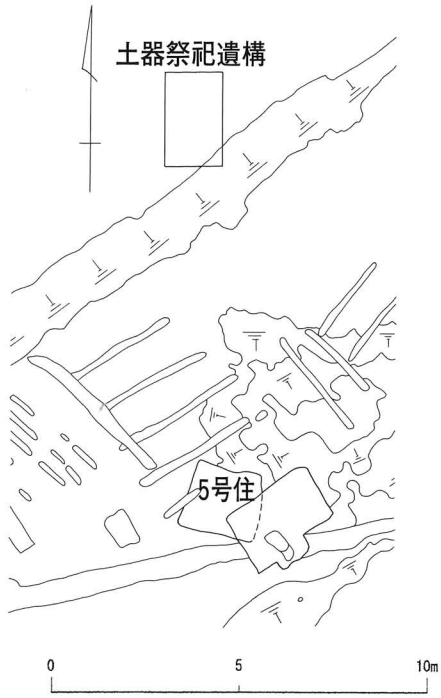
河川跡の検出作業の途中で、堆積土の地山直上の４層（第７図参照）を取り除いたところ、検出したものである。

炭化物集中区は約0.6㎡の範囲で認められた。約0.5㎝の厚さがあり、分布形状は方形に近いものの不整である。平面の形状から性格をうかがう事はできなかった。また、焼土など火を燃やした痕跡は全く見受けられなかったことから、これらの炭化物は燃焼の結果もたらされたものではなく、編み物などの有機物が腐食したものと判断し、調査中に自然科学分析を実施して解明を期した。

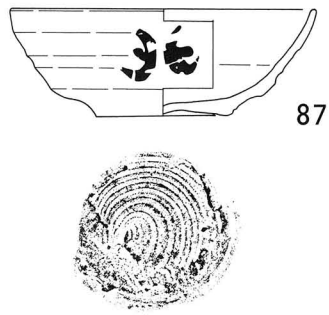
なお、この炭化物を草木腐食土層の４層に由来するものだとの疑いも調査中に抱いたが、分析の結果、両者が全く異なる植物遺体である事が判明したため、本遺構に伴うと判断した。

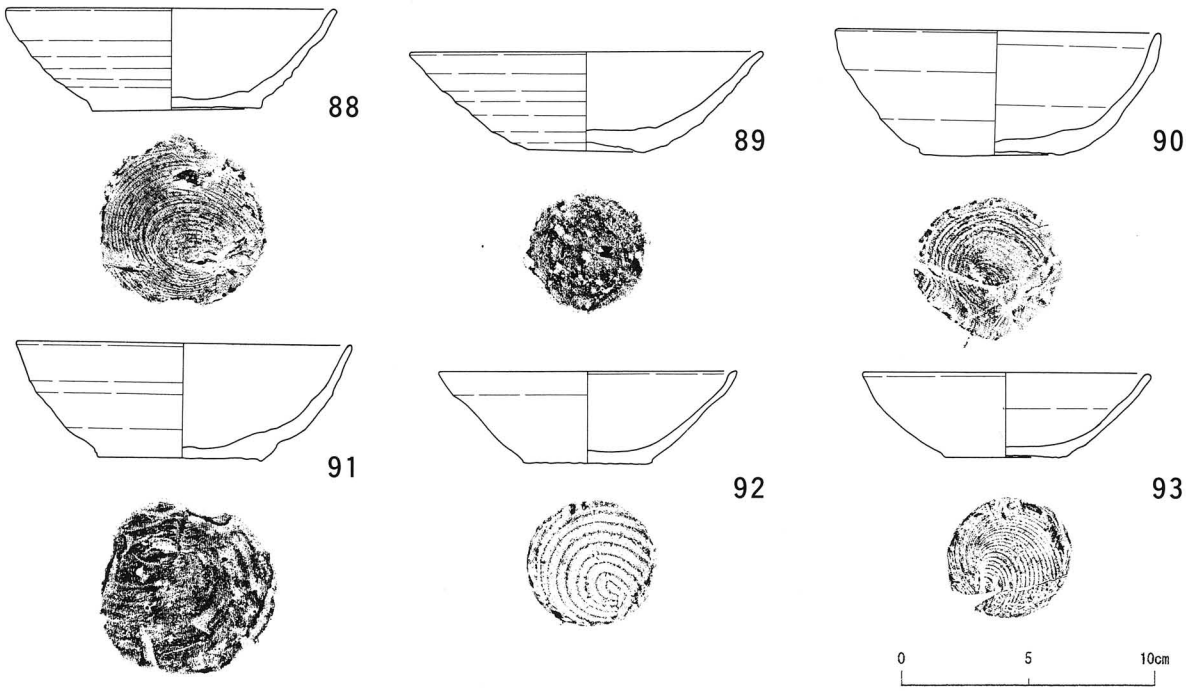
土師器の埦は、標高10.20～10.40m間にほぼ正位を保ちながら据えられたままの状態で７点出土した。東側から順に、90と91が炭化物集中区の脇に、そして比高差数㎝をもって下った場所に88・89・92・93が位置する。92と93は重なって（92が下93が上）いた。同じレベルのやや西方には「北」の朱書きの記された87が位置する。

炭化物集中区の隣に土師器の埦が並べて置かれていた。そのうちのひとつは朱書土器である。往時は湿地であっただろう河川跡という立地。以上の３点から、本遺構は土器を用いた祭祀遺構であると判断した。



土器祭祀遺構と住居跡の位置関係（Ｓ＝1/200）



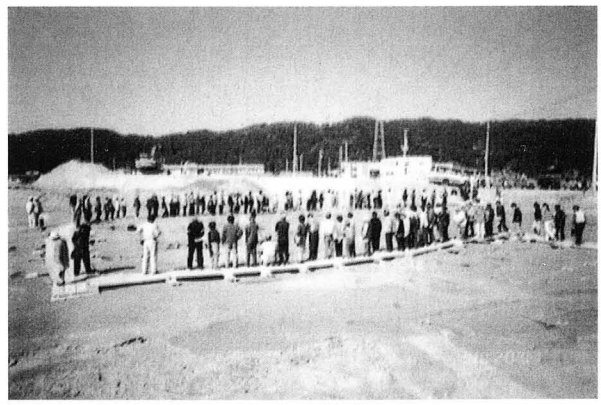


第27図　第１号不明遺構出土遺物（Ｓ＝1/3）

土器祭祀遺構出土遺物

遺物番号	出土地点	種別	器種	口径(基径)	底径	器高	胎土混入物	焼成	形態・手法の特徴・その他
87	土器祭祀遺構	土師器	埦	12.3	6.0	4.3	白色小石	良	底部には左回転糸切り痕。体部外面の中位には「北」の朱書き。底部を高台状に残す。外面は口縁部にナデ調整を施すが体部は無調整のままで、ロクロ成形痕が明瞭に残る。内面は見込み部が未調整のまま。口縁部の外反は極僅か。9世紀第4四半期。
88	土器祭祀遺構	土師器	埦	13.2	6.3	4.1	白色小石	良	底部には左回転糸切り痕。底部を高台状に残す。外面は口縁部にナデ調整を施すが体部は無調整のままで、ロクロ成形痕が明瞭に残る。内面は見込み部周辺が凹む。
89	土器祭祀遺構	土師器	埦	(14.2)	4.8	4.0	白色小石	不良	底部には回転糸切り痕。底部を僅かに高台状に残す。外面は口縁部にナデ調整を施すが体部は無調整のままで、ロクロ成形痕が明瞭に残る。内面は見込み部周辺が僅かに凹む。10世紀第1四半期。
90	土器祭祀遺構	土師器	埦	13.0	5.6	5.0	白色砂粒	やや良	底部には右回転糸切り痕。底部を僅かに高台状に残す。外面は口縁部にナデ調整を施すが体部は無調整のままで、ロクロ成形痕が明瞭に残る。内面は全面ナデ調整。内面は内黒処理。器厚で口縁部が外反しないなど、他の杯とは異なる様相である。10世紀第1四半期。
91	土器祭祀遺構	土師器	埦	13.4	6.6	4.6	白色小石	不良	底部には回転糸切り痕。底部を高台状に残す。外面は口縁部にナデ調整を施すが体部は無調整のままで、ロクロ成形痕が明瞭に残る。内面は体部にナデ調整を施すが、内底面は未調整のまま。摩滅が激しい。
92	土器祭祀遺構	土師器	埦	(10.0)	5.1	3.7	白色小石	良	底部には左回転糸切り痕。底部を高台状に残す。外面は全面にナデ調整を施す。内面は内底面を除きナデ調整を施す。薄手で丁寧なつくり。
93	土器祭祀遺構	土師器	埦	(11.4)	4.9	3.5	白色砂粒	やや不良	底部には左回転糸切り痕。底部を僅かに高台状に残す。外面は全面にナデ調整を施す。内面は内底面を除きナデ調整を施す。薄手で丁寧なつくり。

作業風景



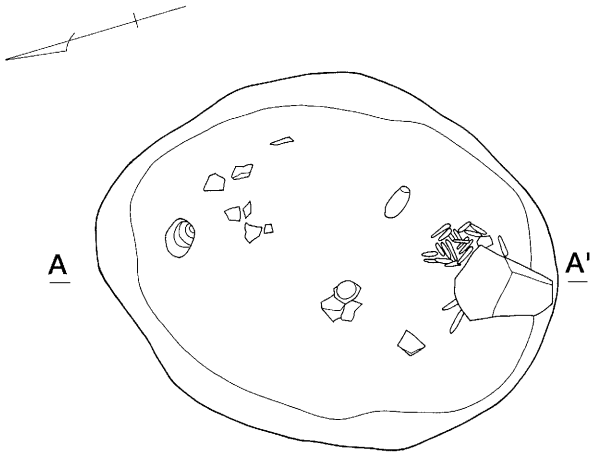
遺跡見学会

第５号土坑

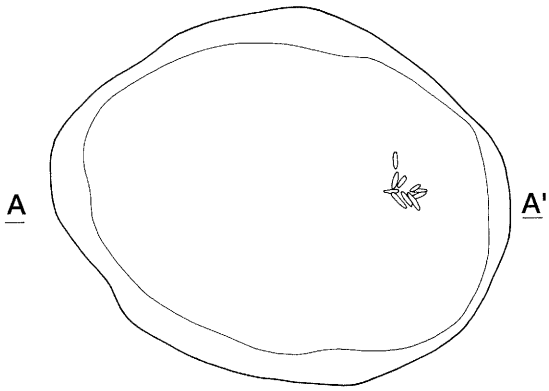
調査区中央部やや西方の、第１号掘立柱建物跡の至近で検出された。他の古代遺構とはやや離れた位置に単独で所在している。長軸62cm、短軸49cm、深さ15cmを測る楕円形の平面プランを呈し、坑底はほぼ平坦である。土層観察によると、全長約20cmの花崗岩が坑底に置かれ、炭化物を多量に含む粘性の強い黒色土が最下層（２層）ならびにその直上（３層）に堆積し、その後竪穴住居跡などの古代遺構に特有の黄褐色シルトが最上層に堆積する（４層）。

土錘が、計40点（大型１点・小型39点）一括して出土した。そのほぼ全てが２・３層より、花崗岩に寄り添うようにまとまって出土している。この２・３層は、その土質的特長から何かが腐食した結果に形成されたものとも考えられる。これら土錘の検出状況は、土錘が何か（網？）に付随したままのかたちで本遺構に投棄、あるいは収納されていた事を示唆している。

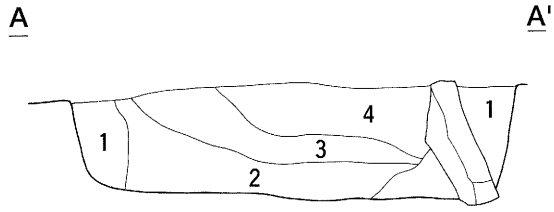
他の出土遺物は、未掲載分も含めて土師器片29点、須恵器片４点である。図版に掲載したものはすべて２・３層より出土したものである。94の土師器椀は、その成形・調整方法が第１号不明遺構出土のものに近似しており同型式であると思われる。つまり多量の土錘も含めて、本遺構は９世紀末～10世紀初頭に営まれたものと考える。



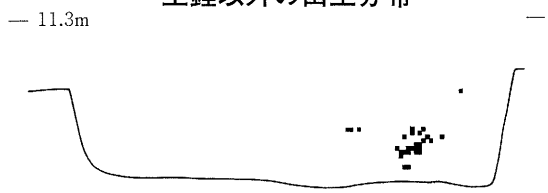
遺物出土状況（上方）



遺物出土状況（下方）



土錘以外の出土分布



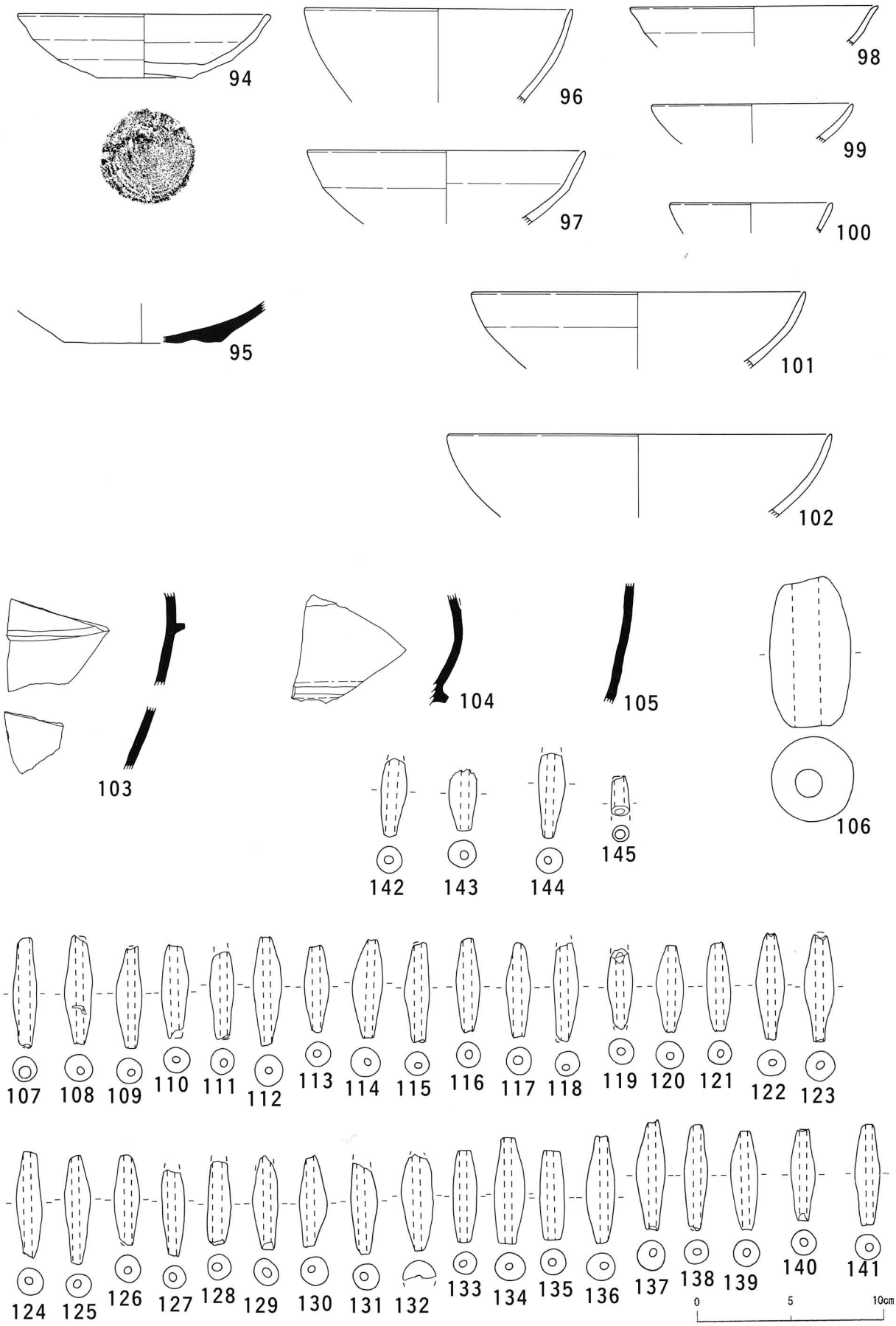
土錘の出土分布

第５号土坑

1	黄褐色土	シルト質。しまり無い。地山ブロック・粒子(多量)混入。
2	黒色土	粘性強い。地山粒子混入。
3	黒色土	粘性強い。４層が粒子状に混入。
4	にぶい黄褐色土	シルト質。しまり良い。

0　10　60cm

第28図　第５号土坑（S＝1/10）



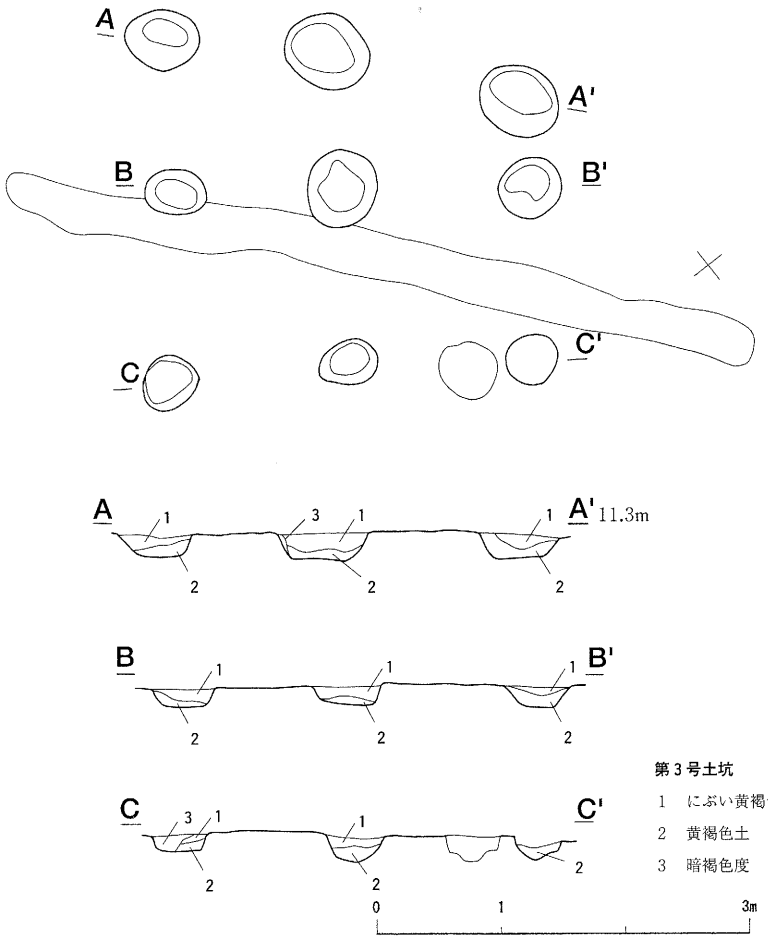
第29図　第５号土坑出土遺物（Ｓ＝1/3）

5号土坑出土遺物

遺物番号	出土地点	種別	器種	口径（基径）	底径	器高		胎土混入物	焼成	形態・手法の特徴・その他
94	5号土坑	土師器	埦	(13.8)	5.2	3.8		白色砂粒 白色針状物質	やや良	底部には左回転糸切り痕。底部を高台状に残す。外面は口縁部にナデ調整を施すが体部は無調整のままで、ロクロ成形痕が明瞭に残る。内面は体部にナデ調整を施すが、内底面は未調整のまま。
95	5号土坑	須恵器	皿か		(8.6)			白色砂粒	不良	摩滅がはげしい。
96	5号土坑	土師器	埦	(14.7)				ガラス質小石	やや良	内外面ともに全面的にナデ調整を施す。
97	5号土坑	土師器	埦	(15.2)				ガラス質小石	良	体部中位で内側に屈曲する。
98	5号土坑	土師器	埦	(13.6)				白色砂粒 白色針状物質	やや良	体部中位で内側に屈曲する。
99	5号土坑	土師器	埦	(11.0)				白色小石	不良	
100	5号土坑	土師器	埦	(8.9)				白色砂粒 白色針状物質	やや良	
101	5号土坑	土師器	埦	(18.3)				白色砂粒 白色針状物質	やや良	体部中位で内側に屈曲する。
102	5号土坑	土師器	埦	(24.0)				白色砂粒 白色針状物質	やや良	体部中位で内側に屈曲する。
103	5号土坑	須恵器	双耳瓶					白色砂粒	良・堅緻	
104	5号土坑	須恵器	双耳瓶					白色砂粒	良・堅緻	
105	5号土坑	須恵器	双耳瓶？					白色砂粒	良・堅緻	
遺物番号	出土地点	種別	器種	全長	外径	孔径	重量（g）	胎土混入物	焼成	形態・手法の特徴・その他
106	5号土坑	土錘		8.2	4.6	1.5	150.1	白色砂粒	良	
107	5号土坑	土錘		6.0	1.4	0.6	7.3	白色砂粒 白色針状物質	良	
108	5号土坑	土錘		6.0	1.5	0.4	10.0	白色砂粒 白色針状物質	やや良	
109	5号土坑	土錘		5.6	1.4	0.4	7.9	白色砂粒	良	
110	5号土坑	土錘		5.1	1.4	0.4	9.0	白色砂粒	やや良	
111	5号土坑	土錘			1.4	0.4	7.0	白色砂粒	良	
112	5号土坑	土錘		5.9	1.7	0.4	12.4	白色砂粒	良	
113	5号土坑	土錘		4.8	1.4	0.5	6.4	白色砂粒	良	
114	5号土坑	土錘		5.4	1.7	0.4	11.5	白色砂粒	良	
115	5号土坑	土錘		5.5	1.3	0.4	7.6	白色砂粒 白色針状物質	良	
116	5号土坑	土錘		5.2	1.4	0.45	7.1	白色砂粒	良	
117	5号土坑	土錘		5.2	1.5	0.5	7.9	白色砂粒	良	
118	5号土坑	土錘		5.4	1.4	0.4	8.0	白色砂粒	良	
119	5号土坑	土錘			1.4	0.4	6.3	白色砂粒	良	
120	5号土坑	土錘		4.7	1.5	0.4	8.1	白色砂粒	良	
121	5号土坑	土錘		4.9	1.3	0.4	7.3	白色砂粒	良	
122	5号土坑	土錘		5.8	1.55	0.45	10.8	白色砂粒	良	
123	5号土坑	土錘		5.9	1.6	0.45	11.4	白色砂粒 白色針状物質	良	
124	5号土坑	土錘		5.4	1.5	0.4	9.5	白色砂粒	良	
125	5号土坑	土錘		5.8	1.5	0.4	9.6		良	
126	5号土坑	土錘		6.0	1.4	0.4	7.7	白色砂粒	良	
127	5号土坑	土錘		4.95	1.5	0.4	9.1	白色砂粒	良	
128	5号土坑	土錘		4.7	1.3	0.4	6.4	白色小石 白色針状物質	良	

5号土坑出土遺物

遺物番号	出土地点	種別	器種	全長	外径	孔径	重量（g）	胎土混入物	焼成	形態・手法の特徴・その他
129	5号土坑	土錘		4.6	1.4	0.5	6.6	白色砂粒	良	
130	5号土坑	土錘		5.1	1.5	0.5	6.7	白色砂粒	良	
131	5号土坑	土錘		5.0	1.6	0.4	8.6		良	
132	5号土坑	土錘		5.0	1.5	0.45	7.7	白色砂粒 白色針状物質	良	
133	5号土坑	土錘		5.3	1.7	(4.5)	7.0	白色砂粒 白色針状物質	良	
134	5号土坑	土錘		5.0	1.3	0.4	8.2	白色砂粒	良	
135	5号土坑	土錘		5.8	1.7	0.4	13.4	白色砂粒 白色針状物質	良	
136	5号土坑	土錘		4.9	1.4	0.4	9.8	白色砂粒 白色針状物質	良	
137	5号土坑	土錘		5.9	1.55	0.45	11.5	白色砂粒	良	
138	5号土坑	土錘		6.0	1.65	0.4	12.3	白色砂粒	良	
139	5号土坑	土錘		5.8	1.3	0.4	7.5	白色砂粒	良	
140	5号土坑	土錘		5.5	1.4	0.45	8.0	白色砂粒	良	
141	5号土坑	土錘		5.0	1.4	0.4	7.2	白色砂粒	良	
142	5号土坑	土錘			1.5	0.5	7.1	白色砂粒	良	
143	5号土坑	土錘			1.55	0.5	6.2	白色砂粒	良	
144	5号土坑	土錘			1.45	0.4	7.9	白色砂粒	良	
145	5号土坑	土錘			2.2	1.0	0.5	白色砂粒	良	



第3号土坑

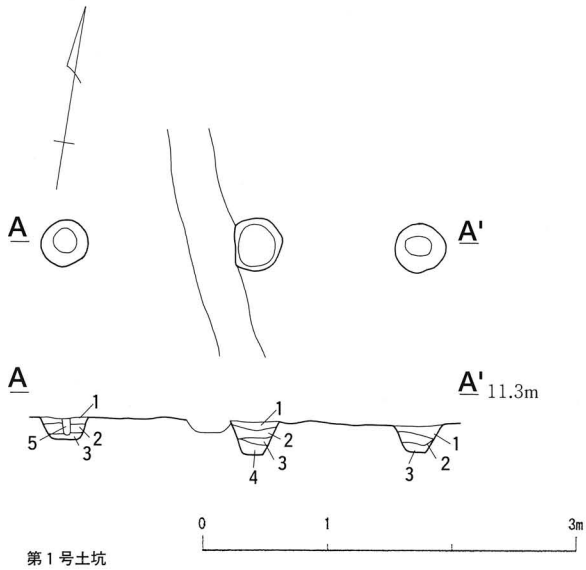
1　にぶい黄褐色土　シルト質。しまり良くない。炭化物(少量)混入。
2　黄褐色土　シルト質。しまり良くない。炭化物(少量)混入。
3　暗褐色度　しまり良い。

第3号掘立柱建物跡

前述した、河川跡きわの遺構群を構成するもののうちの一つである。不整形ではあるが、2間×2間の総柱建物である。畠畝跡第7群と重複し、これに前出する。覆土は第1～3号住居跡と同じ黄褐色シルトが充填されており、出土遺物がないものの同時期と判断した。

柱根は検出されなかった。隣地区で検出された掘立柱建物に比べると、脆弱なつくりである。

第30図　第3号掘立柱建物跡（S＝1/60）



第１号土坑

1	にぶい黄褐色土	シルト質。しまり良い。
2	黄褐色度	しまり非常に良い。酸化鉄粒(少量)混入。
3	暗褐色度	しまり非常に良い。炭化物(少量)混入。ガチガチ。
4	暗褐色度	３層と同質。地山ブロック（少量）混入。
5	茶褐色土	粘性あり。しまり良い。柱痕？

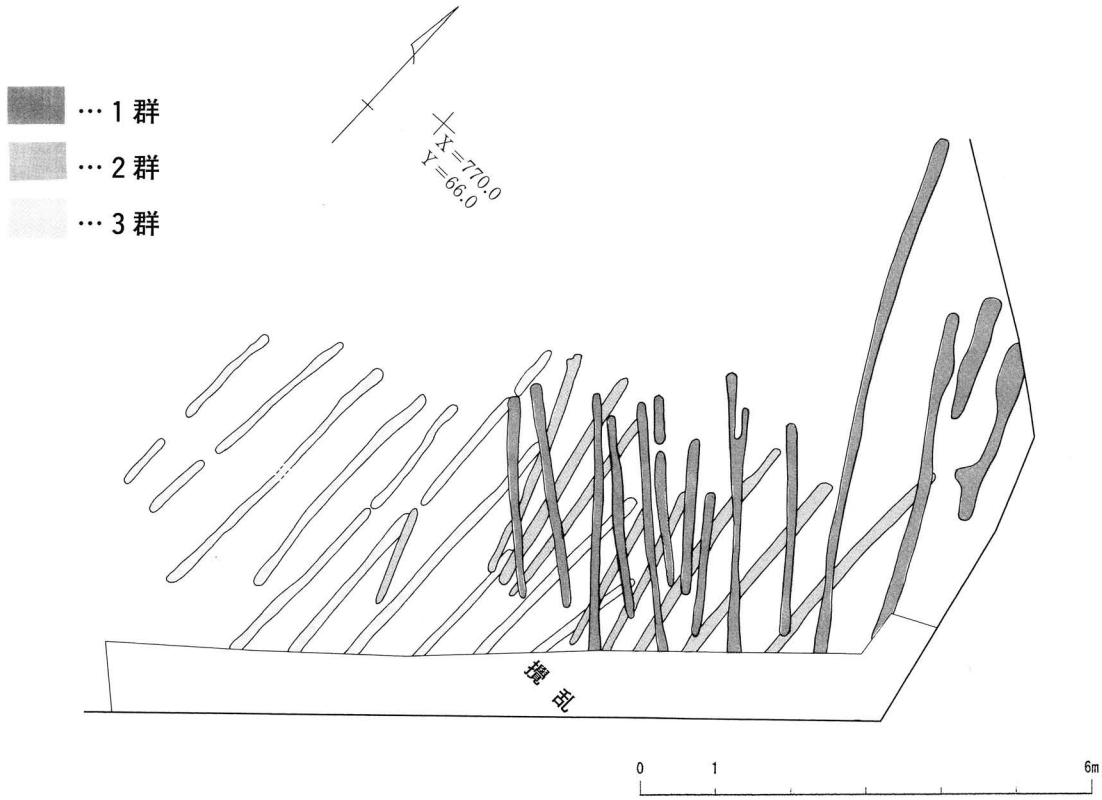
第31図　第１号柵列跡（Ｓ＝1/60）

第１号柵列跡

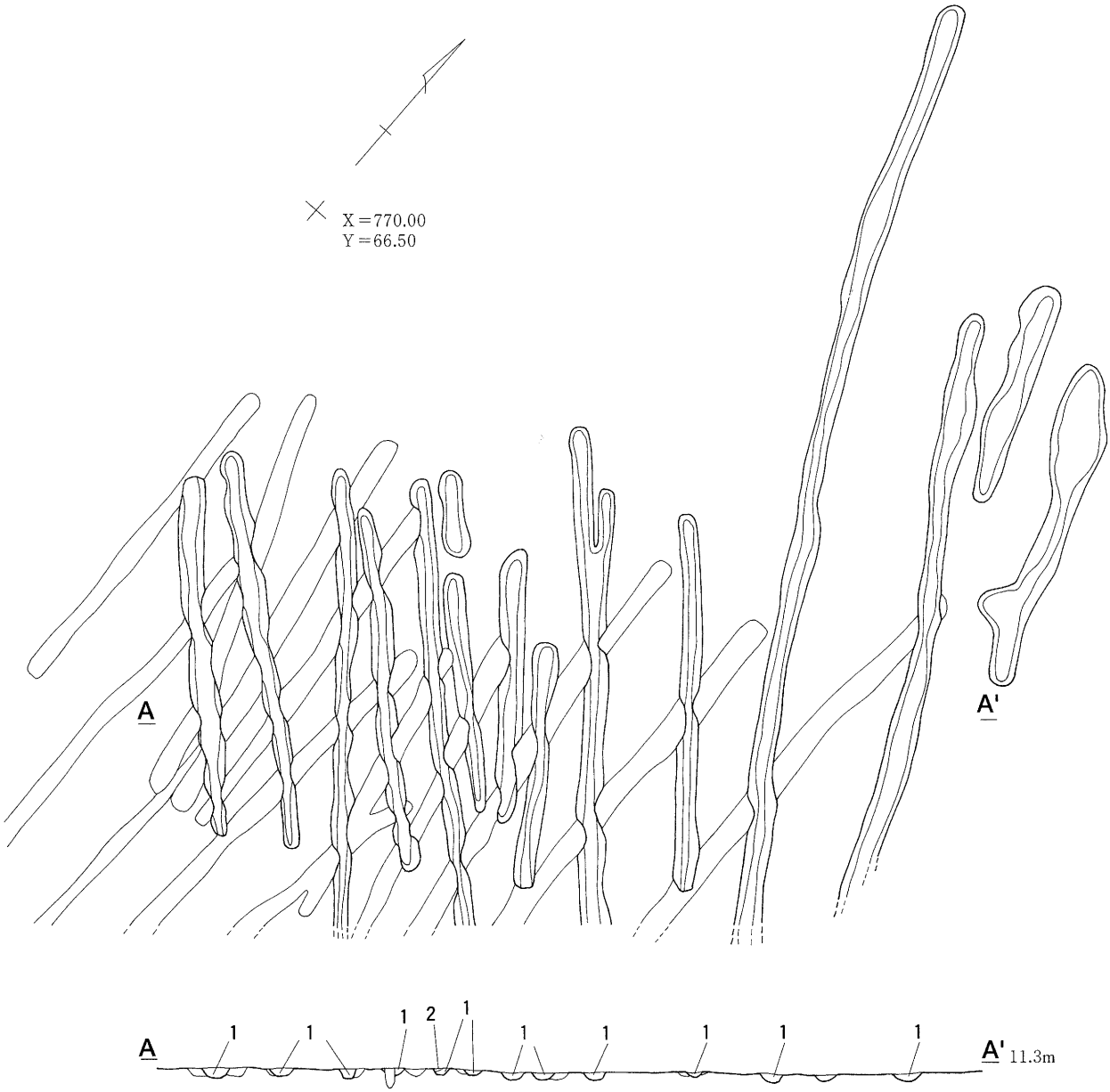
調査区北西部、土坑が密集している周辺で検出した。畠畝跡第１群と重複しており、これに前出する。

覆土は主に竪穴住居跡と同じ、しまりの良い黄褐色土シルトで占められており、出土遺物は無いが古代に属すると判断した。

柱痕が確認された事から周囲の土坑を精査したところ、同様の覆土を持つ土坑が1.5m間隔で直線上に並んだために、柵列と判断した。あるいは周辺の土坑の中にも本遺構に付随するものがあるかもしれず、掘立柱建物が存在する可能性も捨てきれないが、現時点では確認できなかった。



第32図　畠畝跡１・２・３群　模式図（Ｓ＝1/200）



畠畝跡第１群

1　にぶい黄色土　　シルト質。しまり良い。

2　黄褐色土　　シルト質。粘性強い。ややしまり悪い。酸化鉄粒子混入。

第33図　畠畝跡第１群（S＝1/100）

畠畝跡第１群

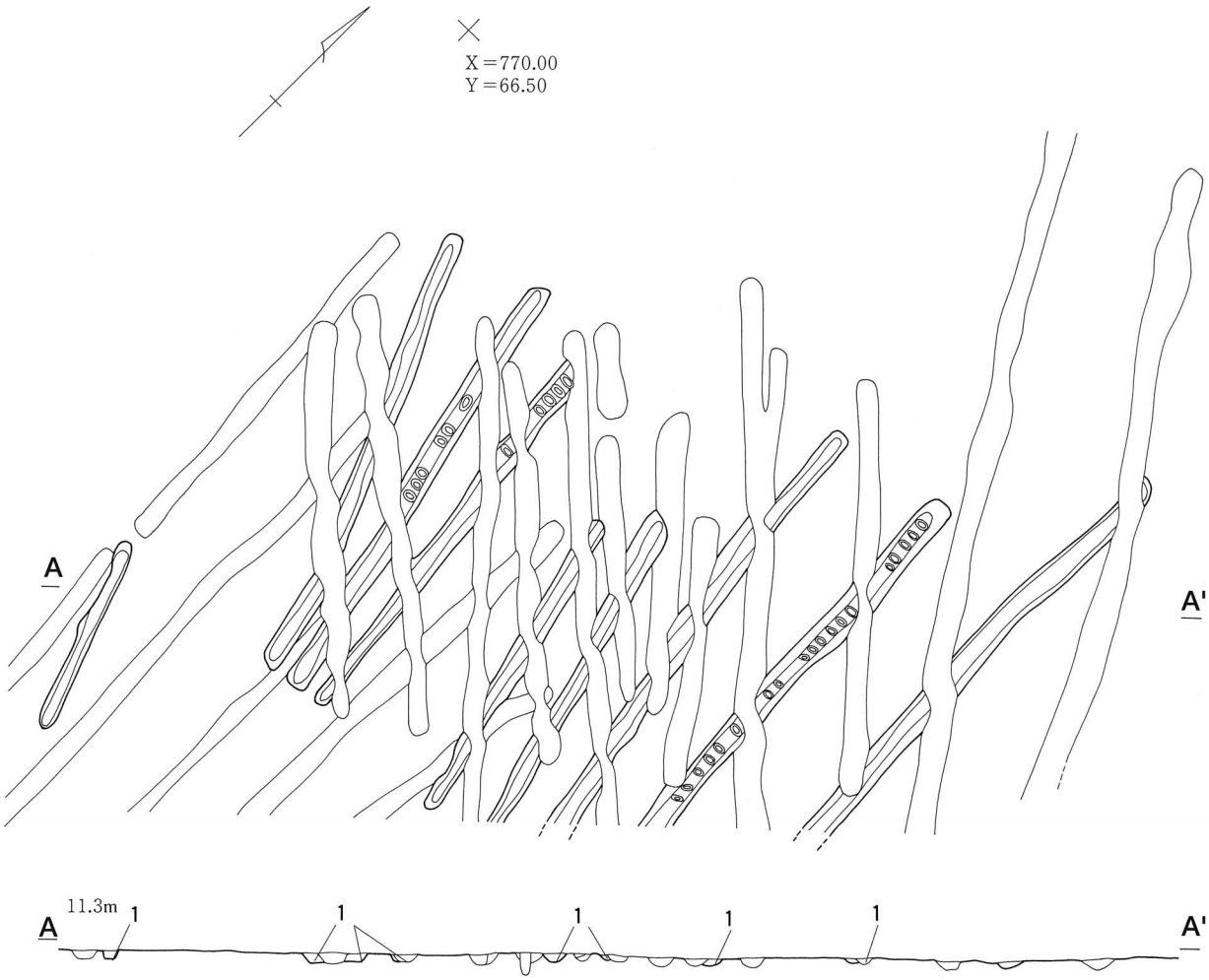
調査区北東部で検出した。第２・３群と重複し、これ等に後出する。主軸の方位はおよそN－40°－Wをしめす。覆土は粘性の強い黄褐色土を中心に充填されている。各畝溝の間隔は不整であり、規模も大小様々である。あるいは別群とすべきものをも同一にしてしまった恐れもあるが、現時点では新たな可能性を探り出す事はできなかった。出土遺物は図版に掲載した２点のみである。

いずれも覆土中～上位より出土した。

第34図　畠畝跡１群出土遺跡（S＝1/3）

畠畝跡第１群出土遺物

遺物番号	出土地点	種別	器種	全長	外径	孔径	重量(g)	胎土混入物	焼成	形態・手法の特徴・その他
146	第１群３溝	土錘		5.35	1.5	0.35	12.0	白色砂粒 白色針状物質	良	
遺物番号	出土地点	種別	器種	口径(基径)	底径	器高	胎土混入物	焼成	形態・手法の特徴・その他	
147	第１群５溝	須恵器	壺の底部		(12.4)		白色砂粒	良・堅緻		



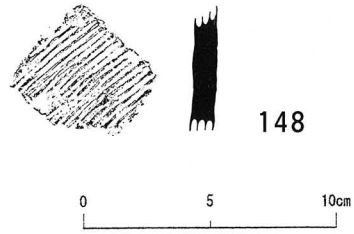
畠畝跡第２群

1　黄褐色土　　粘性強い。しまり良い。地山粒子(少量)混入。

第35図　畠畝跡第２群（S＝1/100）

畠畝跡第２群出土遺物

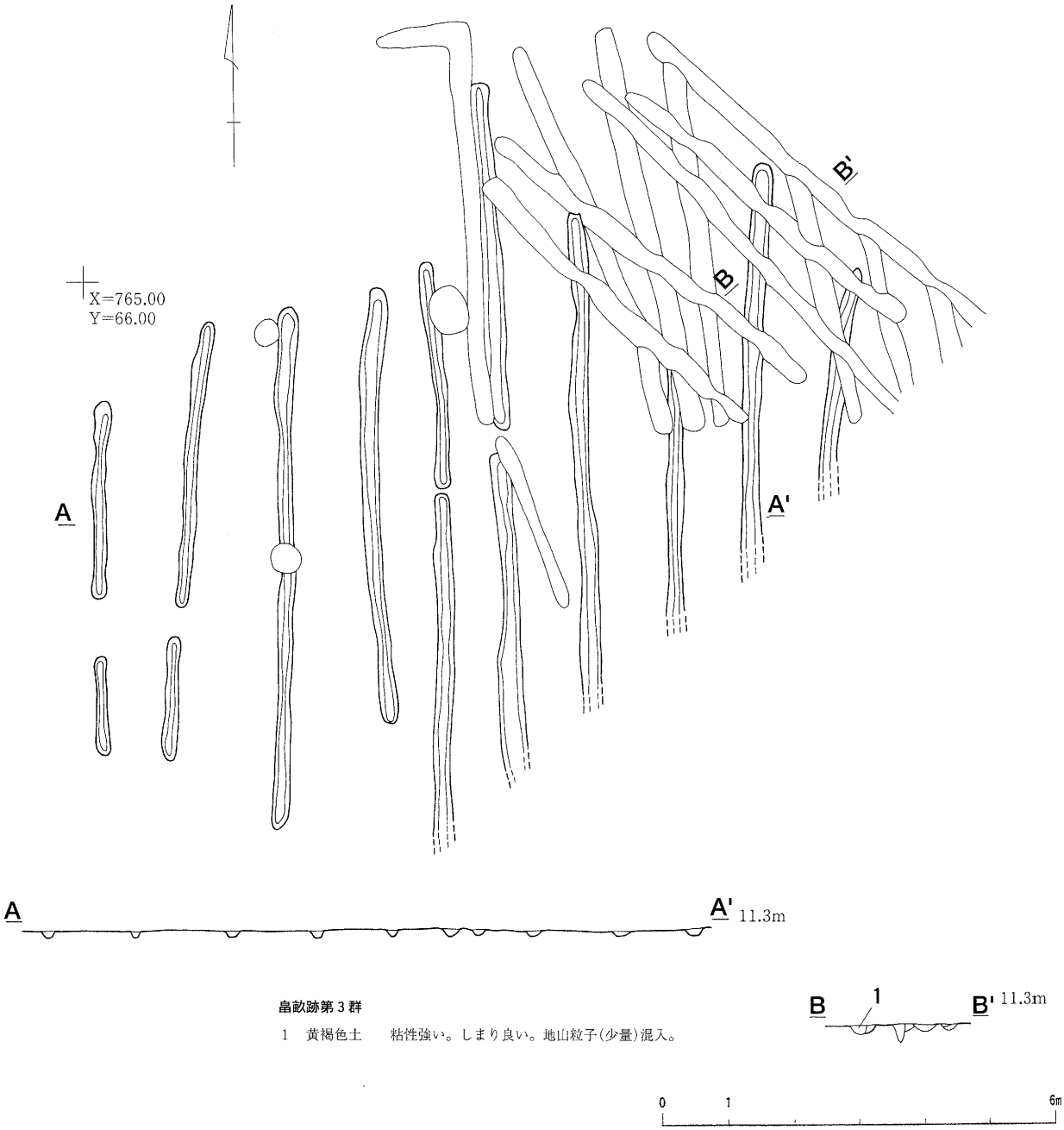
遺物番号	出土地点	種別	器種	口径(基径)	底径	器高
148	第２群５溝	須恵器	甕			
胎土混入物	焼成	形態・手法の特徴・その他				
白色砂粒	良・堅緻	大甕体部破片。外面には叩き痕。				



第36図　畠畝跡第２群出土遺物(S＝1/3)

畠畝跡第２群

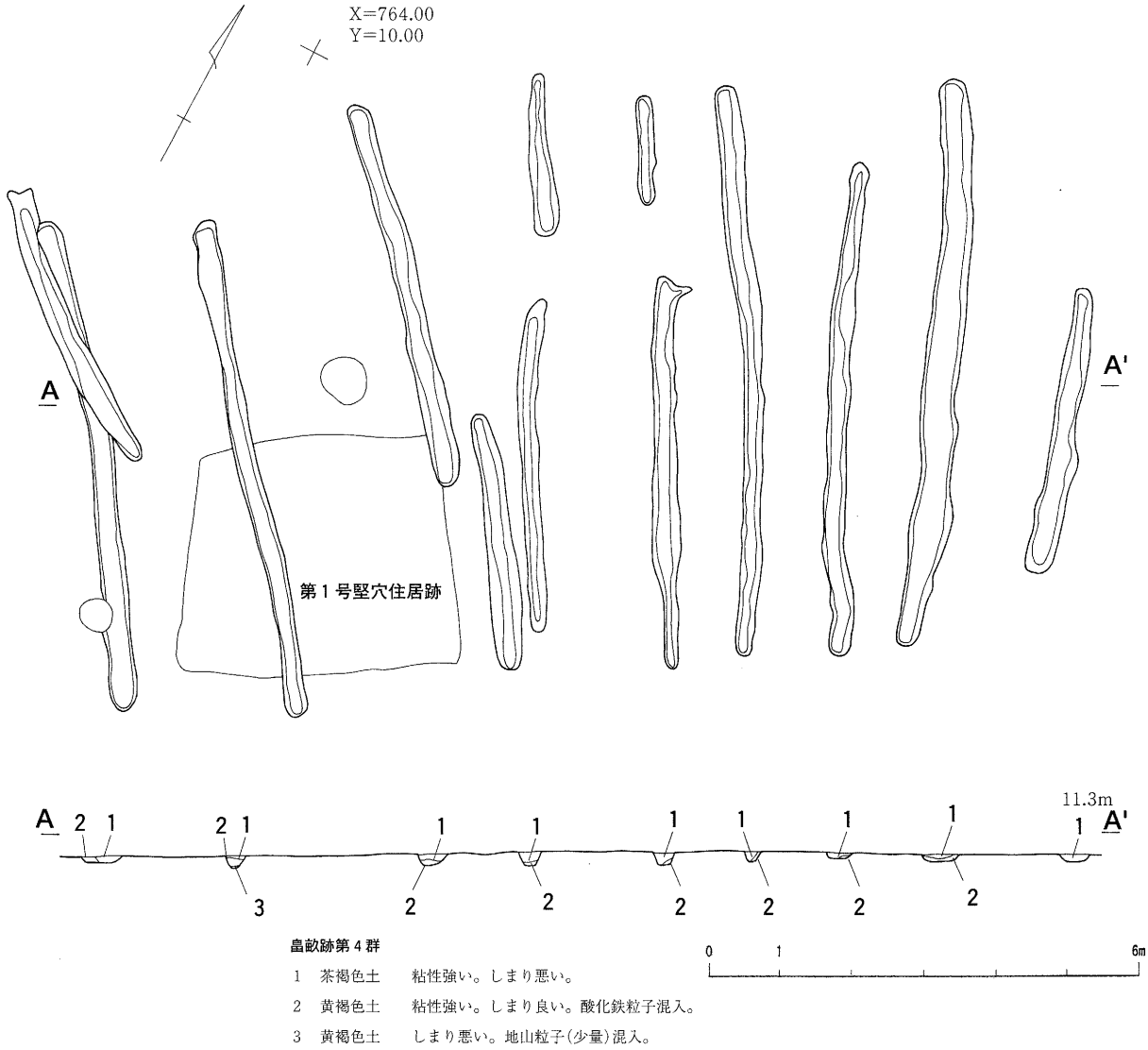
調査区北東部で検出した。第１・３群と重複する、第１群に前出し、第３群とは後出の関係にある。主軸の方位はおよそＮ－３°－Ｗをしめす。覆土は粘性の強い黄褐色土を中心に充填されている。第１・３群の覆土とは極めて近似しており、切り合い関係を把握するのに手間取った。各畝溝の間隔は不整である。一部の畝溝の底には径20㎝、深さ５㎝ほどの小ピットが連続している。出土遺物は図版に掲載した１点のみで、覆土中位から出土した。



第37図　畠畝跡第３群（Ｓ＝1/100）

畠畝跡第３群

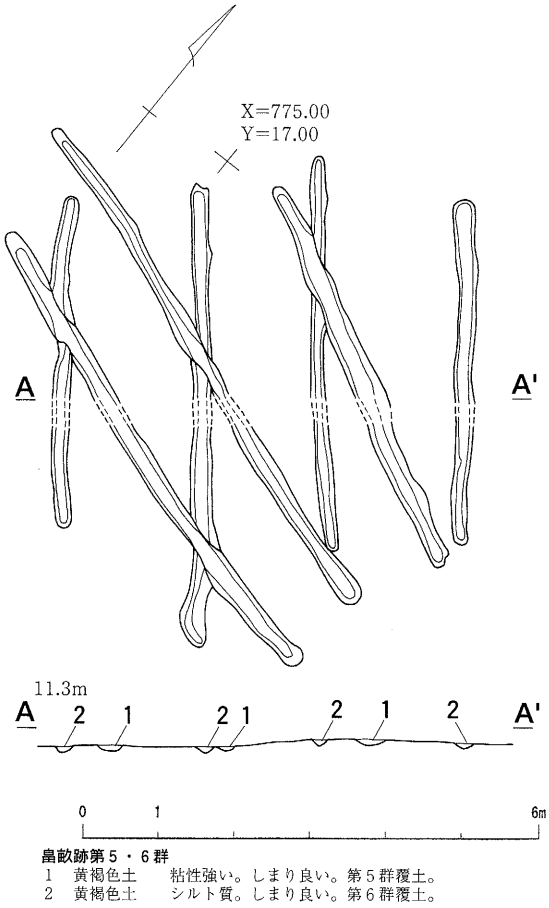
調査区北東部で検出した。第１・２群と重複し、これらに前出する。重複の激しい近辺の畠畝跡の中では最も古いものである。主軸の方位はおよそ真北をしめす。覆土は粘性の強い黄褐色土を中心に充填されている。第１・２群の覆土とは極めて近似しており、切り合い関係を把握するのに手間取った。各畝溝の間はおよそ１ｍ間隔で整然と配置されている。出土遺物はない。



第38図　畠畝跡第４群（Ｓ＝1/100）

畠畝跡第４群

調査区北部で検出した。第１号竪穴住居跡、第２号掘立柱建物跡と重複し、前者とは後出、後者とは前出の関係にある。主軸の方位はおよそＮ－20°－Ｗをしめす。覆土は粘性の強い黄褐色土を中心に充填されている。各畝溝の間はおよそ１ｍ間隔で配置されている。出土遺物はない。



第39図　畠畝跡第５・６群（Ｓ＝1/100）

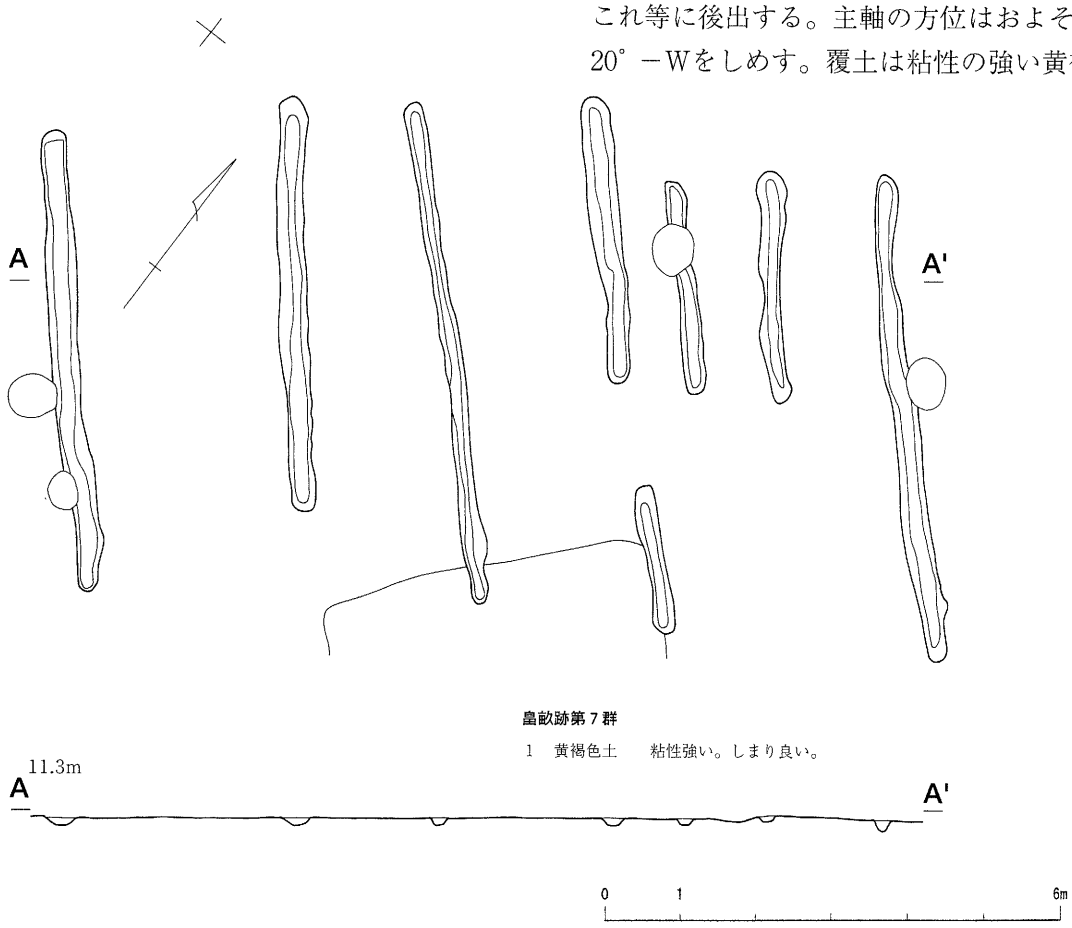
畠畝跡第５・６群

調査区北東部で検出した。互いに重複関係にあり、５群が６群に後出する。主軸は第５群がＮ－60°－Ｗをしめし、第６群がＮ－20°－Ｗをしめす。覆土は第５群が粘性の強い黄褐色土を充填し、第６群はシルト質の茶褐色土を充填する。

７・８・９群とは至近の位置にあり、主軸の方向もほぼ類似していることから、本来は同一グループにすべきなのかもしれないが、その積極的な根拠を探し出せなかったために、別グループと判断したものである。各畝溝の間は５号がおよそ１ｍ、６号がおよそ1.5mの間隔で整然と配置されている。出土遺物はない。

畠畝跡第７群

調査区北部で検出した。第２号掘立柱建物跡と重複し、これに前出する。また第３号竪穴住居跡、第３号掘立柱建物跡とも重複し、これ等に後出する。主軸の方位はおよそＮ－20°－Ｗをしめす。覆土は粘性の強い黄褐色

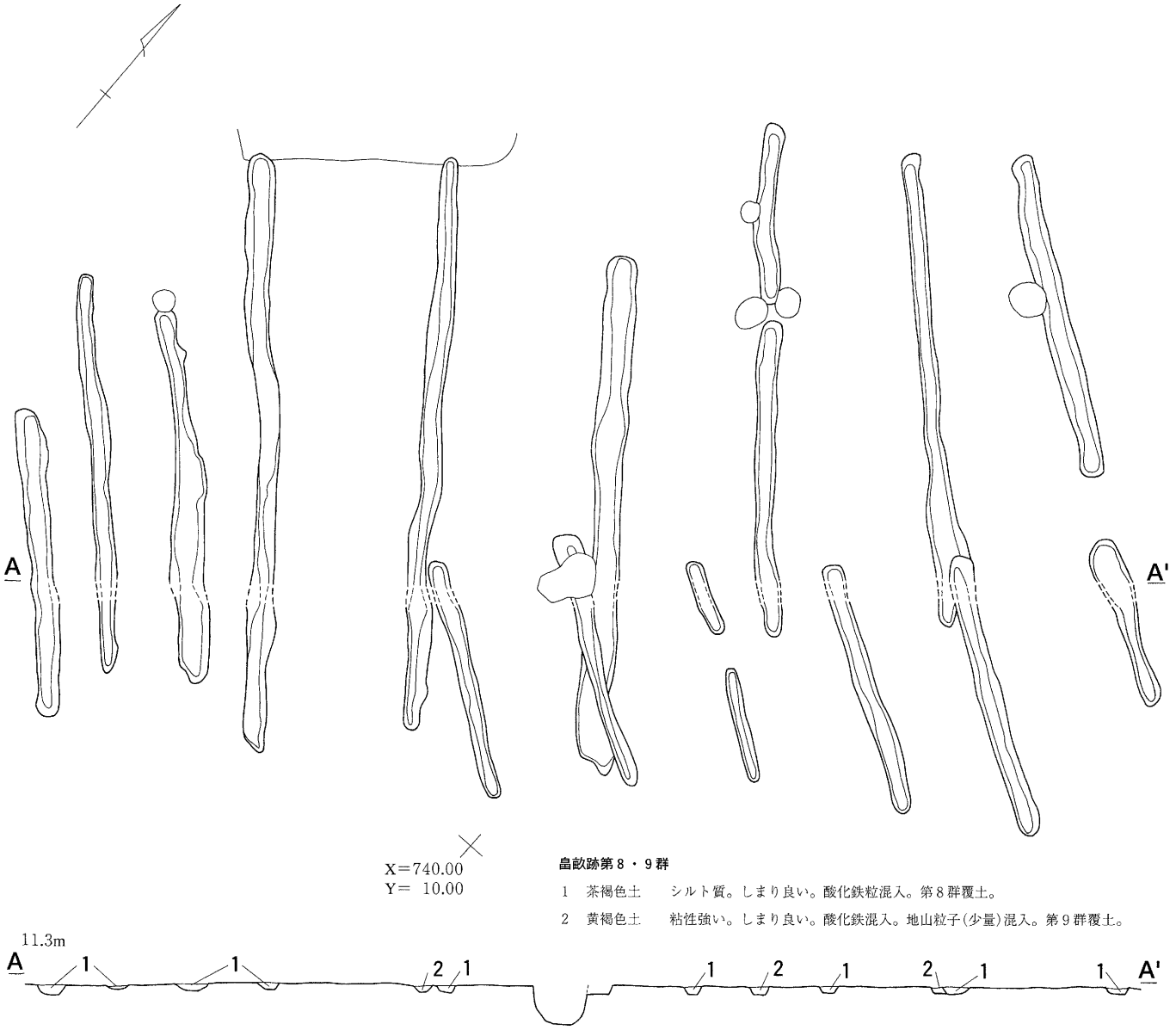


第40図　畠畝跡第７群（Ｓ＝1/100）

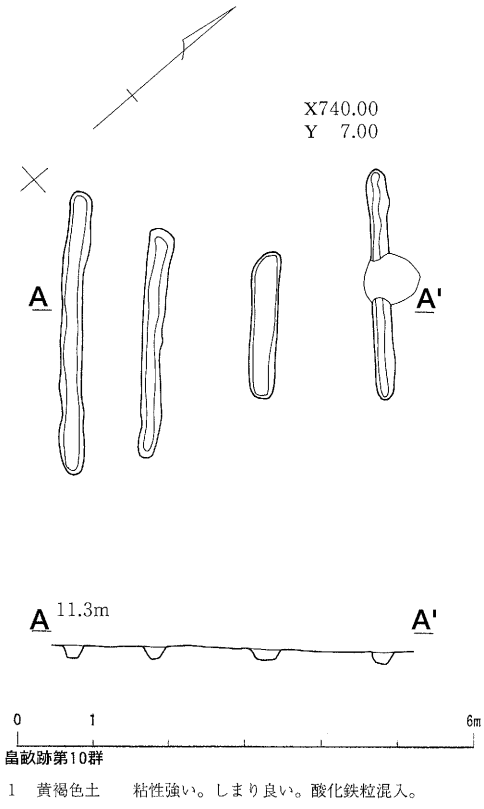
土を充填する。6・9群とは至近の位置にあり、主軸の方向もほぼ類似していることから本来は同一グループにすべきなのかもしれないが、その積極的な根拠を探し出せなかったために、別グループと判断した。各畝溝の間はおよそ0.6～2mの間隔でほぼ整然と配置されている。

畠畝跡第8・9群

調査区のほぼ中央部で検出した。お互いに重複関係にあり、第8群は第9群に後出する。第8群の主軸の方位はおよそN－60°－Wをしめし、第9群はおよそN－20°－Wをしめす。覆土は第8群が粘性の強い黄褐色土を中心に充填されており、第9群はシルト質の茶褐色土を充填する。方向軸がしめすグループ間の切りあい関係やその覆土の特徴は第5・6群と全く同様である。各畝溝の間はおよそ整然と配置されている。出土遺物はない。



第41図 畠畝跡第8・9群（S＝1/125） 0 1 7m



第42図 畠畝跡第10群（S＝1/100）

畠畝跡第10群

調査区のほぼ中央部で検出した。主軸の方位はおよそN－45°－Wをしめし、第9群とは至近の位置にあり、主軸の方向もほぼ類似していることから本来は同一グループにすべきなのかもしれないが、その積極的な根拠を探し出せなかったために、別グループと判断したものである。

各畝溝の間はほぼ整然と配置されている。覆土は粘性の強い黄褐色土を中心に充填されている。

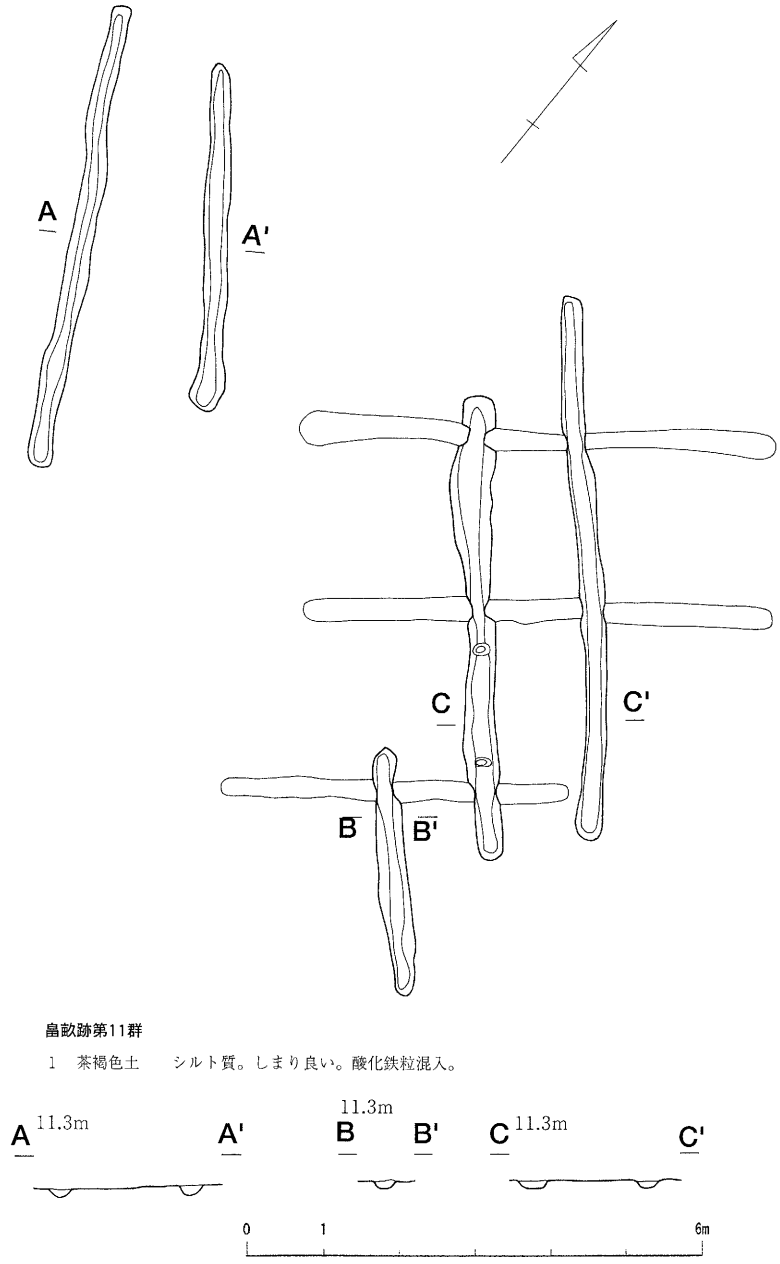
第2号掘立柱建物跡と重複し、これに前出する。

畠畝跡第11群

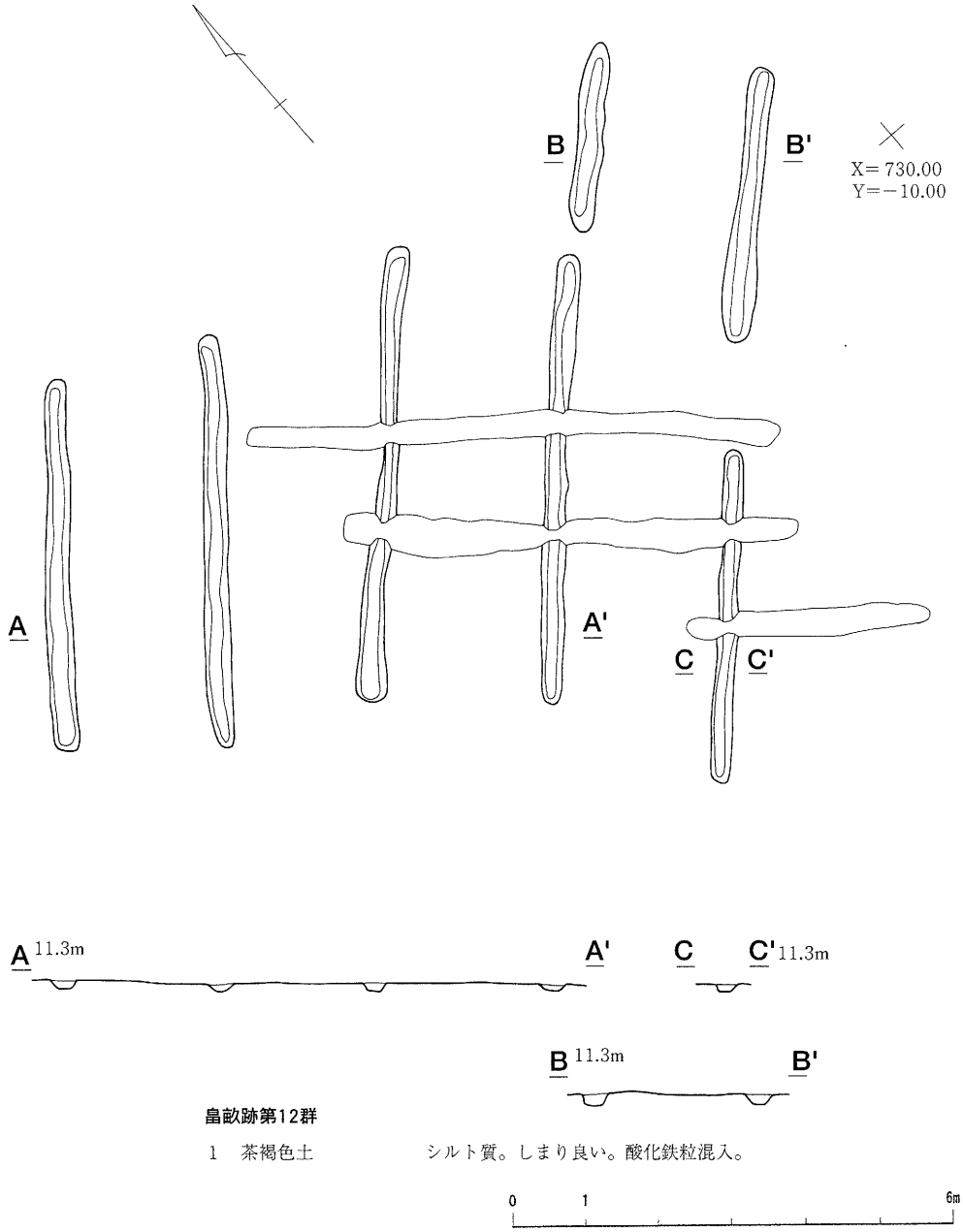
調査区中央部、第4・5号住居跡の至近で検出した。第12群と重複し、これに後出する。主軸の方位はN－45°－Wをしめす。覆土は第1～10群と第11～14群では異なり、黄褐色土より赤みがかったシルト質の茶褐色土が充填される。

第2群と同様に、溝底には直径20cm、深さ5cmの小ピットが存在する。あるいは耕作痕かもしれない。各畝溝の間はおよそ1m間隔で整然と配置されている。

出土遺物はない。



第43図 畠畝跡第11群（S＝1/100）



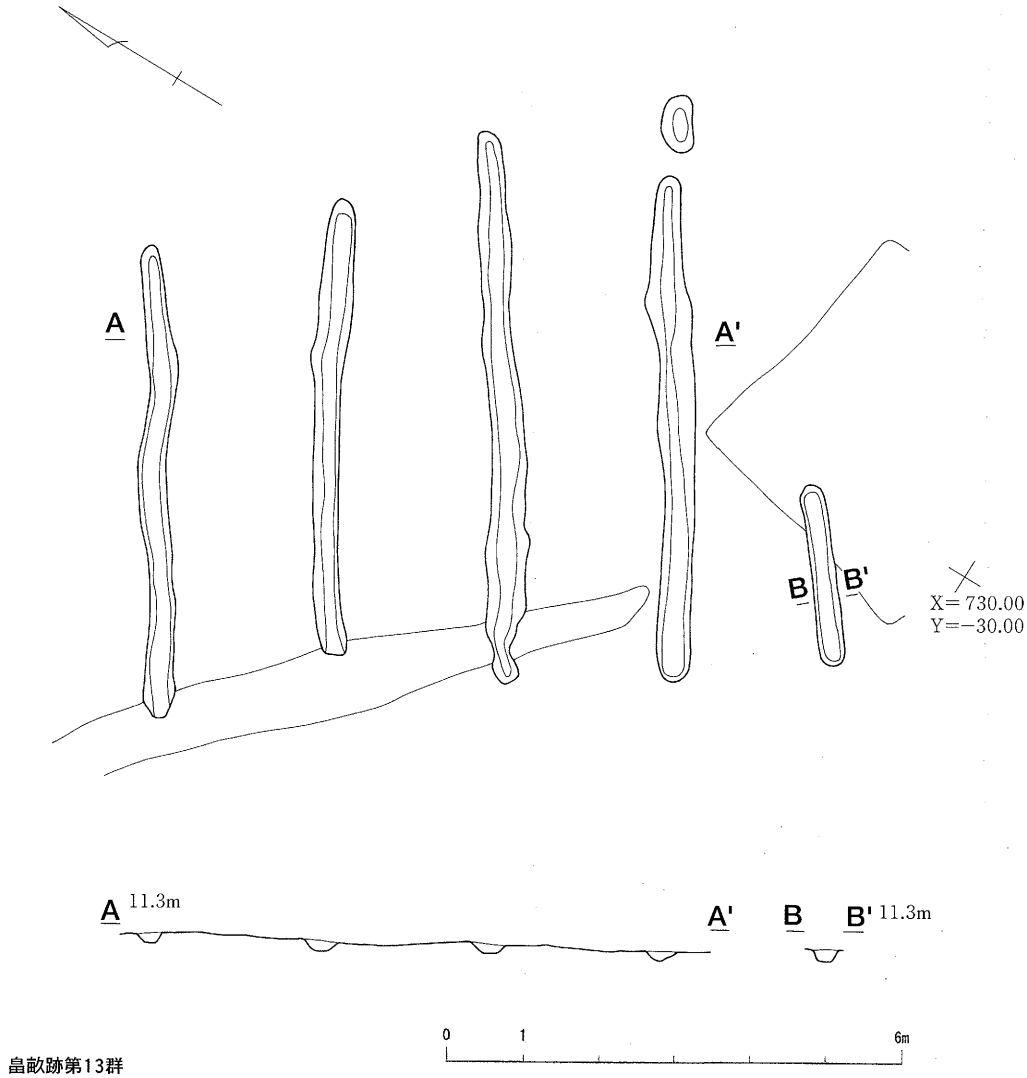
第44図　畠畝跡第12群（S＝1/100）

畠畝跡第12群

調査区西部、第４・５号住居跡で検出した。第11群と重複し、前出する。主軸の方位はN－40°－Eをしめす。この第12群と第13群のみが東西方向にのびる畠畝溝である。覆土にはシルト質の茶褐色土が充填されている。第11群の覆土とは全くの同質であり、その切りあい関係を把握するのに手間取った。各畝溝の間はおよそ２m間隔で整然と配置されている。出土遺物はない。

畠畝跡第13群

調査区西部、第４・５号住居跡で検出した。第５号住居跡と重複し、これに後出する。主軸の方



畠畝跡第13群

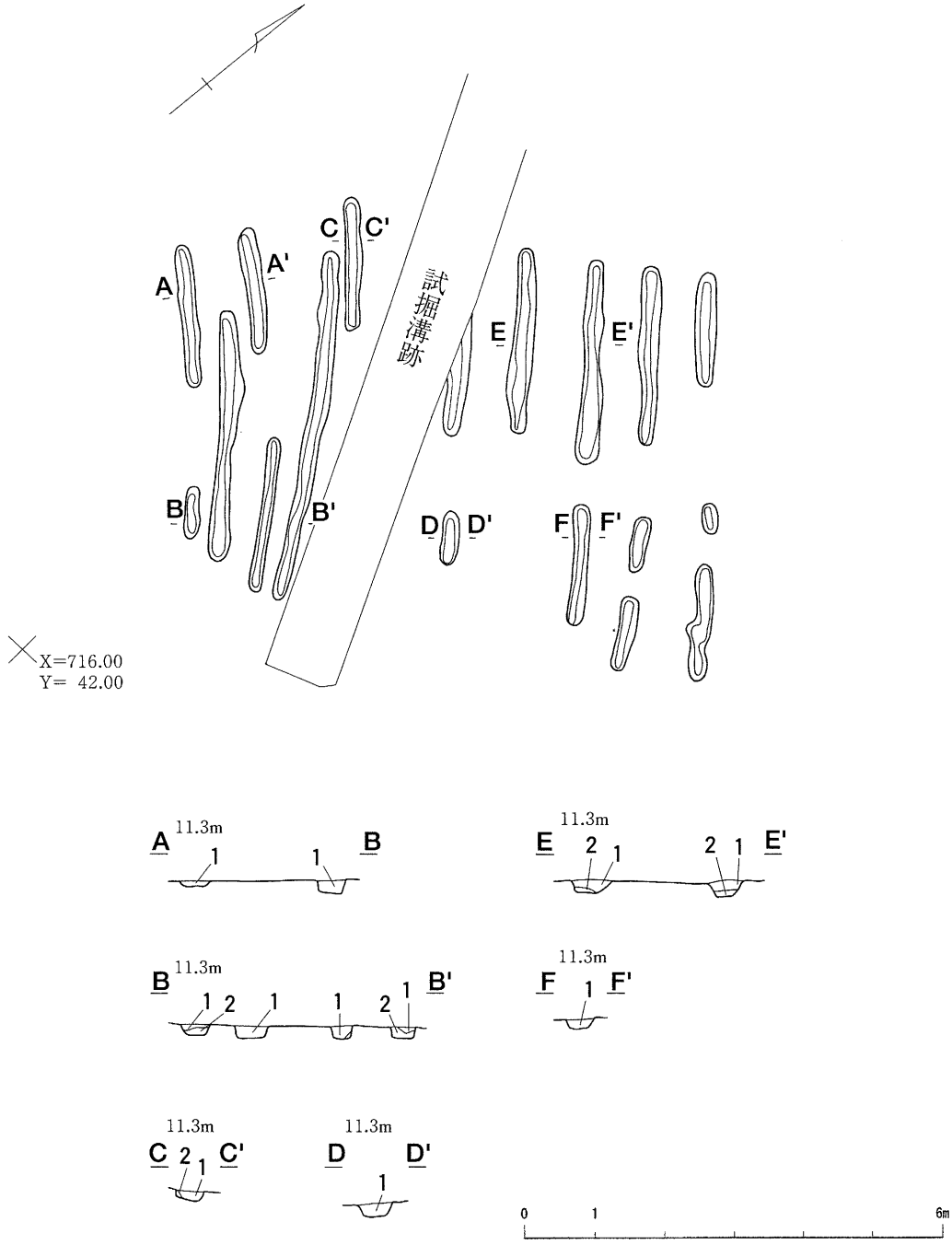
1　茶褐色土　　11・12群に比してより色調が赤みがかる。地山粒子混入。

第45図　畠畝跡第13群（S＝1/100）

位はN－50°－Eをしめす。覆土は第11・12群に比べ、より赤みの帯びた茶褐色土が充填されている。各畝溝の間はおよそ２m間隔で整然と配置されている。出土遺物はない。

畠畝跡第14群

調査区西方隅で検出した。一部撹乱を受けて壊されている。主軸の方位はN－50°－Wをしめす。覆土は第13群と同様に、より赤みを帯びた茶褐色土を中心に充填されている。土層断面を観察すると、赤みを帯びた茶褐色土がまず堆積し、その直上に第１～10群でみられた黄褐色土が堆積していた。一概には言えないが本遺構でのこの堆積状況から類推すると、茶褐色土を覆土にもつ第1



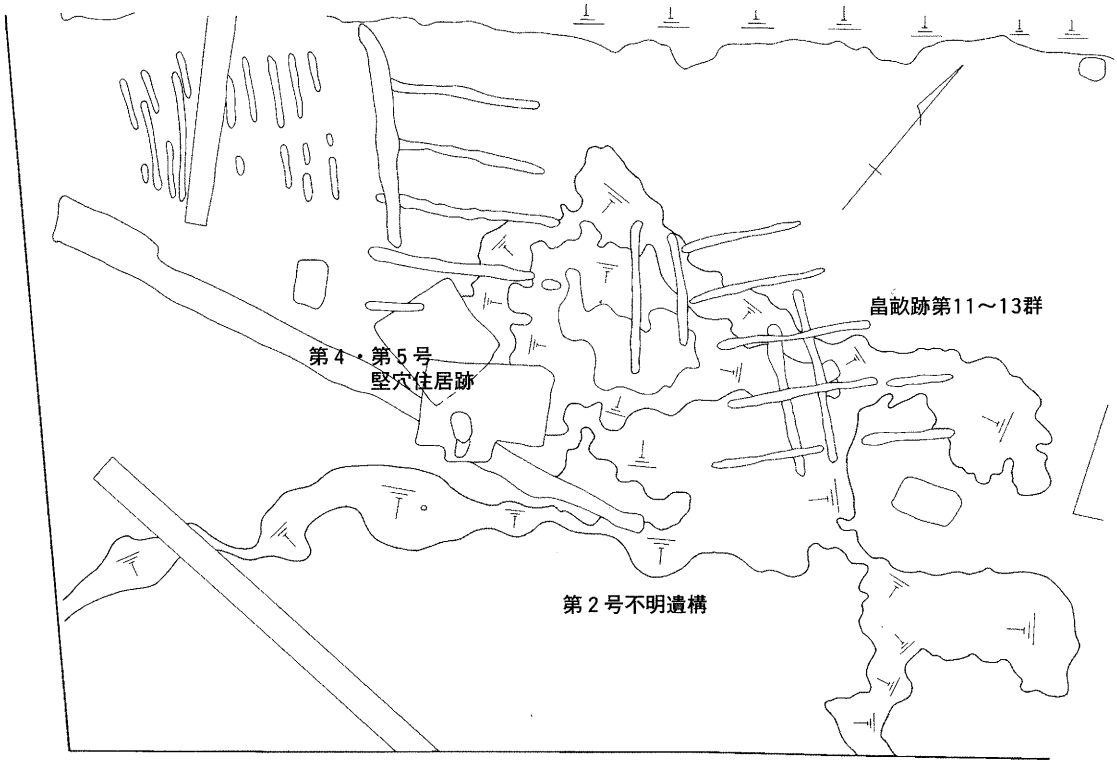
畠畝跡第14群

1　茶褐色土　　シルト質。しまり良い。混入物皆無。

2　茶褐色土　　シルト質。しまり良い。地山粒子(多量)混入。

第46図　畠畝跡第14群（S＝1/100）

～14群が、第１～10群に先行するという可能性も指摘できる。各畝溝の間はおよそ50㎝程度の狭い間隔で整然と配置されている。出土遺物はない。



第47図　第２号不明遺構周辺（Ｓ＝1/150）

第２号不明遺構

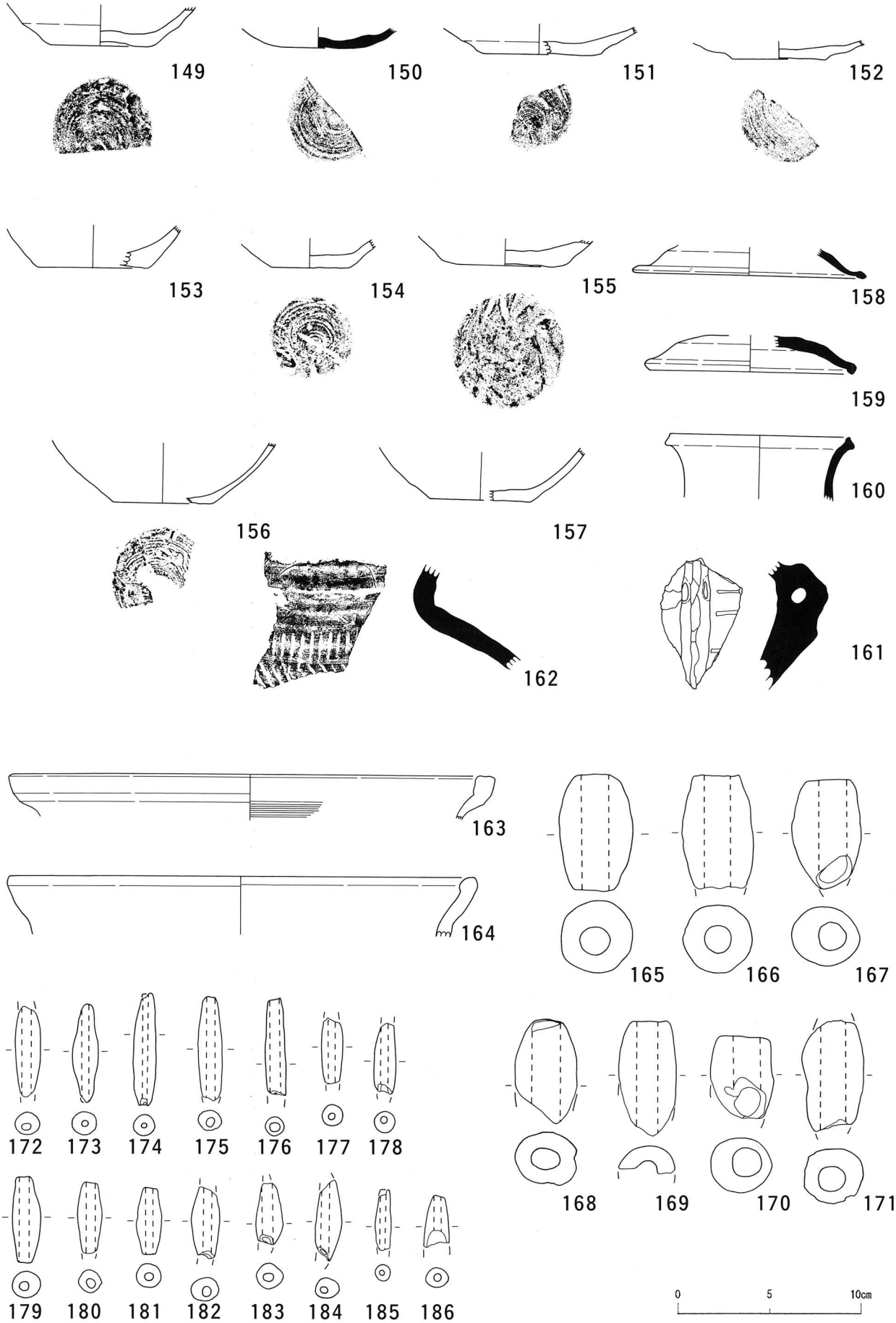
本遺構は調査区南隅で検出した。自然地形の落ち込みである。標高11.00mの等高線を頂点に南方向へ緩やかに傾斜をみせる。本調査区の中で確認された比高差は約20cmである。

隣接する調査区（富山市教育委員会　1999）の図面を合成したものが第59図である。これによるとこの自然地形の落ち込みはさらに南東方向に伸びており、標高11.00mよりの最大比高差はマイナス50cmを測る。

第４・５号住居跡はこの落ち込みの間際に位置している。これらの遺構と本遺構の出土遺物ではその年代に大差が無く、ここでそれぞれの立地状況などを勘案すると、ほぼ同時期に存在したと考えられる。つまり、第４・５号住居跡の設置にあたっては本遺構の落ち込みの存在を念頭に選地されて営まれたと推察される。

これに対して、畠畝跡第11～13群はこの自然地形を無視するように本遺構上に進出している。これまでの遺構観察により畠畝跡が全て竪穴住居跡に後出する事がわかっているが、これら遺構群の検出状況をみるかぎり本遺構の埋没過程をはさんでその前に竪穴住居跡が、その後に畠畝群がそれぞれ営まれたと考えられる。

出土遺物は掲載分も含めて、土師器片29点、須恵器片６点、土錘22点、石１点である。遺物はその多くが標高10.90m付近より出土している。つまりこれらの遺物は埋没過程の最終期に属すると思われる。土錘が多いが、まとまって出土するということはない。



第48図　第２号不明遺構出土遺物（Ｓ＝1/3）

2号不明遺構出土遺物

遺物番号	出土地点	種別	器種	口径(基径)	底径	器高	胎土混入物	焼成	形態・手法の特徴・その他
149	2号不明遺構	土師器	埦		5.6		白色砂粒	不良	底部には回転糸切り痕。体部外面は無調整のままで、ロクロ成形痕が残る。内面は見込み部が未調整のまま。摩滅が激しい。
150	2号不明遺構	須恵器	坏A		4		白色砂粒	不良	摩滅が激しく、調整方法等の詳細は不明。
151	2号不明遺構	土師器	皿か		6.2		白色砂粒	やや良	底部には右回転糸切り痕。底部を僅かに高台状に残す。底部内面は全面ナデ調整。
152	2号不明遺構	土師器	皿か		5.2		白色砂粒	やや不良	底部には左回転糸切り痕。底部を高台状に残す。底部内面は全面ナデ調整。内外面赤彩の痕跡あり。
153	2号不明遺構	土師器	甕か		(6.1)		白色砂粒	不良	摩滅が激しく、調整方法等の詳細は不明。
154	2号不明遺構	土師器	甕か		4.4		白色砂粒 白色針状物質	やや良	底部には右回転糸切り痕。底部を僅かに高台状に残す。底部内面は全面ナデ調整。
155	2号不明遺構	土師器	甕か		5.4		白色小石 白色針状物質	やや不良	摩滅が激しく、調整方法等の詳細は不明。
156	2号不明遺構	土師器	埦		5.4		白色砂粒 白色針状物質	やや不良	摩滅が激しく、調整方法等の詳細は不明。
157	2号不明遺構	土師器	埦		(5.6)		白色砂粒	不良	摩滅が激しく、調整方法等の詳細は不明。
158	2号不明遺構	須恵器	蓋	(12.9)			白色砂粒	良・堅緻	口辺部は大きく外反する。口縁端部は丸みを帯びる。
159	2号不明遺構	須恵器	蓋	(11.2)			白色砂粒	やや不良	口辺部は外反し、口縁端部は丸みを帯びる。
160	2号不明遺構	須恵器	長頸壺	(10.0)				良・堅緻	
161	2号不明遺構	須恵器	双耳瓶				白色小石	良・堅緻	
162	2号不明遺構	須恵器	甕	頸部径 (26.4)			白色小石 白色針状物質	良・堅緻	
163	2号不明遺構	土師器	鍋か	(26.7)			白色砂粒	良	口縁端部を折り返し、方形に成型。
164	2号不明遺構	土師器	甕	(25.6)			白色砂粒	良	口縁端部を折り返し、丸く成型。

遺物番号	出土地点	種別	器種	全長	外径	孔径	重量(g)	焼成	胎土混入物	その他
165	2号不明遺構	土錘		6.5	4.1	1.7	103.9	良	白色砂粒	
166	2号不明遺構	土錘			3.8	1.5	81.4	良	白色砂粒 白色針状物質	
167	2号不明遺構	土錘			3.85	1.55	61.9	良	白色小石	
168	2号不明遺構	土錘			3.4	1.6	43.2	やや不良	白色小石	
169	2号不明遺構	土錘		6.3	3.2	1.2	22.1	やや不良	白色砂粒	
170	2号不明遺構	土錘		4.55	3.4	1.6	33.6	やや不良	白色砂粒 白色針状物質	
171	2号不明遺構	土錘		6.1	3.5	1.5	53.3	やや不良	白色砂粒 白色針状物質	
172	2号不明遺構	土錘			1.35	0.5	7.3	やや良	白色砂粒	
173	2号不明遺構	土錘		5.4	1.35	0.4	7.2	やや不良	白色砂粒 白色針状物質	
174	2号不明遺構	土錘		6.3	1.1	0.3	8.2	やや良	白色砂粒	
175	2号不明遺構	土錘			1.3	0.55	6.7	やや良	白色砂粒	
176	2号不明遺構	土錘			1.5	0.6	6.7	良	白色砂粒 白色針状物質	
177	2号不明遺構	土錘			1.2	0.4	4.5	やや良	白色砂粒	
178	2号不明遺構	土錘			1.2	0.4	4.9	やや良	白色砂粒	
179	2号不明遺構	土錘		4.8	1.5	0.55	9.5	やや良	白色砂粒	
180	2号不明遺構	土錘			1.3	0.5	6.0	やや良	白色砂粒	
181	2号不明遺構	土錘		3.7	1.4	0.5	6.0	やや良	白色砂粒	
182	2号不明遺構	土錘			1.55	0.55	7.7	やや良	白色砂粒 白色針状物質	
183	2号不明遺構	土錘			1.5	0.55	6.2	やや良	白色砂粒 白色針状物質	
184	2号不明遺構	土錘			1.3	0.45	6.2	やや良	白色砂粒	
185	2号不明遺構	土錘			0.95	0.3	2.2	やや良	白色砂粒 白色針状物質	
186	2号不明遺構	土錘			1.25	0.4	3.6	やや良	白色砂粒 白色針状物質	

第２節　近世の遺構

検出した遺構の概要

近世以降に属する遺構として、大型掘立柱建物跡２棟と溝状遺構２条を検出した。これらは遺物包含層の掘削の時点でその平面プランがぼんやりと確認されており、本来はこれらの遺構を内包するもう一面上層の遺構確認面があると考えられる。

遺構覆土の特徴や共通点からこれらの遺構は水田耕作土層の直下より掘り込まれたものと考えられる。これらの構築時期を特定し得る遺物の出土には恵まれなかったが、この地に現在のような一面の水田が営まれはじめた時期の考慮からこれらの遺構の年代を近世（江戸時代前期）と判断した。

なお、第２号溝状遺構のみ覆土の特徴が異なり、その年代を出土遺物から19世紀末と判断した。

第１号掘立柱建物跡

調査区北東部で検出した大型の掘立柱建物跡である。畠畝跡第３群と重複する。柱間寸法３ｍの４間×５間の総柱を基調とするが、最西列のみ構造が異なる。最西列南端のＰ29～Ｐ33は小規模ではあるが、いずれも柱穴である。

土層観察によるとこれら柱穴の構造は、粘性の強い灰黄褐色土を版築土としてしまりよくつき固められており、さらに構造を安定させるために拳大の河原石を投入している。木柱は残存していなかったが、土層断面により柱痕跡が確認された。

また、これら整然と並んだ柱穴を取り囲むように３条の掘り込みの浅い溝が周囲をめぐる。その覆土は柱穴の版築土と同様の粘性の強い灰黄褐色土であるが、しまりはよくない。溝底はごく僅かに酸化している。あるいは建物に付随する雨落としの溝かもしれない。また溝１と溝２の間の空間では若干硬化が認められていることから人の動きが推定され、溝２のＬ字状の形状をも考え合わせると玄関・勝手口といった施設の存在も想定し得えよう。出土遺物はない。

柱穴覆土の灰黄褐色土は本遺構と第２号と第１号溝状遺構にのみで、特徴的である。

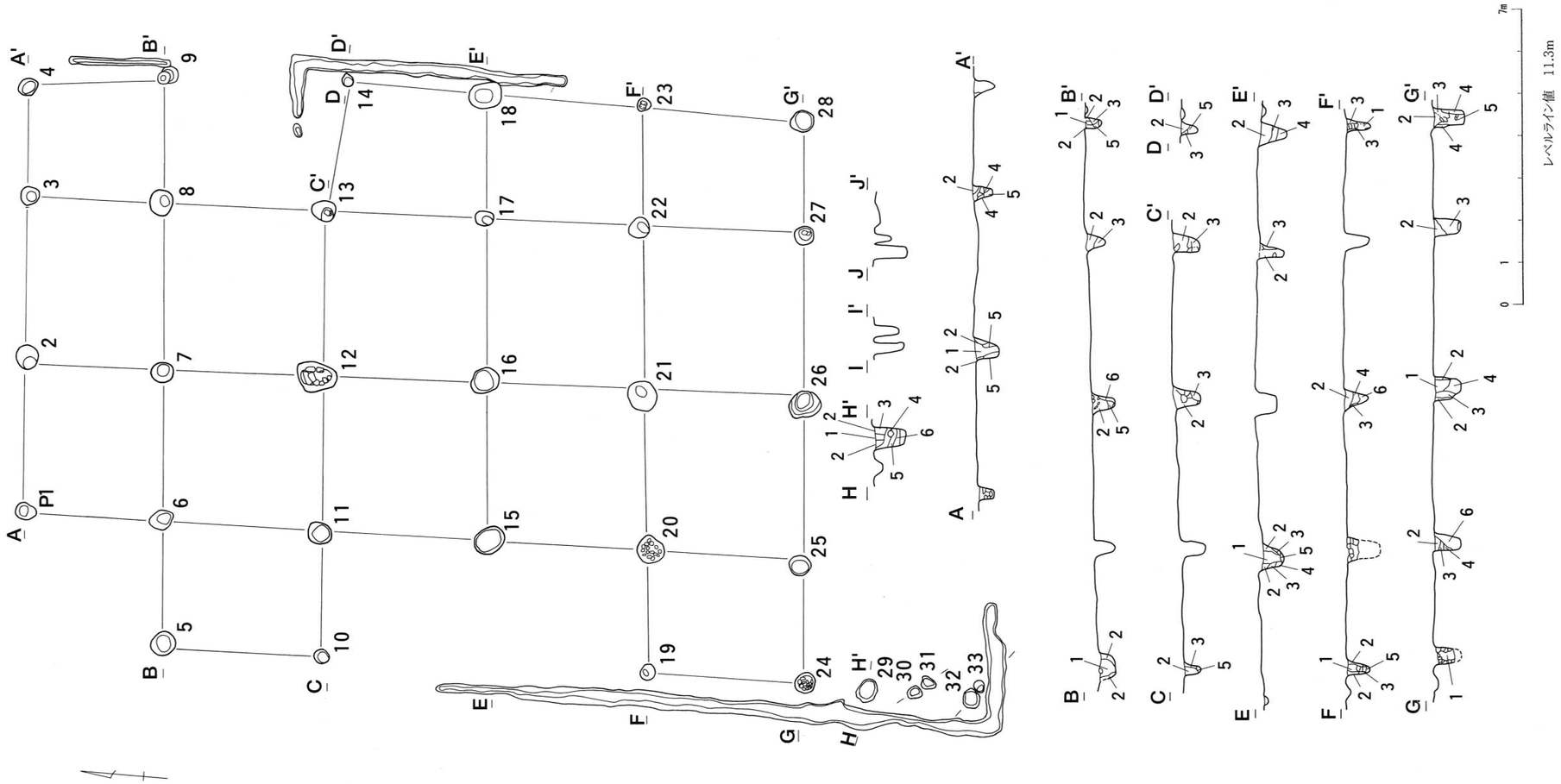
第２号掘立柱建物跡

調査区のほぼ中央に位置する。第２・３号住居跡、畠畝跡第７・８群と重複する。柱間寸法約３ｍの３間×４間の総柱を基調とするが、最東列のみ構造が異なる。この最東列のピットのみ他と比べて規模が小さく、庇などの構造物を想定すべきかもしれない。

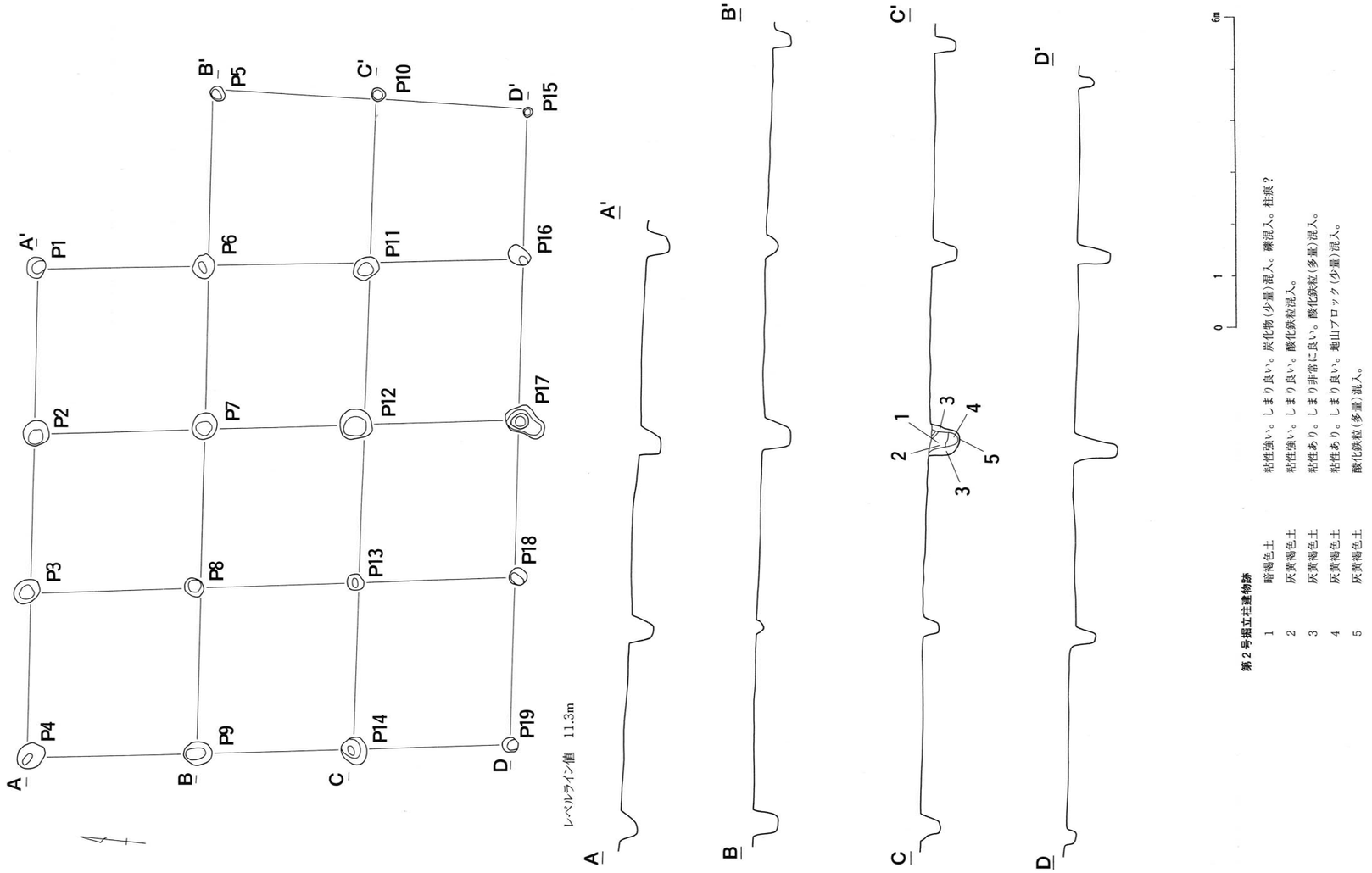
柱穴の規模は第１号とほぼ同様で、その構造も粘性の強い灰黄褐色土を版築土としてしまり良くつき固めていた。ただし、第１号にみられた根石は検出されなかった。木柱は検出されず、柱痕跡をＰ13で確認したのみである。出土遺物はない。

第１号掘立柱建物跡の最南列柱穴（Ｐ24～28）のちょうど西方向の延長上に、本遺構の最北列柱穴（Ｐ１～４）が所在しており、このふたつの掘立柱建物跡は約７ｍの間隔を持ち主軸を同じくして存在している。

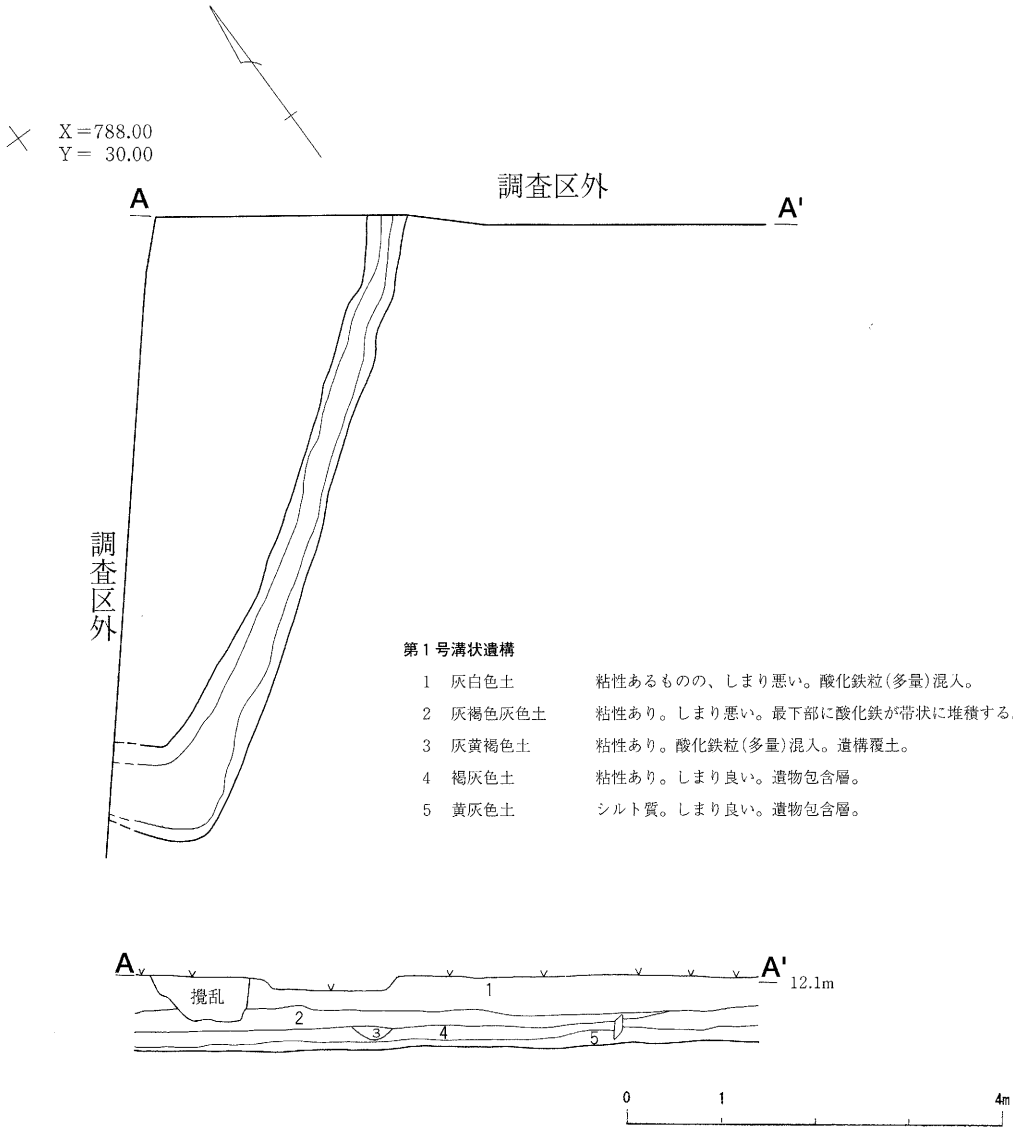
構造・建物の主軸が同一であることから、第１・２号掘立柱建物跡は同時期のしかも直接的関係（主屋と母屋といったような）にあったと考えられる。



第49図　第１号掘立柱建物跡（Ｓ＝1/125）



第50図　第２号掘立柱建物跡（Ｓ＝1/100）

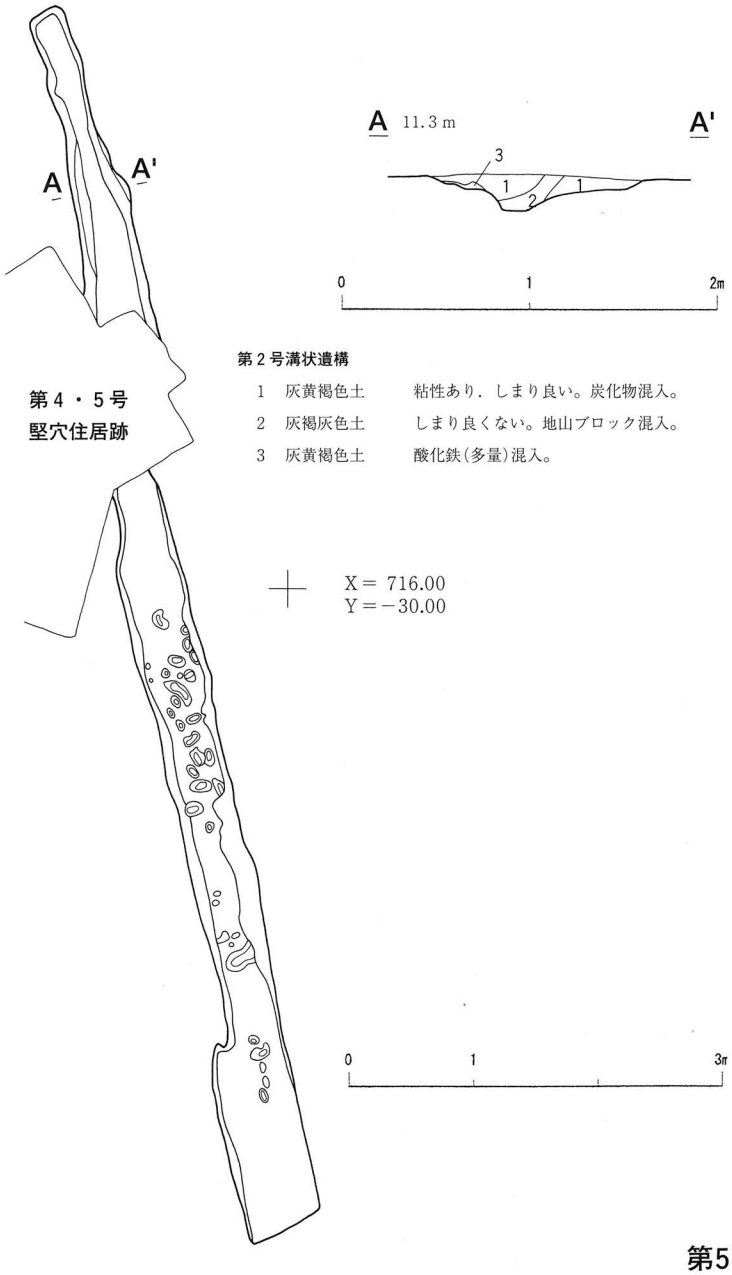


第51図　第１号溝状遺構（Ｓ＝1/80）

第１号溝状遺構

調査区の北東隅で検出した。調査区外にのびており、遺構の全容・規模は不明である。土層断面の観察によると、本遺構は水田耕作土（第１～２層）の直下の古代（もしくは中世？）遺物包含層の第４層（第４図　河川跡土層断面図の第７層に相当か）より掘り込まれている。覆土は粘性の強い灰黄褐色土が充填されている。この覆土は本遺構と第１・２号掘立柱建物跡にのみみられるために、これを根拠に本遺構を同一時期の所産と捉え、金屋南遺跡の周辺に水田耕作が営まれる直前ないし直後をその具体的な年代として推定した。ただし本遺構と第１号・２号掘立柱建物跡とは主軸を同一にしない。

溝底は若干酸化しており、往時は水の留まっていた環境であったことを示唆している。これは第１号掘立柱建物跡に付随する溝の特徴と同じであり、さらには形状が同じくＬ字状を呈していることから、この調査区外に本遺構の主体となるべき掘立柱建物が存在する可能性がある。出土遺物はない。



第52図　第２号溝状遺構（平面図1/160・断面図1/40）

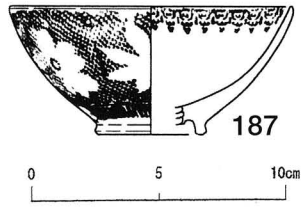
第２号溝状遺構

調査区北西部で検出した。第４号住居跡と重複し、これに後出する。溝底には深さ５㎝ほどの、凹凸面ともいうべき小ピットが存在し、一面酸化鉄で覆われている。覆土には、前述の近世遺構とは異なる、しまりの無い灰色粘土が中心にみられる。これは水田耕作土と同質である。酸化鉄に覆われた溝底は全面にわたり硬化している。

溝底より19世紀末と思われる瀬戸・美濃焼の碗破片が出土した。

基本層序の観察から、本遺構の本来の遺構確認面は、現況より約50㎝上方にあったと考えられる。検出時ではごく浅い掘り込みであったが、往時は深さ50㎝を超える規模を持つ、水の留まるような溝であったと考えられる。

水田と関連する遺構とも考えられたのだがその性格を突き止めることはできなかった。



第53図　第２号溝状遺構出土物（Ｓ＝1/3）

２号溝状遺構出土遺物

遺物番号	出土地点	種別	器種	口径(基径)	底径	器高	産地	時期	文様	その他
187	2号溝状遺構	瀬戸・美濃	碗	(11.2)	4.4	5.1	瀬戸・美濃	19ｃ末	紅葉桜文	型紙刷り

第３節　時期不明の遺構

検出した遺構の概要

ここにあげた遺構は、出土遺物もなく時期を推定し得る材料のないもので、全て遺物包含層の精査時にはプランを確認できずに、遺構確認面の精査時になって確認した。確証はないが、古代に構築された可能性もある。

あるまとまりをもっているのが特徴的であり、大きく調査区北東隅にまとまるグループと調査区中央部にまとまるグループに大別される。いずれも畠畝溝跡に隣接している。

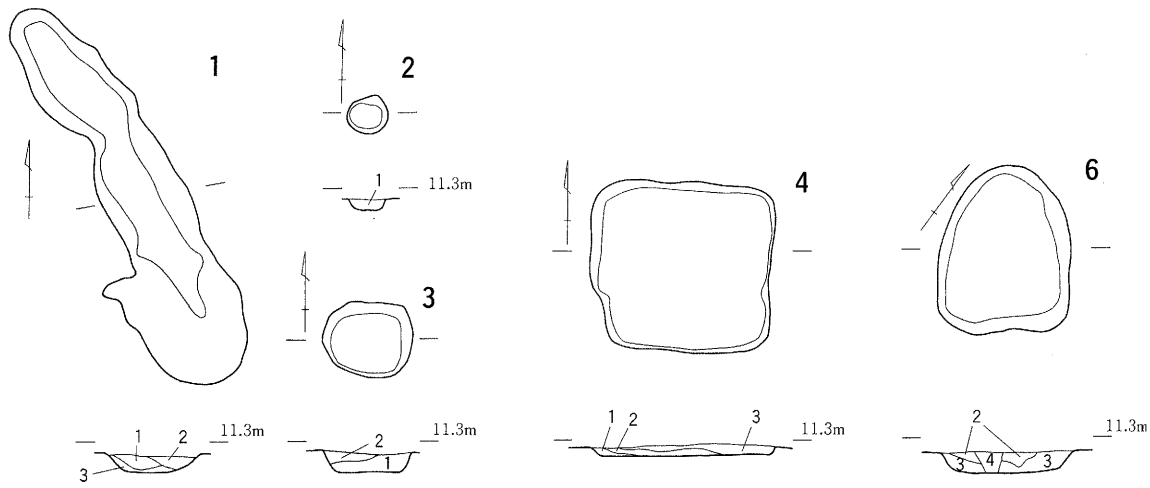
第１・23・24号土坑は、検出した位置や形態から畠畝の溝とも考えられるが、これらの溝とは覆土が全く異なることから別遺構として取り扱った。

第11・16・17・44号土坑は土層断面の観察によると、柱痕跡が確認されている。至近に第１号柵列跡を検出し、その関係または新たな遺構の存在を精査したがその可能性を探し出す事ができなかった。

第31号土坑は底面に焼土ブロックが置かれている。第50号土坑は畠畝跡第11群と重複し、これに前出する。覆土には炭化物が充填されていた。

一群の平面形態は楕円から隅丸方形を意図し、底面は基本的には平坦である。覆土は茶褐色から暗褐色土の自然堆積を示すものが主流で、下層ほどに黄色味を増す。しまりは無い。地山粒子・ブロックの混入は多く、第27・34号土坑のように地山ブロックの混入が大量に及ぶものは一部埋め戻しされている可能性もある。

土坑構築の目的と用途、さらには群集化の理由については、おそらく一過性の目的に供されたものとして判断しても差し支えないだろう。



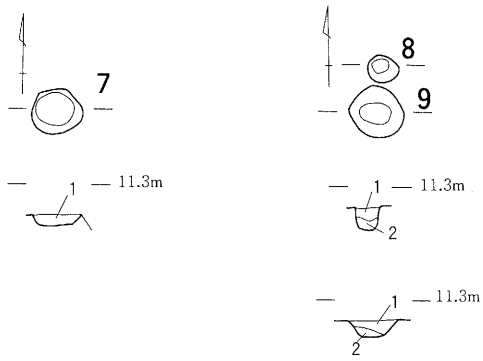
第１・２・３号土坑

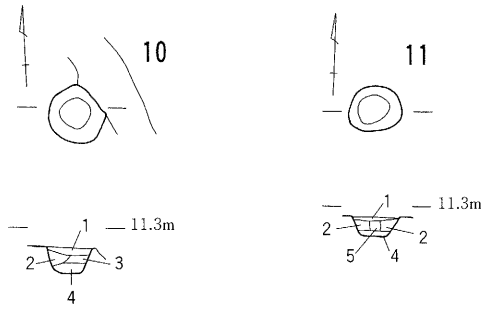
1	暗褐色土	シルト質。しまり良い。
2	黄褐色土	炭化物(少量)混入。
3	黄褐色土	地山粒子(少量)混入。

第４・６号土坑

1	暗褐色土	地山粒子(少量)混入。
2	黄褐色土	しまり悪い。炭化物(少量)混入。
3	黄褐色土	シルト質。しまり良い。
4	茶褐色土	粘性強い。しまり悪い。

第54図　時期不明の遺構（S＝1/60）



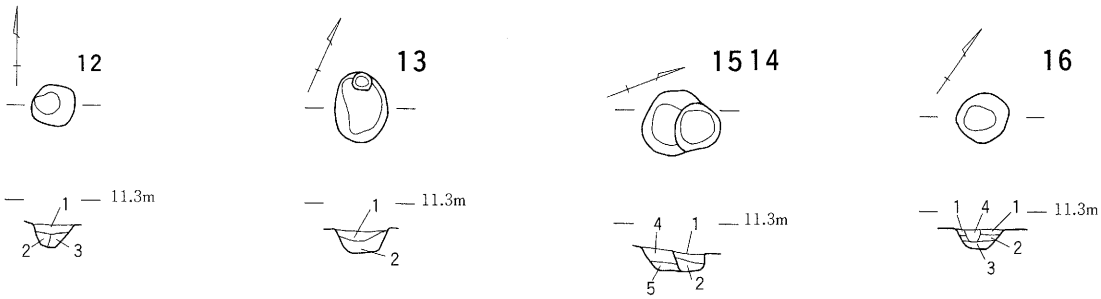


第7・8・9号土坑

1	黄褐色土	シルト質。しまり良い。酸化鉄粒(少量)混入。
2	黄褐色土	シルト質。しまり良い。地山粒子(少量)混入。

第10・11号土坑

1	黄褐色土	シルト質。しまり良い。酸化鉄粒(少量)混入。
2	黄褐色土	しまり非常に良い。ガチガチ。
3	黄褐色土	地山粒子(少量)混入。
4	黄灰色土	しまり非常に良い。酸化鉄粒(少量)混入。
5	茶褐色土	粘性強い。柱痕？

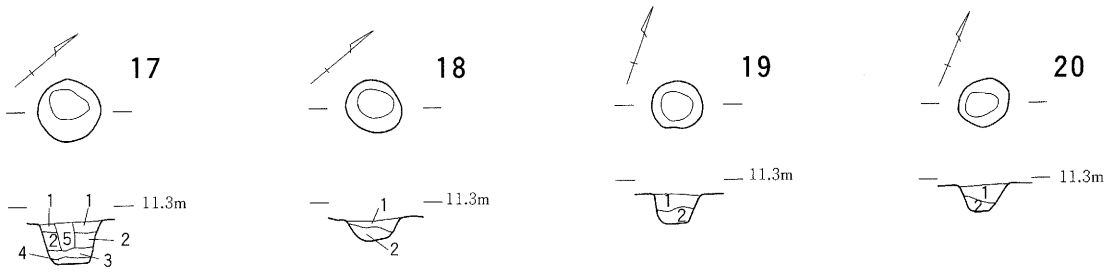


第12・13・14・15号土坑

1	にぶい黄灰褐色土	シルト質。しまり良い。
2	にぶい黄灰褐色土	シルト質。地山粒子(少量)混入。
3	黄褐色土	シルト質。しまり良い。酸化鉄粒(少量)混入。
4	黄褐色土	シルト質。しまり良い。15号土坑覆土
5	黄褐色土	シルト質。酸化鉄粒(少量)混入。15号土坑覆土

第16号土坑

1	黄褐色土	シルト質。しまり良い。
2	黄褐色土	しまり非常に良い。ガチガチ。
3	黄褐色土	シルト質。酸化鉄粒(少量)混入。
4	茶褐色土	粘性強い。柱痕？



第17号土坑

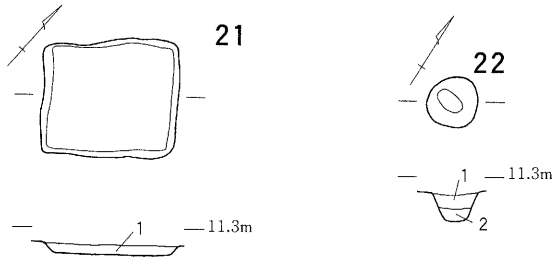
1	黄褐色土	シルト質。しまり良い。
2	黄褐色土	しまり非常に良い。ガチガチ。
3	黄褐色土	シルト質。酸化鉄粒(少量)混入。
4	黄褐色土	地山粒子・酸化鉄粒(少量)混入。
5	茶褐色土	粘性あり。柱痕？

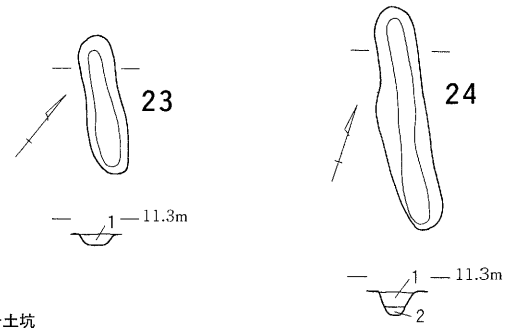
第18・19・20号土坑

1	黄褐色土	シルト質。しまり良い。炭化物(少量)混入。
2	黄褐色土	シルト質。しまり良い。酸化鉄粒(少量)混入。

0　1　3m

第55図　時期不明の遺構（S＝1/60）





第21・22号土坑

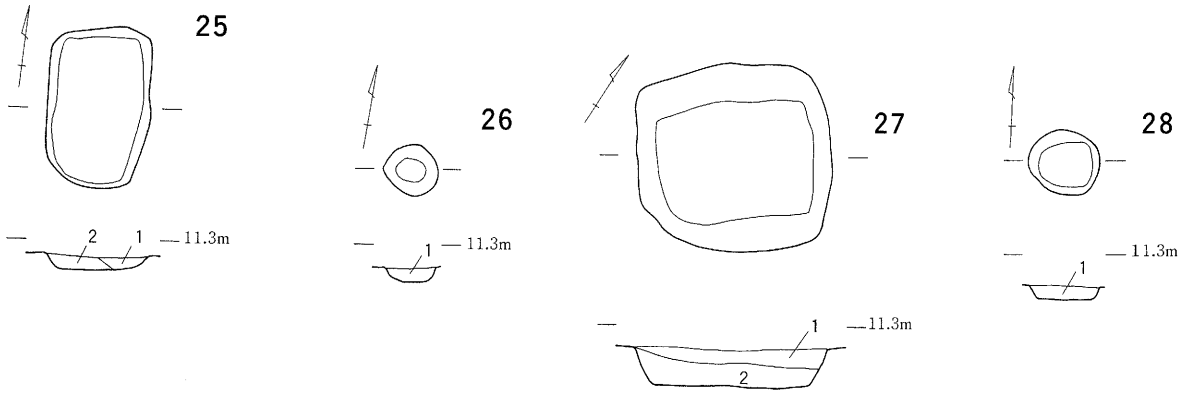
1　黄褐色土　シルト質。しまり良い。炭化物(少量)混入。

2　黄褐色土　シルト質。しまり良い。酸化鉄粒(少量)混入。

第23・24号土坑

1　黄褐色土　シルト質。しまり良い。炭化物(微量)混入。

2　茶褐色土　粘性あり。地山粒子(少量)混入。



第25・26・27号土坑

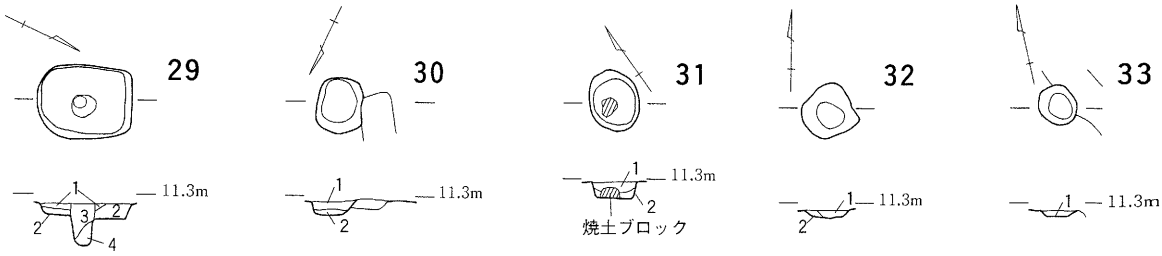
1　黄褐色土　しまり良い。地山粒子(少量)混入。

2　黄褐色土　しまり良い。炭化物(少量)混入。

第27号土坑

1　暗褐色土　粘性あり。しまり良い。地山粒子(多量)混入。

2　黄褐色土　しまり良い。地山ブロック(多量)混入。



第29～33号土坑

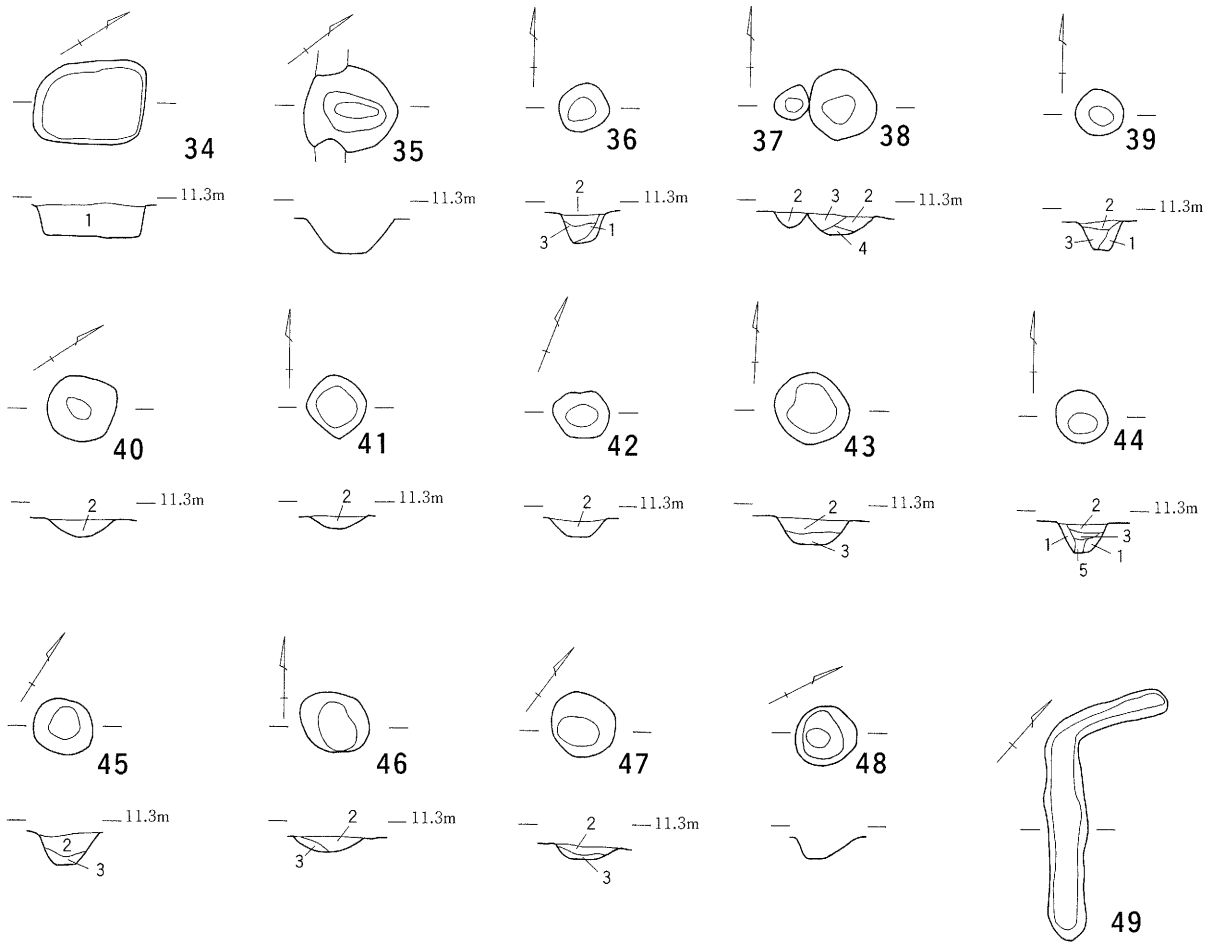
1　暗黄褐色土　シルト質。しまり良い。酸化鉄粒(多量)混入。

2　黄褐色土　しまり良い。

3　暗褐色土　シルト質。しまりなくサラサラ。

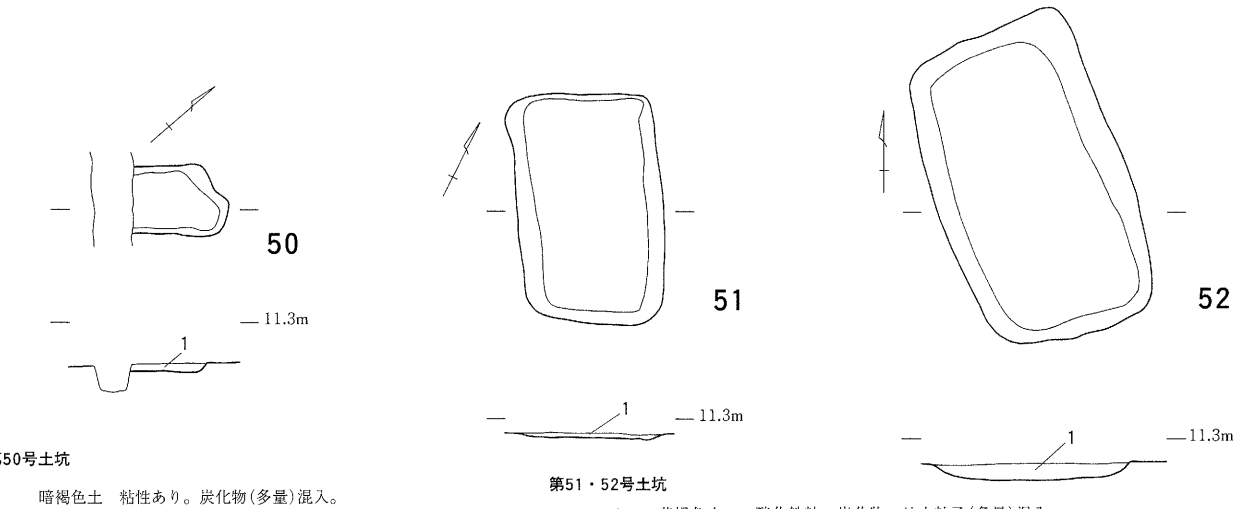
4　暗褐色土　地山粒子・酸化鉄粒(少量)混入。

第56図　時期不明の遺構（S＝1/60）　0　1　3m



第34～49号土坑

1	にぶい黄褐色土	シルト質。しまり良い。酸化鉄粒(多量)混入。
2	にぶい黄褐色土	しまり良い。
3	黄褐色土	シルト質。しまりなくサラサラ。
4	灰黄褐色土	地山粒子。酸化鉄粒(少量)混入。
5	茶黄褐色土	粘性あり。炭化物(微量)混入。柱痕？
6	暗黄褐色土	しまり良い。酸化鉄粒(多量)混入。



第50号土坑

暗褐色土　粘性あり。炭化物(多量)混入。

第51・52号土坑

1　黄褐色土　酸化鉄粒・炭化物・地山粒子(多量)混入。

第57図　時期不明の遺構（S＝1/60）

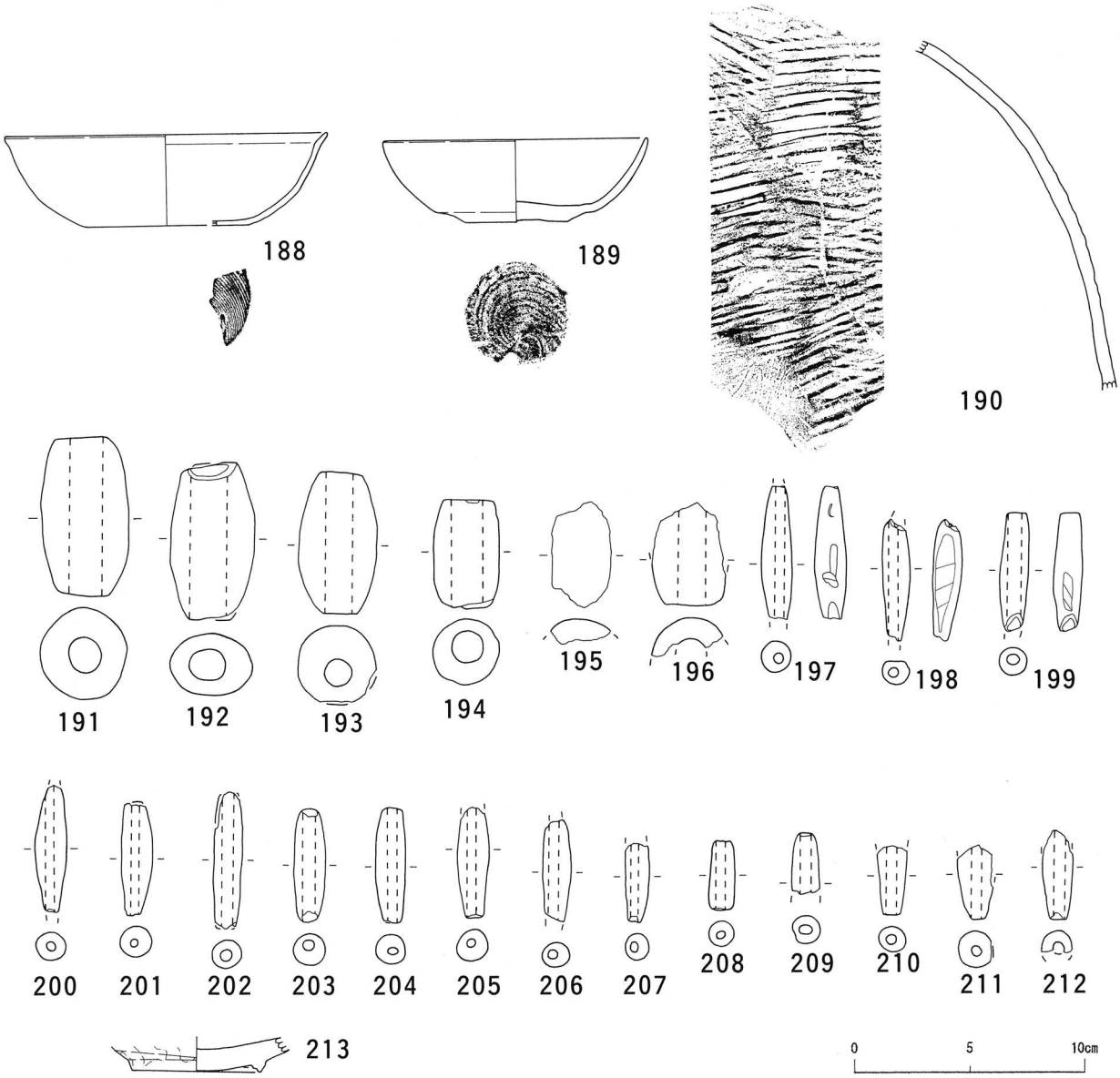
第４節　包含層出土の遺物

包含層と出土した遺物の概観

遺物包含層は調査区全域でみられた。その堆積厚は、概して南西部ほど厚く北東部ほど薄い。これは往時の自然地形のあり方を反映している。平均すると約20㎝の厚さである。本遺跡の東側の調査区に比べるとその厚さは薄い。出土遺物量は掲載分も含めて土師器片385点、須恵器片20点、土錘22点、石15点、近世陶磁器１点である。

古代遺物が圧倒的な数量を成し、それ以外の遺物は僅かに１点に過ぎない。基本層序の項でも述べたが、この出土形態は本調査区では中世遺物包含層が存在しなかった事の証左となろう。

包含層中の遺物は一箇所でまとまって出土するという事はなく、調査区全域において漫然とした出土状況を呈する。合計で22点出土した土錘も同様である。これらの遺物は、幾度かにわたり見舞われたであろう洪水の影響により土砂とともに近隣よりもたらされたものであろう。１点のみ出土した越中瀬戸焼の破片も（河川跡で出土した陶器や鉄滓も）同様の経緯が考えられ、本調査区内に該期の遺構の存在を示唆するわけではない。



第58図　包含層出土遺物（S＝1/3）

包含層出土遺物

遺物番号	出土地点	種別	器種	口径(基径)	底径	器高	胎土混入物	焼成	形態・手法の特徴・その他
188	包含層	土師器	椀	(14.2)	7.3	4.0	白色砂粒	やや良	底部には回転糸切り痕。体部外面にはナデ調整。内面は全面ナデ調整を施す。
189	包含層	土師器	椀	(10.6)	4.4	3.6	白色砂粒 白色針状物質	やや不良	底部には左回転糸切り痕。底部を高台状に残す。口縁部内外面に強いナデ調整を施す。内面にはナデ調整を施さず、ロクロ成形痕が顕著に残る。
190	包含層	土師器	甕				白色砂粒 白色針状物質	やや不良	外面に叩き目痕、内面には指頭痕が残る。

遺物番号	出土地点	種別	器種	全長	外径	孔径	重量(g)	焼成	胎土混入物	その他
191	包含層	土錘		7.0	4.5	1.5	105.8	良	白色砂粒	
192	包含層	土錘			3.65	1.6	55.0	やや不良	白色砂粒	
193	包含層	土錘		6.3	3.5	1.2	69.4	やや不良	白色砂粒	
194	包含層	土錘		4.8	2.9	1.4	34.2	やや良	白色砂粒	
195	包含層	土錘			(401)		11.1	やや不良		
196	包含層	土錘			(3.6)	(1.6)	18	やや不良	白色砂粒	
197	包含層	土錘			1.35	0.4	10.7	良	白色針状物質	
198	包含層	土錘			1.2	0.45	5.8	良	白色砂粒	ヘラ調整により表面に平坦面をつくる。
199	包含層	土錘			1.25	0.55	7.1	やや良	白色砂粒	ヘラ調整により表面に平坦面をつくる。
200	包含層	土錘			1.3	0.4	7.9	良	白色砂粒	
201	包含層	土錘		4.9	1.4	0.35	7.9	良	白色砂粒	
202	包含層	土錘		6.0	1.3	0.5	7.9	良	白色砂粒	
203	包含層	土錘		5.0	1.4	0.55	7.4	良	白色砂粒	
204	包含層	土錘		5.1	1.3	0.4	8.3	良	白色砂粒	
205	包含層	土錘		4.9	1.4	0.4	7.9	良	白色砂粒	
206	包含層	土錘			1.2	0.45	5.2	良	白色砂粒	
207	包含層	土錘		3.5	1.2	0.4	3.4	良	白色砂粒	
208	包含層	土錘		3.05	1.15	0.4	3.5	やや良	白色砂粒	
209	包含層	土錘			1.25	0.6	3.8	やや良	白色砂粒	
210	包含層	土錘		3.05	1.3	0.45	3.4	良	白色砂粒	
211	包含層	土錘		3.3	1.6	0.5	6.3	やや良	白色砂粒	
212	包含層	土錘		3.9	1.4	0.5	4.7	やや良	白色砂粒	

遺物番号	出土地点	種別	器種	口径（基径）	底径	器高	産地	時期	文様	その他
213	包含層	越中瀬戸	皿		5.7					外面に鉄釉が流れる。

Ⅳ 調査のまとめ

今回の調査では、主な遺構として平安時代の竪穴住居跡５棟、掘立柱建物跡１棟、江戸時代の大型掘立柱建物跡２棟を検出した。

平成13年度以前に実施された調査区の古代遺構と本調査区の成果を合成した図面が第59図である。（第59図は平成15年１月現在の本報告書作成時での成果を反映している。基本的には、『金屋南遺跡発掘調査報告Ⅰ』 富山市教育委員会　1999（以下、『金屋南Ⅰ報告書』と略記する）の記載事項をそのまま用いたが、中には未報告分の調査区の成果も一部用いている箇所がある。従って今回報告するこの図面内容は暫定的な検討結果であり、以後新たに報告書が刊行された際にはその記述を最優先としたい。）これによると、西側では今回検出した河川跡、南を第２号不明遺構とした自然地形の落ち込みによって区画された南西から北東に伸びる自然堤防上に古代集落が立地していることがわかる。また、遺構もこれら自然地形の制約に基づいて配置されている。平成13年度までに57,200㎡を対象に行われた発掘調査により、この地の古代遺構のほぼ全貌が明らかになったといえるだろう。

竪穴住居跡は通算で８棟以上検出した。『金屋南Ⅰ報告書』でＳＸ25とされた遺構は竪穴住居の重複であった可能性が高く、出土遺物の年代も今回検出したものとほぼ同一であることから住居棟数に含めた。また、一辺2～3mの方形土坑を2基検出しているが、出土遺物などからあるいは竪穴住居跡の可能性もある。

竪穴住居跡は群を成して位置している。すなわち、第１～３号住居跡のグループ、第4～5号住居跡のグループ、「ＳＸ25」のグループである。第４～５号とＳＸ25は遺構が重複したもので、さらには第１～３号も同時期の所産とするにはそれぞれが近接しすぎている事から、これらはグループというよりもむしろそれぞれ独立した3世帯の住居建て替えを表しているのかもしれない。

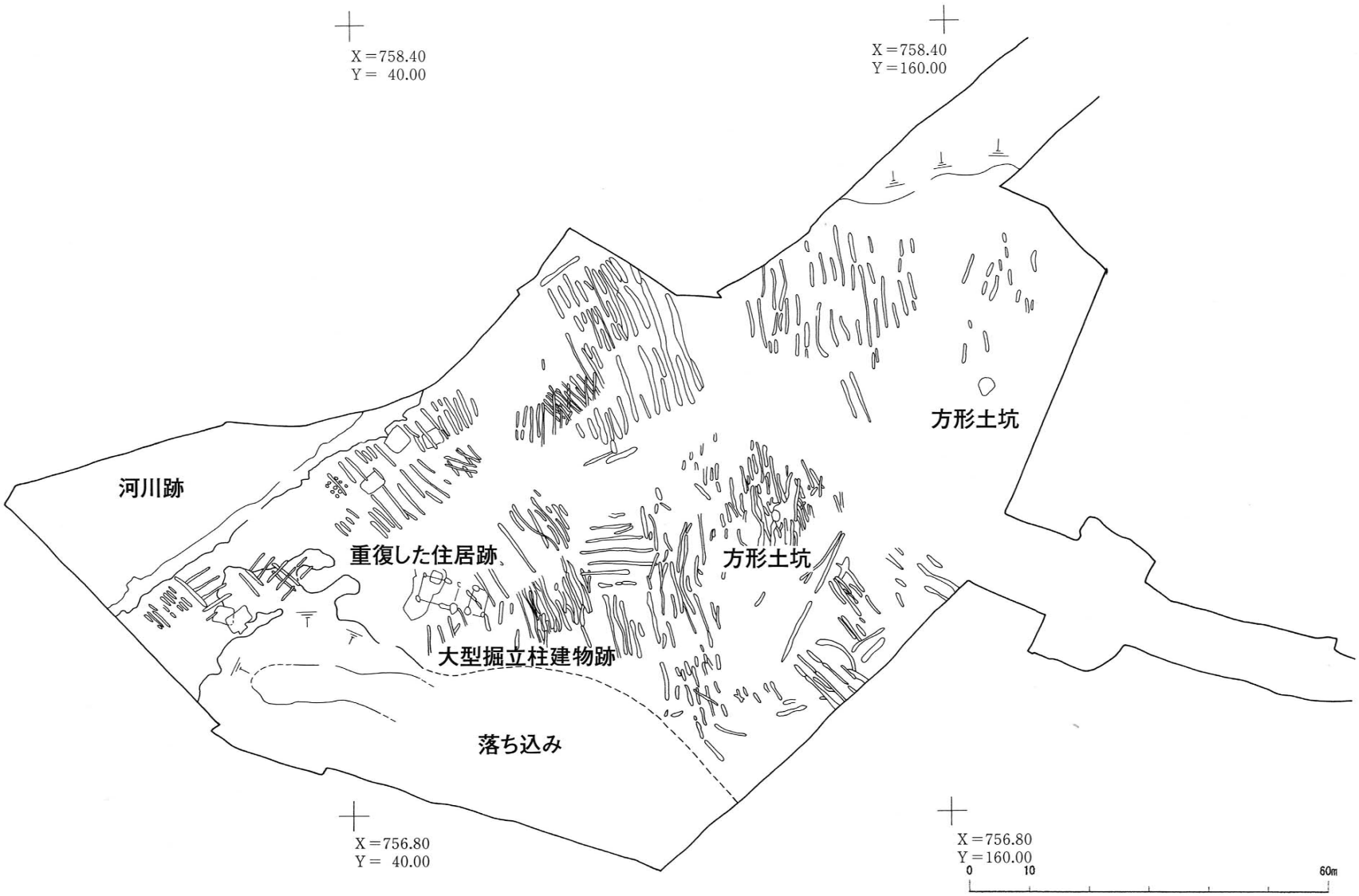
カマドが検出されたのは第4号住居跡のみで、その他は何の設備も持たない簡素なつくりである。第3号掘立柱建物跡は第１～３号住居跡の至近にあり、おそらくこれらと直接的に関係のあったものと考えられる。掘り方は非常に脆弱で柱痕も検出できなかった。調査時は「土坑が建物風に並んでいた」程度の印象しか受けなかった。

『金屋南Ⅰ報告書』でＳＢ12・13とされている掘立柱建物跡はＳＸ25と重複している。新旧関係は不明ながらも掘立柱建物が竪穴住居に後出する可能性が指摘されている。２間×１間、１間×１間の側柱建物で、方形基調の柱穴内には小礫や河原石を根石として用いており、大変堅牢なつくりの建物である。『金屋南Ⅰ報告書』では「公的施設、あるいはそれに準じた建物、富裕層の私邸等が考えられる」とその性格を類推している。

以上に述べた竪穴住居跡、掘立柱建物跡はすべて自然地形の落ち込み、すなわち自然堤防の限界線に面して立地している。

畠畝遺構は、複数の溝状遺構群が整然と並んで構成されるその形態から、性格を判断した。ただし畠作を惹起する種子などの資料は出土していない。第55図をみると畠畝跡が幅約25mのグループでまとまっている事がわかる。これはすなわち、ある種の空間規制のもとで畠作がこの地で行われていた可能性を示すものである。狭い調査範囲の成果で結論付けるのは危険かもしれないが、あえてこのグループ間の空白域を積極的に意味づけるならば、畠の間のあぜ道などの存在が惹起され、この地域における古代陸田制に基づく土地区画の復元にも可能性を残す事になろう。

これら畠畝は第11～13群のような例外もあるが、他の古代遺構と同様に自然地形に制約される状



第59図　金屋南遺跡古代遺構全測図（S＝1/1000）

況をみせている。

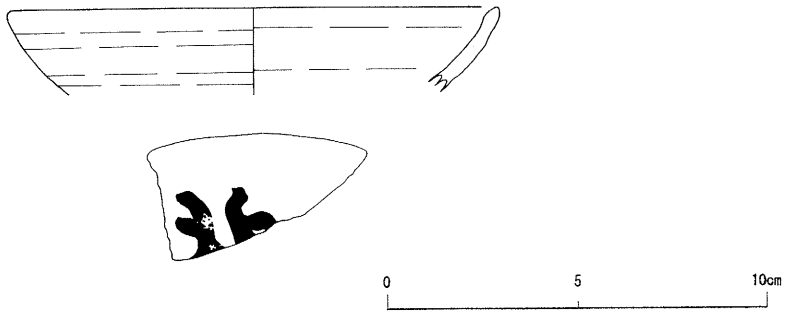
河川跡のへり部分から検出された土器祭祀遺構について現地調査後に他の類例を求めたが、本報告までに探し出す事ができなかった。この河川跡は古代集落が営まれた時期にはすでに水が流れておらず、湿地化していた事が土層観察や自然化学分析によって明らかになっている。

葦やイネ科の植物が生命力あふれるがごとく生い茂る湿地（湿原）は、古来よりわが国では神聖な地としてとらえられていたようである。湧水地に石製模造品や鏡を沈め供えるという祭祀儀礼が行われていた例は、山岳仏教や修験道関係の信仰遺跡のみならず全国的に見受けられるものである。金井典美氏はこれらを池中などに投げ入れる目的として「必ずしもひとつではなかったであろうが、まず第一に想像されるのは日照りの際などに雨乞いの祭祀儀礼として投じられた（後略）」（金井1977）と述べている。

本遺構を構成する土器はすべて淡い褐色を呈する土師器の椀である。硬質・堅緻な須恵器とは異なり、過水性の強い土師器は幾度もの使用に耐え得るものではなく、そのただ１回のみの限定使用に用いられるという性格から、より時代の下った中世期ではかわらけ（土師質皿）の祭祀的利用が行われている。以上に述べた理由から、土師器が湿地のへりに並べ置かれていたこの遺構に祭祀的な意味づけを付すことは可能であろう。

また、土師器には朱書きで「北」と記されたものがある。朱書きの成分は分析をしていないので不明であるが、一見したところ漆のように見える。

この土器祭祀遺構の真南には出土遺物から同時期ととらえられる第５号住居跡が所在する。両者の間には直接的な関係があったものと判断し得る。つまり土器祭祀を行った主体が第５号ないしは第４号住居跡の住人であったと考えられる。ちなみに平成12年度に行った調査区からは、今回の「北」と同様の朱書きが記された土師器椀の体部破片（第60図）が出土している。



第60図　平成12年度出土「北」朱書土器（S＝1/2）

第53号土坑は単独の柱穴痕で、甕の底部を蓋にして被せた小型甕が埋納されたという特異な遺構であるが、報告までに同時期の類例遺構を探し出すことができなかった。蓋を被せた甕という検出形態から考えるならば、火葬後の遺骸を収めた骨壷やあるいは後産処理の胞衣皿などが想起させられる。小型甕内の土壌からは動物に由来するリン酸の高濃度が認められており、このような推測が考えられる。そもそも単独して柱穴が設けられるという事象自体が珍しく、柱（＝標識？）と蓋付小型甕との間にある何かしらの因果関係は不明である。いずれにせよ、位置関係からして第４・５住居跡とは有機的・直接的関係にある事はほぼ確かであり、これらの住居跡は前述の土器祭祀遺構の営みにも関わっている事から、住居跡を介したこの３つの相関関係は大変興味深い。

第５号土坑からは40点の土錘が一括出土した。土層観察からは、これらの土錘が網などの漁労用

具に付随したまま土坑に投棄・収納されていた可能性を示唆しており、一般的に土錘の形態の相違については漁網の構造の差などに求められると考えられている。この大型1点、小型39点という出土構成はそのまま、往時の漁労用具の構造の一単位を示している可能性がある。また、時期を特定することが可能な共伴遺物を多数得られ、貴重な出土例となった。

以上、今回検出した遺構のうち古代のものについて考察を加えたが、出土遺物から見たそれらの成立年代はおよそ9世紀後半から10世紀前半に限定される。これは近隣の調査区の成果と矛盾しない。その後の営みは本調査区では確認されなかったが『金屋南Ⅰ報告書』によると「B区金屋線交差点北側北半」調査区からは12世紀前後の非ロクロ土師質皿が出土する溝が検出されている。この間約200年の空白があるが、これはこの地における集落の廃絶を示すものではなく、おそらく度重なる洪水被害を受けた結果、頻繁に集落の移動・変遷があった事に起因するであろう。

その後、中世に至り遺跡の東側で鋳造を営む大規模集落が築かれると、本調査区は集落の縁辺にあたるのか、該期の営みを認めることができなくなる。ただし河川跡で検出された中世遺物包含層（第7図　第20層）からはイネ属の植物遺体が検出されており、この河川跡（湿地）の窪地を利用した水田耕作が中世期に営まれていた可能性がある。

中世集落廃絶後の様子は明らかではないが、土層断面をみる限りさほどの時期差を持たずに水田化が進んだようである（第7図　第25層）。この地に大規模な新田開発の波が押し寄せたのは文献資料によると、牛ヶ首用水の開削が契機であったと考えられる。

牛ヶ首用水は加賀藩三代藩主前田利常が、金屋の地を含む婦負郡及び射水郡の近隣33ヶ所の村役人の請願を聞き入れて寛永元年（1624）に開削された神通川左岸の大用水で、山田川、井田川、神通川から取水し、井田川と呉羽山丘陵の間を北流して市内八ヶ山付近で四方に分流する。四万石の水田を潤したといい、俗に「四万石用水」とも呼ばれたという。寛永元年（1624）8月の起工を端緒に寛永9年（1632）には一応の完成をみたが、新田の増加による用水量の増加等などの理由により増改修を重ね、承応3年（1654）に至り、ほぼ現在の流路と同じものが完成した。これにより婦負郡の村々で新田開発が進んだとされる。

第1・2号掘立柱建物跡と第1号溝状遺構は水田耕作土の直下より検出した。すなわちこれらの遺構はこの地に水田が営まれる直前のものであり、前述した新田開発の経緯をふまえると17世紀中頃に構築された可能性が高い。

ここまで今回の調査で検出した遺構について年代を追って概観してみたが、いずれの遺構の存在も現況の地形からは想定し得ないものばかりであった。

これは、繰り返しになるが、井田川をはじめとする河川洪水による厚い堆積土と近世以降の水田開発事業により、中世以前の自然堤防の微高地などの地形が覆い隠されてしまった結果、現況のような平坦地形が現出されたと推測できる。よって本調査区のような沖積地においては、現在遺跡として認知されていない箇所においても新たに遺跡が発見される可能性が高く、今回報告した金屋南遺跡の古代集落の全容も周辺の遺跡の発見や調査の進展という過程のなかでこそ一層明らかにされるはずである。

今後の周辺の歴史的環境の復原に期待したい。

引用・参考文献

富山県	1983	『富山県史通史編Ⅳ　近世』
富山市教育委員会	1999	『富山市金屋南遺跡発掘調査報告Ⅰ』
富山市教育委員会	2001	『富山市水橋金広・中馬場遺跡』
富山市教育委員会	2001	『富山市開ヶ丘中山Ⅳ遺跡』
富山市教育委員会	2002	『富山市開ヶ丘中山Ⅲ遺跡・中山Ⅳ遺跡・中山Ⅴ遺跡・狐谷遺跡』
富山市教育委員会	2002	『富山市向野池遺跡』
(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所	2003	『清水島Ⅱ遺跡・中名Ⅱ遺跡・持田Ⅰ　遺跡発掘調査報告』
婦中町教育委員会	1984	『友坂遺跡調査報告書』
婦中町教育委員会	1997	『友坂遺跡発掘調査報告Ⅲ』
北陸古代土器研究会	1997. 3	『北陸古代土器研究第６号』
北陸古代土器研究会	1997.11	『北陸古代土器研究第７号』
北陸古代土器研究会	1997. 5	『シンポジウム北陸の10・11世紀代の土器様相』
名古屋市博物館	2000	『企画展　川と遺跡　展示図録』
浅川滋男・箱崎和久編	2001	『埋もれた中近世の住まい　奈良国立文化財研究所シンポジウム報告』
金井典美	1977	『湿原祭祀』法政大学出版局
谷本進	1995	「朱書記号と漆書記号の展開」『但馬考古学第９集』
細村直澄	2001	「任海宮田遺跡出土の土錘について」『富山考古学研究第４号』(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
森隆	2001	「富山県出土の土錘集成」『富山考古学研究第4号』(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
青山晃	2002	「古代北陸におけるカマドについて(２)－カマド構築方位についての検討－」『富山考古学研究第４号』(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

附　編

金屋南遺跡の自然科学分析　　パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

富山県富山市金屋に所在する金屋南遺跡は、神通川支流である井田川左岸の自然堤防上に立地している。本遺跡のこれまでの発掘調査では、９～15世紀にわたる集落跡であることが確認されており、掘立柱建物跡群を中心とした居住域、畠などの生産域、溝・道路跡・土坑群が検出され、居住・生産などの様相を示す資料が多数得られている。

今回の発掘調査では、古代（9世紀後半）の掘立柱建物跡・竪穴住居跡群・土器埋設遺構・畠跡・河川跡、さらに川べりの土器祭祀遺構が確認されている。今回の分析調査では、これら遺構や河川跡から採取した試料を対象に、１）古環境推定、２）土器の内容物推定、３）燃料材の推定を目的として分析を実施する。

１．試料

分析試料は、河川跡から採取された土壌7点、柱穴内から出土した土器内の土壌２点、土器祭祀遺構から採取された土壌1点の計10点である。以下に、遺構および各試料の詳細を記し、分析項目を表１に示す。

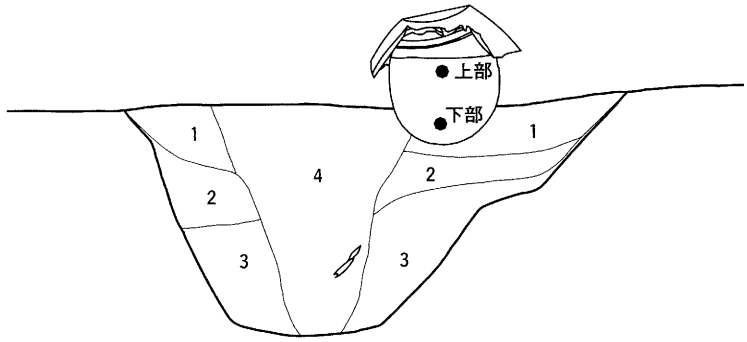
・河川跡

河川跡は、出土遺物等などから古代～中世の所産と想定されている。河川跡部分の層序は35層に分層されており、上位の堆積物は表土および水田耕作土である。分析試料は、４層～６層・10層・15層・16層・20層から採取された土壌７点である。４層・６層は、炭化物を多量に含む黄灰色を呈するシルト質の堆積物で、植物等による腐植が見られる。５層は、黄褐色を呈するシルト質の堆積物で、古代～中世の遺物を包含する洪水性の堆積物である。10層・16層は、黄褐色～灰黄色を呈するシルト～砂質シルトの洪水性の堆積物である。15層は、黄灰色を呈する砂質シルトの堆積物で、植物等による腐植が見られる。20層は、褐灰色を呈するシルト質砂の堆積物で、炭化物を多量に含む。また、当層の年代は中世とされる。

以上の試料について、河川跡の年代観とされる古代～中世の遺跡周辺および河川跡の植生および水域などの古環境推定を目的として分析を実施する。分析は、全点を対象として珪藻分析を実施する。また、４～６・15・20層の５点を対象に花粉分析・植物珪酸体分析を実施する。

・第53号土坑（図61）

第53号土坑は、土坑の断面観察などから柱穴であることが確認されており、当土坑の覆土上位からは土師器甕の底部で蓋をした小形の壺が出土している。この小形の壺内には土壌が充填されており、炭化物の混入が認められる。また、土器内土壌は、オリーブ褐色ないし暗オリーブ褐色を呈し、軽埴土（LiC：粘土25～45%、シルト０～45%、砂10～55%）からなる。分析試料は、これら土壌を上・下位に分



第61図　第53号土坑土層断面略図および試料採取位置

け採取した２点である。なお、土色は、マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）に、土性は土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編，1984）の野外土性に基づく。

以上の試料について、土器内容物の検証を目的として、土器内土壌2点（上・下部）を対象に土壌理化学分析を実施し、土器内土壌の下位を対象として微細遺物分析を実施する。

・土器祭祀遺構

土器祭祀遺構は、河川跡の川べり部分から検出されており、土師器碗の出土状況や炭化物の集中する様相から祭祀遺構と想定されている。分析試料は、炭化物の集中部から採取された土壌である。本試料について、微細遺物や炭化材の由来推定を目的として、微細遺物分析を実施する。なお、微細遺物分析により検出された炭化材を無作為に10点を選択し、炭化材同定を実施する。

表１　分析試料一覧

調査区	遺構名	層名	土質等		分析項目					
					珪藻分析	花粉分析	植物珪酸体分析	微細遺物分析	土壌理化学分析	炭化材同定
B地区	河川跡	20層	草木腐植土	暗褐色シルト質砂	○	○	○			
		16層	洪水堆積土	暗褐色砂質シルト	○					
		15層	草木腐植土	暗褐色砂質シルト	○	○	○			
		10層	洪水堆積土	暗褐色シルト	○					
		6層	草木腐植土	暗褐色シルト	○	○	○			
		5層	洪水堆積土	暗褐色シルト	○	○	○			
		4層	草木腐植土	暗褐色シルト	○	○	○			
	第53号土坑	上位	土器内土壌	オリーブ褐色軽埴土					○	
		下位						○	○	
	土器祭祀遺構	炭化物集中区		暗褐色シルト質砂				○		○

2. 分析方法

（１）珪藻分析

試料を湿重で７ｇ前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではない）。種の同定は、原口ほか（1998）、Krammer（1992）、Krammer and Lange－Bertalot（1986，1988，1991ａ，1991ｂ）などを参照する。

同定結果は、海水生種、海水～汽水生種、汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類をアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度（ｐＨ）・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数100個体以上の試料については、産出率2.0％以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析は、海水～汽水生種については小杉（1988）、淡水生種については安藤（1990）、陸生珪藻については伊藤・堀内（1991）、汚濁耐性については、Asai and Watanabe（1995）の環境指標種を参考とする。

（２）花粉分析

試料約10ｇについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）よる有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸９：濃硫酸１の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現

する全ての種類について同定・計数する。

（３）植物珪酸体分析

湿重５ｇ前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W，250ＫＨｚ，１分間)、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生について検討するために、植物珪酸体群集と珪化組織片の分布図を作成した。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求めた。

（４）微細遺物分析

湿重秤量した土壌試料（第53号土坑内容物下部33.55ｇ、土器祭祀遺構内容物972.3ｇ）を５％水酸化ナトリウム水溶液（NaOH）に一晩液浸し、試料の泥化を促す。0.5㎜の篩を通して水洗し残渣を集め、双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な遺体等を抽出する。その形態的特徴から種類を同定する。同定した遺体等は、種類毎にビンに入れ、ホウ酸・ホウ砂水溶液による液浸保存をおこなう。

（５）土壌理化学分析

今回測定する成分は、特に動物の体組織や骨に多く含まれるリン酸とカルシウムの含量測定を行う。中でもリン酸は骨に多量に含まれ、土壌中に固定されやすい性質を持つ。そのため、遺体が埋葬されると土壌中にリン酸の富化が認められることから、遺体あるいは遺骨の痕跡を推定することができる。また、リン酸の供給源としては植物体もあげられる。植物由来のリン酸成分が供給された場合、リン酸含量よりも腐植含量が高くなる。よって、植物体の影響を調べるために腐植含量も測定した。

リン酸は硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法、カルシウムは硝酸・過塩素酸分解－原子吸光光度法、腐植はチューリン法でそれぞれ行う（土壌養分測定法委員会，1981)。以下、具体的な操作工程を示す。

試料を風乾後、軽く粉砕して2.00㎜の篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、5時間）により測定する。風乾細土試料の一部を粉砕し、0.5㎜φのふるいを全通させる（微粉砕試料）。

風乾細土試料2.00ｇをケルダール分解フラスコに秤量し、硝酸約５㎖を加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸約10㎖を加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100㎖に定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P2O5）濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P2O5mg／ｇ）とカルシウム含量（CaOmg／ｇ）を求める。

微粉砕試料0.100～0.500ｇを100㎖三角フラスコに正確に秤りとり、0.4Nクロム酸・硫酸混液10㎖を正確に加え、約200℃ の砂浴上で正確に５分間煮沸する。冷却後、0.2％フェニルアントラニ

ル酸液を指示薬に0.2N硫酸第1鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量（Org－C乾土％）を求める。これに1.724を乗じて腐植含量（％）を算出する。

（6）炭化材同定

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3．結果

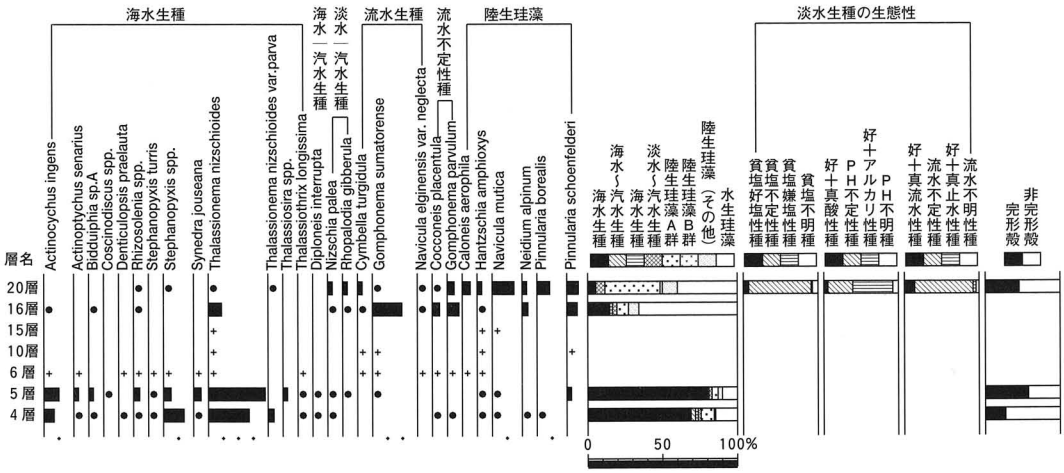
（1）珪藻分析

結果を表2・3、第62図に示す。6層・10層・15層は珪藻化石の産出が少ない。4層・5層・16層・20層では100個体以上産出する。完形殻の出現率は、50％以下である。産出分類群数は、44属97種類である。以下に珪藻化石群集の特徴を下位から述べる。

4層・5層では、全体の70％以上を海水生種が優占する。海水浮遊性の *Thalassionema nitzschioides* が30～40％と優占し、*Actinocyclus ingens*、*Denticulopsis cf. praelauta*、*Synedra jouseana* などの絶滅種を含む。この他、低率であるが、淡水生で流水にも止水にも生育する流水不定性の *Gomphonema sumatorense*、*Cocconeis placentula*、陸生珪藻A群の *Hantzschia amphioxys*、Navicula mutica なども産出する。珪藻化石が少なかった6層・10層・15層は、上述と同様に、絶滅種を含む海水生種や淡水生種、陸生珪藻などが産出する。

16層では、淡水生種が全体の約70％産出するが、海水生種も約15％産出する。淡水生種では、真流水性で上流性河川指標種群の *Gomphonema sumatorense* が約20％と多産し、流水不定性の *Cocconeis placentula*、*Gomphonema parvulum*、中～下流性河川指標種群の *Cymbella turgidula* などを伴う。海水生種では、浮遊性の *Thalassionema nitzschioides* が約10％産出し、絶滅種の *Actinocyclus ingens* などが産出する。上流性河川指標種群とは、河川上流部の峡谷部に集中して出現することから上流部の環境を指標する可能性の大きい種群とされる（安藤，1990）。

20層は、陸上の乾いた好気的環境に耐性のある陸生珪藻と、水域に生育する淡水生種が産出する。陸生珪藻の主なものは、陸生珪藻の中でも分布がほぼ陸域に限られる耐乾性の高いA群（伊



第62図　河川跡における主要珪藻化石群集の層位分布

海水－汽水－淡水生種産出率・各種産出率・完形産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個以上検出された試料について示す。なお、●は2％未満、＋は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

表２　河川跡の珪藻分析結果（１）

種　　類	生態性			環境指標種	層名						
	塩分	pH	流水		4層	5層	6層	10層	15層	16層	20層
Actinocyclus ingens Rattray	Euh				7	10	3	−	−	2	−
Actinocyclus spp.	Euh				−	−	2	−	−	−	−
Actinoptychus senarius (Ehr.)Ehrenberg	Euh			A	1	3	1	−	−	−	−
Biddulphia sp.A	Euh				1	3	−	−	−	1	−
Chaetoceros spp.	Euh				1	−	−	−	−	−	−
Coscinodiscus marginatus Ehrenberg	Euh				1	−	1	−	−	−	−
Coscinodiscus spp.	Euh				−	2	−	−	−	−	−
Denticulopsis praelauta Akiba & Koizumi	Euh				3	−	1	−	−	−	−
Denticulopsis spp.	Euh				2	−	−	−	−	2	−
Grammatophora oceanica (Ehr.)Grunow	Euh				−	1	−	−	−	−	−
Grammatophora spp.	Euh				−	1	−	−	−	−	−
Melosira sol (Ehr.)Kuetzing	Euh				−	−	−	−	−	−	1
Paralia sulcata (Ehr.)Cleve	Euh			B	1	1	1	−	−	−	−
Rhizosolenia spp.	Euh				2	4	1	−	−	1	1
Stephanopyxis turris Grev. and Arn.	Euh				1	2	2	−	−	−	−
Stephanopyxis spp.	Euh				14	5	3	−	−	−	1
Synedra jouseana Scheshukova	Euh				2	5	1	−	−	−	−
Thalassionema nitzschioides (Grun.)Grunow	Euh			A,B	28	38	14	5	2	9	3
Thalassionema nitzschioides var. parva Heiden and Kolbe	Euh				4	−	−	−	−	−	1
Thalassiosira oestrupii (Osten.)Proskina-Lavrenko	Euh			A	−	−	−	−	−	−	−
Thalassiosira spp.	Euh				−	3	−	−	−	−	−
Thalassiothrix longissima Cleve and Grunow	Euh				2	2	1	−	−	−	−
Xanthiopyxis spp.	Euh				1	−	1	−	−	−	−
Diploneis interrupta (Kuetz.)Cleve	Euh-Meh				3	1	−	−	−	−	−
Achnanthes brevipes var. intermedia (Kuetz.)Cleve	Meh			D1	1	−	−		−	−	−
Nitzschia lorenziana Grunow	Meh			E2	−	−	−	−	−	1	−
Opephora martyi Heribaud	Meh			D1	−	−	−	1	−	1	−
Pseudopodosira kosugii Tanimura et Sato	Meh			E2	1	−	−	−	−	−	−
Navicula capitata var. hungarica (Grun.)Ross	Ogh-Meh	al-il	r-ph	U	−	−	−	−	−	1	−
Nitzschia levidensis var. victoriae Grunow	Ogh-Meh	al-il	ind	U	−	−	−	−	1	−	−
Nitzschia palea (Kuetz.)W.Smith	Ogh-Meh	ind	ind	S	2	1	−	−	−	1	4
Rhopalodia gibberula (Ehr.)O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind		−	1	−	−	−	1	4
Achnanthes hungarica Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	−	−	−	−	−	−	1
Achnanthes japonica H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	r-bi	J,T	−	−	−	−	−	1	−
Achnanthes lanceolata (Breb.)Grunow	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	−	−	−	−	−	−	2
Achnanthes minutissima Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	−	−	−	−	−	2
Amphora affinis Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	−	1	−	−	−	1	−
Aulacoseira distans (Ehr.)Simonsen	Ogh-hob	ac-il	l-bi	N,U	−	−	−	−	−	−	1
Caloneis aerophila Bock	Ogh-ind	al-il	ind	RA	−	−	1	−	−	−	7
Caloneis bacillum (Grun.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	−	−	−	−	−	1	2
Caloneis silicula (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		−	−	−	−	−	−	1
Ceratoneis arcus var. hattoriana Meister	Ogh-ind	ind	r-bi	J	−	−	1	−	−	−	−
Cocconeis neodiminuta Krammer	Ogh-ind	al-il	ind		−	−	−	1	−	−	−
Cocconeis placentula (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	U	3	−	2	−	−	5	1
Cocconeis placentula var. euglypta (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	−	−	−	−	−	2	1
Craticula cuspidata (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	S	−	−	1	−	−	1	1
Cymbella japonica Reichelt	Ogh-unk	unk	unk	T	−	−	1	−	−	−	−
Cymbella silesiaca Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	T	−	1	−	−	−	2	−
Cymbella sinuata Gregory	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	2	−	−	−	−	1	−
Cymbella tumida (Breb. ex Kuetz.)V.Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	−	1	−	−	−	1	−
Cymbella turgidula Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	−	−	1	2	−	3	4
Cymbella turgidula var. nipponica Skvortzow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	−	−	1	−	1	−	−
Cymbella spp.	Ogh-unk	unk	unk		−	−	−	1	−	−	−
Diploneis ovalis (Hilse)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		−	1	−	−	−	−	1
Epithemia adnata (Kuetz.)Brebisson	Ogh-ind	al-bi	ind		−	−	1	−	−	−	−
Epithemia turgida (Ehr.)Kuetzing	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	2	−	−	−	−	−	−
Eunotia arcus Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph		−	1	−	−	−	−	−
Eunotia biseriatoides H.Kobayasi	Ogh-ind	ind	ind	RA	1	1	1	−	−	1	−
Eunotia praerupta var. bidens Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O	−	−	−	1	−	−	−
Eunotia spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	−	−	−	−	−	−
Fragilaria capucina Desmazieres	Ogh-ind	al-il	ind	T	−	−	−	−	−	1	−
Fragilaria capucina var. gracilis (Oestr.)Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	−	−	−	−	−	−	2
Fragilaria construens fo. venter (Ehr.)Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	−	−	1	−	−	−	−
Fragilaria leptostauron (Ehr.)Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph		−	−	−	−	−	2	−
Fragilaria ulna (Nitzsch)Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		1	1	1	−	−	2	−
Fragilaria vaucheriae (Kuetz.)Petersen	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	1	−	1	−	−	1	−
Fragilaria virescens Ralfs	Ogh-ind	ac-il	l-ph	U	−	−	−	−	−	−	1
Frustulia vulgaris (Thwait.)De Toni	Ogh-ind	al-il	ind	U	−	−	−	−	1	1	−
Gomphonema acuminatum Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	−	1	−	−	−	−	−
Gomphonema olivaceum (Lyngb.)Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	−	−	−	−	−	−	1
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	1	−	1	−	−	8	6
Gomphonema pumilum (Grun.)Reichardt & Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		−	1	−	−	−	−	−
Gomphonema sumatorense Fricke	Ogh-ind	ind	r-bi	J	−	2	1	1	−	20	2

表３　河川跡の珪藻分析結果（２）

種　　類	生態性			環境指標種	層名						
	塩分	pH	流水		4層	5層	6層	10層	15層	16層	20層
Gyrosigma spp.	Ogh-unk	unk	unk		—	—	—	—	—	—	1
Hantzschia amphioxys (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	3	1	3	3	4	2	4
Meridion circulae var. constrictum (Ralfs)V.Heurck	Ogh-ind	al-il	r-bi	K,T	1	—	—	—	—	—	—
Navicula contenta fo. biceps (Arnott)Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	—	—	—	—	—	—	1
Navicula cryptocephala Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	—	—	1	—	—	—	—
Navicula decussis Oestrup	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	1	—	—	—	—	—	—
Navicula elginensis (Greg.)Ralfs	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	—	—	—	—	—	—	2
Navicula elginensis var. cuneata H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	ind		—	—	—	—	—	—	1
Navicula elginensis var. neglecta (Krass.)Patrick	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	—	—	1	—	—	2	3
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	2	1	—	—	1	—	19
Navicula paramutica Bock	Ogh-ind	ind	ind	RB	1	—	—	—	—	—	1
Navicula tridentula Krasske	Ogh-ind	al-bi	ind	RI	—	—	—	—	—	—	1
Navicula viridula var. rostellata (Kuetz.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	—	—	—	—	—	1	—
Neidium alpinum Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	RA	1	—	—	—	—	4	4
Neidium ampliatum (Ehr.)Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph		—	—	—	—	—	1	—
Nitzschia brevissima Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RB,U	—	—	1	—	—	—	—
Nitzschia cf. perminuta (Grun.)Peragallo	Ogh-ind	ind	ind	RI	—	—	—	—	—	—	1
Nitzschia romana Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	—	—	—	—	—	—	2
Nitzschia sinuata var. delognei (Grun.)Lange — Bertalot	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	—	—	—	—	—	2	—
Nitzschia sinuata var. tabellaria (Grun.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	T	—	—	—	—	1	1	2
Nitzschia tubicola Grunow	Ogh-unk	unk	unk		—	—	—	—	—	1	—
Nitzschia spp	Ogh-ind	unk	unk		—	—	1	—	—	—	2
Orthoseira roeseana (Rabh.)O'Meara	Ogh-ind	ind	ind	RA	1	1	—	—	—	—	—
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	1	—	—	—	—	—	11
Pinnularia divergentissima (Grun.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		—	—	—	—	—	—	1
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	O	—	—	—	—	—	—	1
Pinnularia mesolepta (Ehr.)W.Smith	Ogh-hob	ind	ind	S	—	—	—	—	—	1	—
Pinnularia microstauron (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	S	—	—	—	—	—	—	2
Pinnularia nodosa Ehrenberg	Ogh-hob	al-il	l-ph	O	—	—	—	—	—	—	1
Pinnularia obscura Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	—	—	—	—	—	1	2
Pinnularia schoenfelderi Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	—	3	—	1	—	7	10
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	al-il	ind	RB,S	—	—	—	—	1	—	—
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		—	—	—	—	—	1	1
Rhoicosphenia abbreviata (Ag.)Lange — B.	Ogh-hil	al-il	r-ph	K,T	—	—	—	—	1	2	1
Sellaphora pupula (Kuetz.)Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	S	—	—	—	—	—	—	1
Stauroneis obtusa Lagerstedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	—	—	—	—	—	—	1
Stauroneis thermicola (Petersen)Lund	Ogh-unk	unk	unk	RI	—	—	—	—	—	—	2
Surirella angusta Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-bi	U	1	—	—	—	—	—	—
Surirella ovata var. pinnata (W.Smith)Hustedt	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	—	—	—	—	—	1	—
海水生種合計					71	80	32	5	2	15	7
海水～汽水生種合計					3	1	0	0	0	0	0
汽水生種合計					2	0	0	2	0	2	0
淡水～汽水生種合計					2	2	0	0	1	3	1
淡水生種合計					25	17	22	10	10	82	115
珪藻化石総数					103	100	54	17	13	102	130

凡例

H.R:塩分濃度に対する適応性
- Euh　:海水生種
- Euh－Meh　:海水生種－汽水生種
- Meh　:汽水生種
- ogh－Meh　:淡水－汽水生種
- ogh－hil　:貧塩好塩生種
- ogh－ind　:貧塩不定生種
- ogh－hob　:貧塩嫌塩生種
- ogh－unk　:貧塩不明種

ph:水素イオン濃度に対する適応性
- al－bi　:真アルカリ性種
- al－bi　:好アルカリ性種
- ind　:pH不定性種
- ac－il　:好酸性種
- unk　:ph不明種

C.R.:流水に対する適応性
- l－bi　:真止水性種
- l－ph　:好止水性種
- ind　:流水不定性種
- r－ph　:好流水性種
- r－bi　:真流水性種
- unk　:流水不明種

環境指標種群
A：外洋指標種，B：内湾指標種，D1：海水砂質干潟指標種，E2：汽水泥質干潟指標種（以上は小杉，1988）
J：上流性河川指標種，K：中～下流性河川指標種，O：沼沢湿地付着生種（以上は安藤，1990）
S：好汚濁性種，U：広域適応性種，T：好清水水性種（以上はAsai，K. & Watanabe，T.，1986）
R：陸生珪藻（RA：A群，RB：B群，RI群，伊東・堀内，1991）

藤・堀内，1991）の *Navicula mutica*、*Pinnularia borealis*、*Caloneis aerophila* である。淡水生種は、特に多産するものがなく、淡水～汽水生で富栄養水域にも多く生育する *Nitzschia palea*、*Rhopalodia gibberula*、好流水性の *Cymbella turgidula*、*Navicula elginensis var. neglecta* などが産出する。このうち、*Cymbella turgidula* は、河川中～下流部や河川沿いの河岸段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などに集中して出現することから、その環境を指標することができる中～下流性河川指標種群とされている（安藤，1990）。

（2）花粉分析

結果を表4に示す。いずれの試料においても花粉化石ほとんど検出されず、微粒炭化片が多量に含まれる。わずかに検出された花粉化石は保存状態が悪く、ほとんどの花粉外膜が溶けた状態で産出する。また、検出された花粉化石には、色が濃く保存状態が極端に悪いものも含まれる。プレパラート内の状況写真を図版2に示す。

（3）植物珪酸体分析

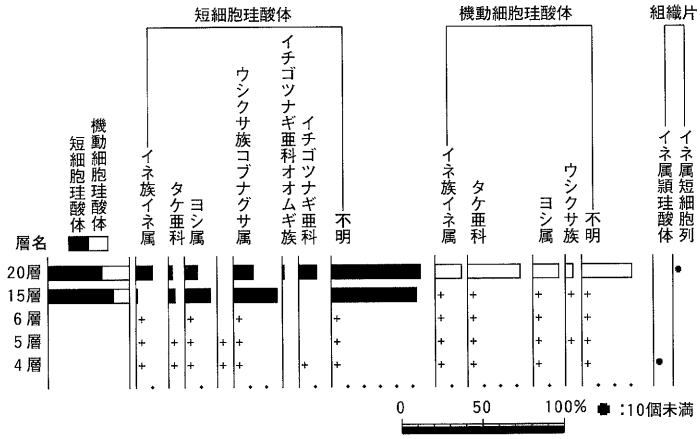
結果を表5、図63に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。4層～6層では、栽培植物のイネ属、タケ亜科、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが検出されるものの、検出個数が少ない。15層でも、下位層試料と同様の種類が検出され、ヨシ属やススキ属の短細胞珪酸体、不明キビ型の産出が目立つ。20層では、下位よりもイネ属の出現率が高い。また、栽培種を含むオオムギ族も検出されるが、検出された植物珪酸体が栽培種に由来するものか否かの判別が困難である。この他にタケ亜科、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが検出される。

（4）微細遺物分析

篩別後の残渣は、粗い砂分が主体で、同定可能な種実遺体は検出されな

表4　河川跡の花粉分析結果

種　類 ＼ 層名	4層	5層	6層	15層	20層
木本花粉					
トウヒ属	－	－	－	－	1
マツ属	－	1	－	－	－
スギ属	－	－	2	－	－
カバノキ属	－	1	－	－	－
ハンノキ属	－	－	－	2	－
コナラ属アカガシ亜属	－	1	1	－	－
草本花粉					
イネ科	－	－	－	3	1
ナデシコ科	1	－	－	－	－
ヨモギ属	1	－	－	－	1
不明花粉	1	1	－	－	1
シダ類胞子					
ヒカゲノカズラ属	1	－	－	1	－
イノモトソウ属	1	－	－	－	－
他のシダ類胞子	34	12	9	9	8
合　計					
木本花粉	0	3	3	2	1
草本花粉	2	0	0	3	2
不明花粉	1	1	0	0	1
シダ類胞子	36	12	9	10	8
総計（不明を除く）	38	15	12	15	11



第63図　河川跡の植物珪酸体群集と組織片の産状

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸素体の総数を基数として百分率で算出した。なおイネ科葉部短細胞珪酸体で200個未満、イネ　科葉身機動細胞珪体で100個未満の試料で検出された種類を示す。
また、組織片の産状を検出個数により＋の記号で示す。

表5　河川跡の植物珪酸体分析結果

種　類 ＼ 層名	4層	5層	6層	15層	20層
イネ科葉部短細胞珪酸体					
イネ族イネ属	2	1	1	2	26
タケ亜科	11	22	－	8	6
ヨシ属	49	14	6	32	20
ウシクサ族コブナグサ属	2	2	－	－	－
ウシクサ族ススキ属	14	2	6	54	31
イチゴツナギ亜科オオムギ族	－	－	－	－	3
イチゴツナギ亜科	4	－	－	－	28
不明キビ型	57	16	15	99	110
不明ヒゲシバ型	12	6	1	6	18
不明ダンチク型	11	1	1	1	12
イネ科葉身機動細胞珪酸体					
イネ族イネ属	1	1	1	1	21
タケ亜科	10	15	11	18	42
ヨシ属	3	8	5	18	21
ウシクサ族	－	3	－	2	6
不明	6	6	3	11	40
合　計					
イネ科葉部短細胞珪酸体	162	64	30	202	254
イネ科葉身機動細胞珪酸体	20	33	20	50	130
総　計	182	97	50	252	384
組　織　片					
イネ属類珪酸体	1	－	－	－	－
イネ属短細胞列	－	－	－	－	1

かった。炭化材の細片と、土器祭祀遺構から動物遺骸（卵？）が２個体検出されたのみであった。

（５）土壌理化学分析

土壌理化学分析の結果、土器内土壌の上位では、腐植含量が0.50％、リン酸含量が3.02 P_2O_5mg／g、カルシウム含量が3.32CaOmg／gである。土器内土壌の下位では、腐植含量が0.66％、リン酸含量が4.04 P_2O_5mg／g、カルシウム含量が3.70CaOmg＝gである。

土器内土壌の腐植含量、カルシウム含量は、上位と下位でほとんど差は認められない。一方、リン酸含量は、上位よりも下位において高い値を示す。

（６）炭化材同定

炭化材は、針葉樹のヒノキ属が3点、落葉広葉樹のブナ属が3点、ヤマグワが4点であった。以下に、各種類の主な解剖学的特徴を記す。

・ヒノキ属（Chamaecyparis）　　ヒノキ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、１～15細胞高。

・ブナ属（Fagus）　　ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に２～３個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織は同性～異性」型、単列、数細胞高のものから複合放射組織まである。

・ヤマグワ（Morus australis Poiret）　　クワ科クワ属

環孔材で、孔圏部は１～５列、晩材部へ向かって管径を漸減させ、のち塊状に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は密に交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅱ～Ⅲ型、１～６細胞幅、１～50細胞高で、しばしば結晶を含む。

４．考察

（１）河川跡の堆積過程

河川跡堆積物における珪藻分析の結果、古代相当層とされている４層・５層では、第三紀の絶滅種を含む海水生種が淡水生種に比べて圧倒的に多く産出する。坂本・野沢（1960）によると、本遺跡の背後の丘陵地には、新第三系北陸層群中・上部の八尾累層、音川累層などの海成層が分布する。したがって、本層準で検出された海水生種は、前述の海成層に含まれるものが再堆積した誘導化石であると考えられる。また、他の生態性の珪藻化石がほとんど検出されないことから、上記の海成層を削剥した洪水性の堆積物と考えられる。

上位の６層・10層・15層では、珪藻化石の産出が少ないものの、絶滅種を含む海水生種、淡水生種、乾いた環境に生育する陸生珪藻が混在する。よって、本層堆積時も流水環境下にあった可能性がある。

16層では、明らかに第三系からの誘導化石と考えられる海水生種は少なくなったが、Gomphonema sumatorenseなどの上流性河川指標種群を含む流水性種が多産する。よって、本層堆積時も、上流域の堆積物が供給される流水環境が引き続いたと考えられる。

中世の可能性が指摘される20層では、乾いた好気的環境に生育する陸生珪藻の産出が目立ち、中～下流性河川指標種群を含む淡水生種、絶滅種と考えられる海水生種も低率ながら産出する。このような群集は、堀内ほか（1996）で示された混合群集と類似する。堀内ほか（1996）によると、こ

のような組成は、洪水後の乾いた表層やある程度の期間に地表として露出した時期の層準にみられるとされている。従って、本層が堆積した後に水が引き、陸生珪藻が生育する乾燥した環境となっていた可能性がある。

（2）周辺植生

花粉分析・植物珪酸体分析の結果、全体的に検出された個体数は少ない。特に花粉化石では定量的に扱うことができない。検出された個体数が少ない要因として、試料が採取された場所は河川跡で、採取層準には堆積速度が速い洪水堆積物も含まれることから、堆積物中に取り込まれる化石が相対的に少なかった可能性が考えられる。これは珪藻分析結果からも明らかである。また、検出された化石は保存状態が悪く、いずれの化石も腐蝕を受けていた。花粉化石の種類は、比較的分解に強い花粉や分解が進んでも同定可能な花粉やシダ類胞子からなる。花粉・シダ類胞子は、腐蝕に対する抵抗性が種類により異なっており、花粉よりもシダ類胞子の方が酸化に対する抵抗性が高いとされている（中村，1967；徳永・山内，1971）。したがって、堆積後の経年変化により化石が分解・消失し、分解に強い種類が選択的に残された可能性も考えられる。

なお、珪藻分析より誘導化石が多い結果が得られていることから、花粉化石や植物珪酸体に関しても同様のことが考えられ、検出された花粉化石や植物珪酸体は、遺跡周辺の植生だけでなく、集水域を含む広範囲の植生を反映していることになる。具体的な種類としては、タケ亜科、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科などのイネ科植物やナデシコ科、ヨモギ属が挙げられ、これらは河道沿いや荒廃地に先駆的に入りこみ草地を作る種類（を含む分類群）であり、旧河川周辺に生育していたものに由来すると考えられる。

また、今回は栽培植物のイネ属が検出された。中世と想定されている20層ではイネ属の出現率が短細胞珪酸体で約10％、機動細胞珪酸体で約16％であった。現在の水田土壌中に含まれる植物珪酸体の調査によれば、機動細胞珪酸体中のイネ属の割合は９％であるが、稲藁を堆肥として与えている水田では16％に上がるという結果が得られている（近藤，1988）。今回のイネ属機動細胞珪酸体の出現率は、これら調査例と近似している。また、20層は下位の層序と不整合であることや、層序の観察から人為的攪乱も確認されることから、本層準堆積時には、本地点付近で稲作が行われていた可能性が考えられる。また、同層からは、わずかながらオオムギ族も検出されているが、本遺跡で検出された畑跡での栽培植物に関する資料がないため、栽培に由来するものであるか判断できない。なお、20層の上層からは、水田耕作土層が認められており、上層からの影響も考えられる。そのため、今回検出されたイネ属やオオムギ族の由来についてはあらためて検証する必要がある。

（3）第53号土坑内土器の内容物

第53号土坑覆土上位から出土した土器内土壌の理化学分析の結果、腐植含量は0.50％および0.66％と極めて低い値を示す。また、微細遺物分析では、種実遺体などは検出されない。したがって、土器内部に植物体あるいは種実等が存在していた可能性は示唆できない。

一方、土器内土壌のカルシウム含量は、上位・下位で大きな差異は認められず、3.3～3.7CaOmg／gを示す。カルシウムが土壌中に含まれる量、すなわち天然賦存量は普通１～50CaOmg／gとされ（藤貫，1979）、今回の測定値は天然賦存量の範囲内にある。また、リン酸含量は3.02～4.04 P_2O_5mg／gを示す。リン酸の天然賦存量の上限については、Bowen（1983）、Bolt＆Bruggenwert（1980）、川崎ほか（1991）、天野ほか（1991）などの調査事例によれば、約3．0P_2O_5mg／g程度と推定される（なお、各調査例の記載単位が異なるため、ここではP_2O_5mg／gで統一している）。これらの調査事例と比較すると、土器内土壌のリン酸含量は、天然賦存量の上限を上回る値

であり、上位と下位を比較すると、下位においてリン酸含量が高い。したがって、本分析結果から、土器内土壌は植物体以外の要因、すなわち動物に由来するリン酸の富化が推測される。ただし、今回の分析結果は土器内土壌に限定される結果であることから、本分析結果をより詳細に評価するためには、第53号土坑覆土や発掘調査区内の基本層序の土壌理化学性と比較することが必要である。

(4) 土器祭祀遺構出土炭化材の検討

土器祭祀遺構から採取した炭化物集中の微細遺物分析の結果、種実遺体等は検出されなかった。また、検出された動物遺骸は、攪乱や遺構が埋没する際に混入した後代のものと想定され、遺構の用途等を検証するに至らない。

一方、検出された炭化材は、針葉樹1種類、広葉樹2種類（ヒノキ属・ブナ属・ヤマグワ）が認められた。したがって、少なくとも３種類の木材の利用が考えられる。ただし、いずれの炭化材も細片であるため、同一個体の可能性もあり、種類の構成比等の詳細については言及できない。

本遺跡では、中世の井戸に用いられた木材や木製品の樹種同定が行われている（パリノ・サーヴェイ株式会社，1999)。これら結果によれば、井戸材にはヤマグワ、斎串にはヒノキ属のサワラなどがそれぞれ確認されている。これら樹種については、前述の分析結果や炭化材同定の結果から、遺跡周辺に生育していたものを採取・利用された可能性が考えられるが現状では明らかでない。そのため、この点については、さらに資料の蓄積を待って評価したい。

引用文献

天野洋司・太田　健・草場　敬・中井　信（1991）中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」，p.28－36.

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42，p.73－88.

Asai, K. and Watanabe, T.（1995）Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution（2）Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, p.35－47.

Bowen, H. J. M.（1983）「環境無機化学　－元素の循環と生化学－」．浅見輝男・茅野充男訳，297p.，博友社［Bowen, H. J. M.（1979）Environmental Cemistry of Elements］.

Bolt, G. H. & Bruggenwert, M. G. M.（1980）「土壌の化学」．岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽　捷行訳，309p.，学会出版センター［Bolt, G. H. and Bruggenwert, M. G. M.（1976）SOIL CHEMISTRY］，p.235－236.

土壌養分測定法委員会編（1981）「土壌養分分析法」．440p.，養賢堂.

藤貫　正（1979）カルシウム．地質調査所化学分析法，52，p.57－61，地質調査所.

原口和夫・三友　清・小林　弘（1998）埼玉の藻類　珪藻類．埼玉県植物誌，埼玉県教育委員会，p.527－600.

堀内誠示・高橋　敦・橋本真紀夫（1996）珪藻化石群集による低地堆積物の古環境推定について．－混合群集の認定と堆積環境の解釈－，日本文化財科学会，第13回大会研究発表要旨集，p.62－63.

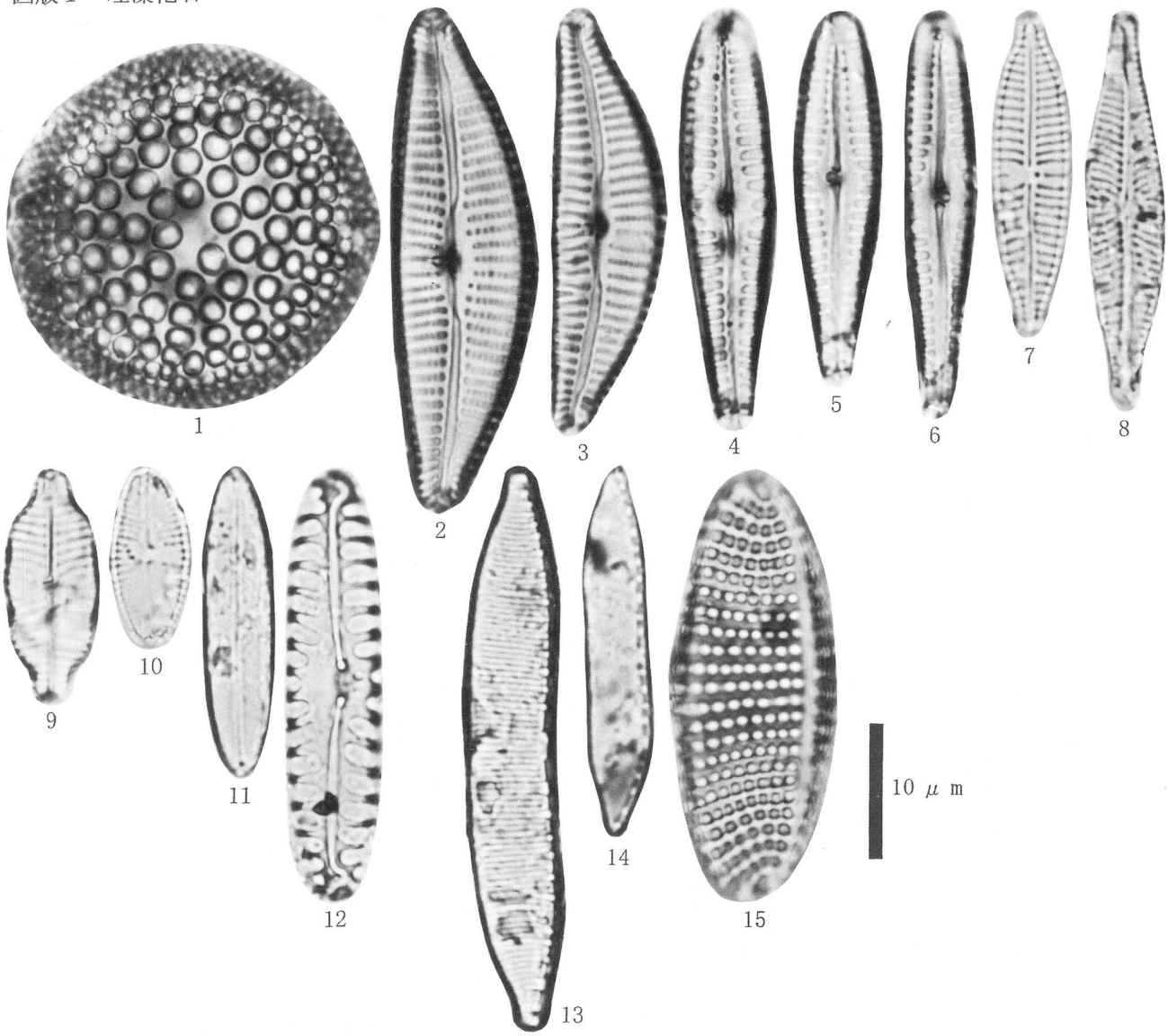
伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用．珪藻学会誌，6，p.23－45.

川崎　弘・吉田　澪・井上恒久（1991）九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」，p．23－27.

近藤錬三（1988ａ）十二遺跡土壌の植物珪酸体分析．「鋳師屋遺跡群　十二遺跡　－長野県北佐久郡御　代田町十二遺跡発

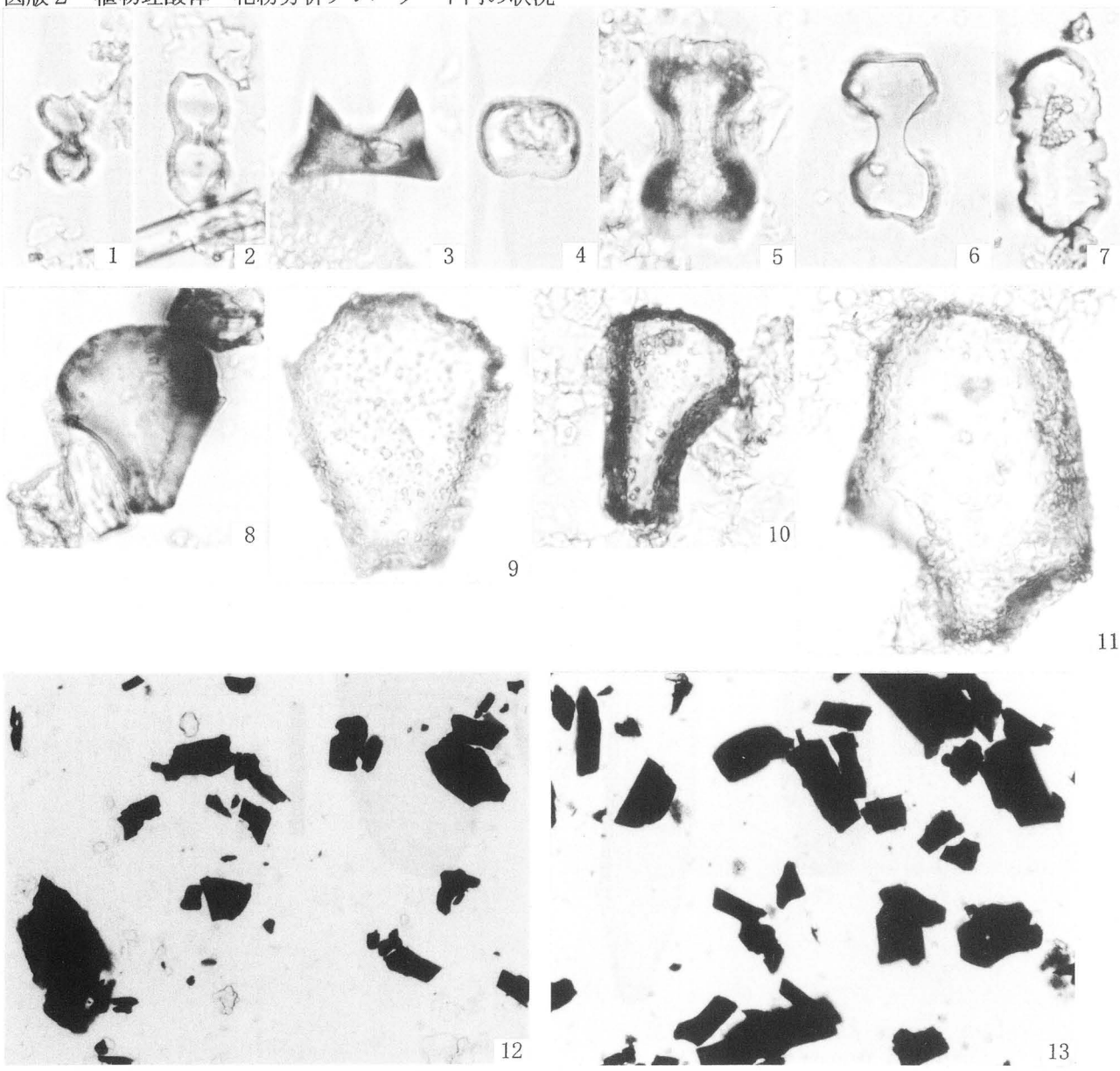
掘調査報告書－」，p.377－383，御代田町教育委員会.
近藤錬三・佐瀬　隆（1986）植物珪酸体分析，その特性と応用．第四紀研究，25，p.31－64.
小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，p.1－20.
Krammer, K.（1992）PINNULARIA, eine Monographie der europaischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA, BAND 26, p.1－353., BERLIN・STUTTGART.
Krammer, K. and Lange－Bertalot, H.（1986）Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae. Band 2/1 von：Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.
Krammer, K. and Lange－Bertalot, H.（1988）Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. Band 2/2 von：Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.
Krammer, K. and Lange－Bertalot, H.（1991a）Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. Band 2/3 von：Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.
Krammer, K. and Lange－Bertalot, H.（1991b）Bacillariophyceae, Teil 4, Achnanthaceae, Kritsche Ergaenzungen zu Navicula（Lineolatae）und Gomphonema. Band 2/4 von：Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 248p. , Gustav Fischer Verlag.
中村　純（1967）花粉分析．232p.，古今書院.
農林省農林水産技術会議事務局監修（1967）新版標準土色帖.
パリノ・サーヴェイ株式会社（1999）金屋南遺跡における自然科学分析．「金屋企業団地造成に伴う埋蔵文化財調査　富山県富山市　金屋南遺跡発掘調査報告Ⅰ」，p.127－140，富山市教育委員会.
ペドロジスト懇談会編（1984）「土壌調査ハンドブック」，156p.，博友社.
徳永重元・山内輝子（1971）花粉・胞子．「化石の研究法」，p.50－73，共立出版株式会社.
坂本　亨・野沢　保（1960）5万分の1地質図幅「八尾」及び同説明書，69p.，工業技術院地質調査所.
富山市教育委員会（1999）「金屋南遺跡発掘調査報告Ⅰ」，山武考古学研究所編，140p.，富山市教育委員会.

図版１　珪藻化石



1. *Actinocyclus ingens* Rattray (河川跡;6層)
2. *Cymbella turgidula* Grunow (河川跡;6層)
3. *Cymbella turgidula* Grunow (河川跡;6層)
4. *Gomphonema sumatorense* Fricke (河川跡;16層)
5. *Gomphonema sumatorense* Fricke (河川跡;10層)
6. *Gomphonema sumatorense* Fricke (河川跡;16層)
7. *Gomphonema parvulum* Kuetzing (河川跡;16層)
8. *Navicula cryptocephala* Kuetzing (河川跡;6層)
9. *Navicula elginensis* var. *neglecta* (Krass.)Patrick (河川跡;16層)
10. *Navicula mutica* Kuetzing (河川跡;20層)
11. *Neidium alpinum* Hustedt (河川跡;16層)
12. *Pinnularia borealis* Ehrenberg (河川跡;20層)
13. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.)Grunow (河川跡;6層)
14. *Nitzschia brevissima* Grunow (河川跡;6層)
15. *Achnanthes brevipes* var. *intermedia* (Kuetz.)Cleve(河川跡;4層)

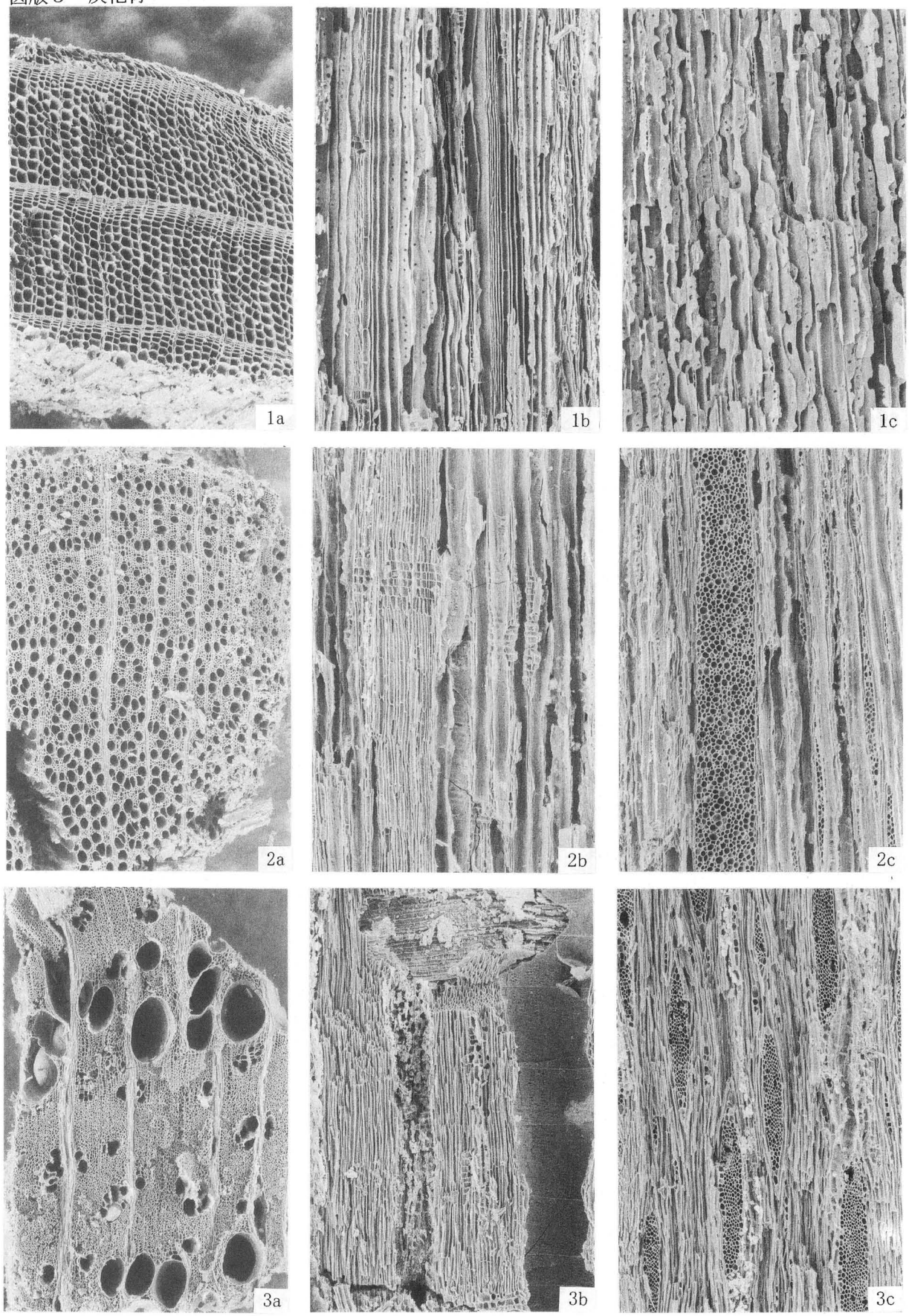
図版２　植物珪酸体・花粉分析プレパラート内の状況



1．イネ属短細胞珪酸体(河川跡;5層)
2．イネ属短細胞珪酸体(河川跡;20層)
3．タケ亜科短細胞珪酸体(河川跡;5層)
4．ヨシ属短細胞珪酸体(河川跡;5層)
5．コブナグサ属短細胞珪酸体(河川跡;5層)
6．ススキ属短細胞珪酸体(河川跡;6層)
7．オオムギ族短細胞珪酸体(河川跡;20層)
8．イネ属機動細胞珪酸体(河川跡;20層)
9．タケ亜科機動細胞珪酸体(河川跡;5層)
10．ウシクサ族機動細胞珪酸体(河川跡;5層)
11．ヨシ属機動細胞珪酸体(河川跡;5層)
12．花粉分析プレパラート内の状況写真(河川跡;5層)
13．花粉分析プレパラート内の状況写真(河川跡;20層)

50 μ m
(1-6)
50 μ m
(7-11)
50 μ m
(12, 13)

図版３　炭化材



1. ヒノキ属（土器祭祀遺構 炭化物集中区）
2. ブナ属（土器祭祀遺構 炭化物集中区）
3. ヤマグワ（土器祭祀遺構 炭化物集中区）
　a：木口，b：柾目，c：板目

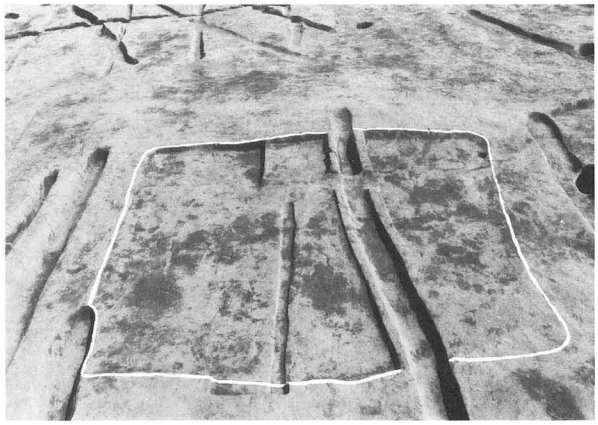
200 μm:a
200 μm:b, c

写真図版 1

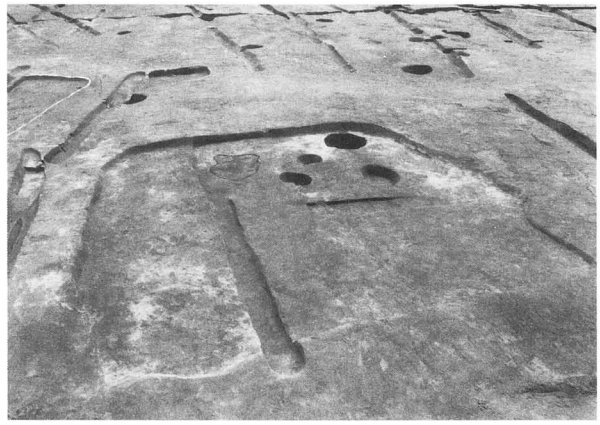
調査区全景（西から）

調査区全景　奥に富山市街、西に呉羽山丘陵をのぞむ（南から）

写真図版 2



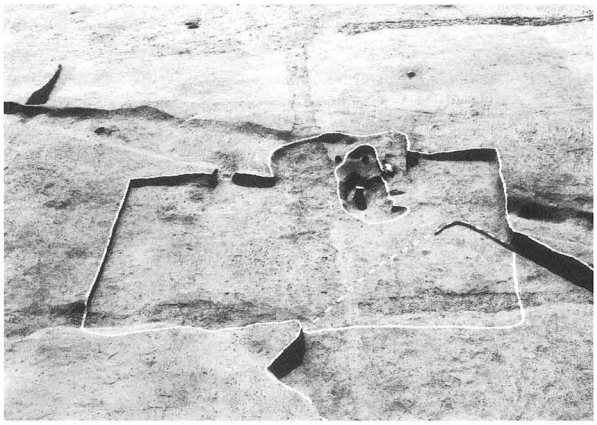
第 1 号住居跡



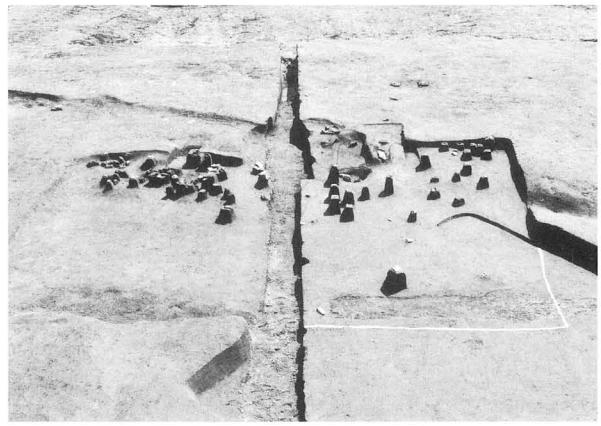
第 2 号住居跡

第 2 号住居跡　遺物出土状況

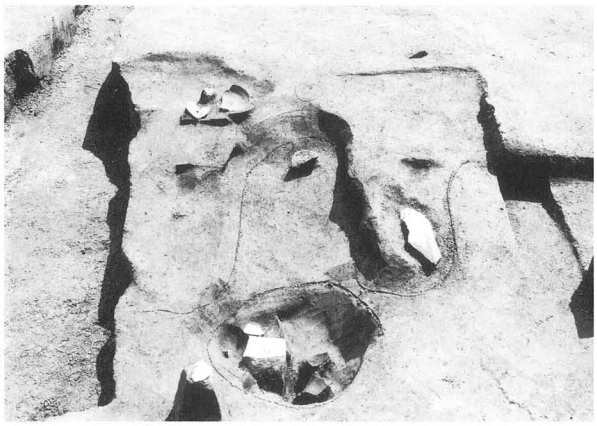
第 3 号住居跡



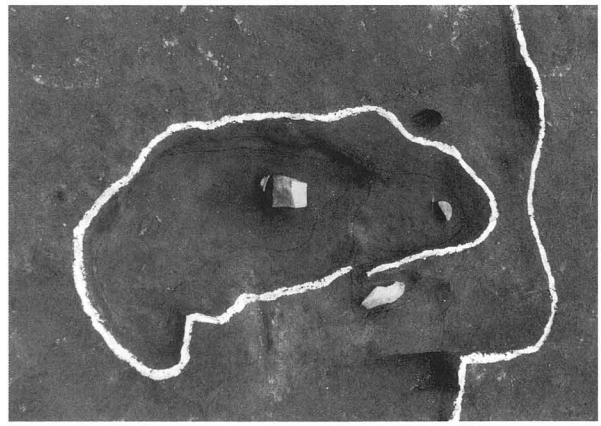
第 4 号住居跡



第 4 号住居跡　遺物出土状況

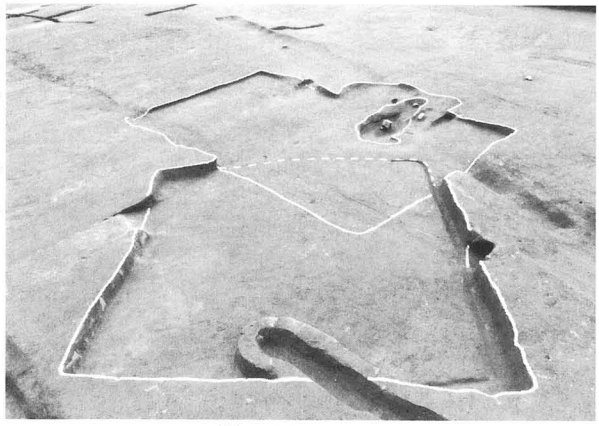


第 4 号住居跡　カマド近影



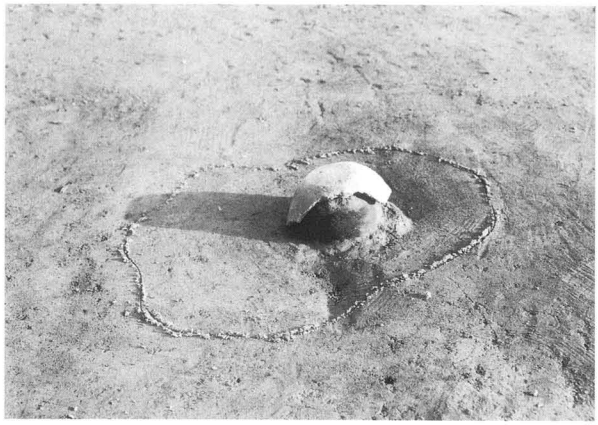
第 4 号住居跡　カマド近影

写真図版 3

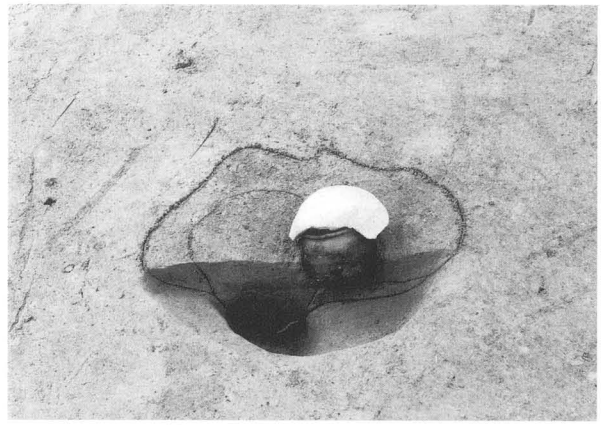


第５号住居跡

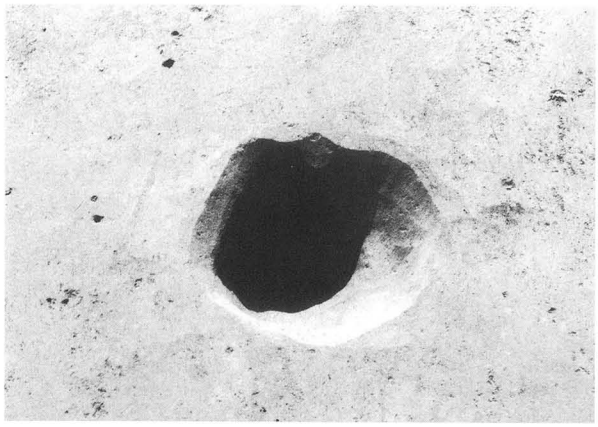
第５号住居跡　遺物出土状況



第53号土抗　検出状況

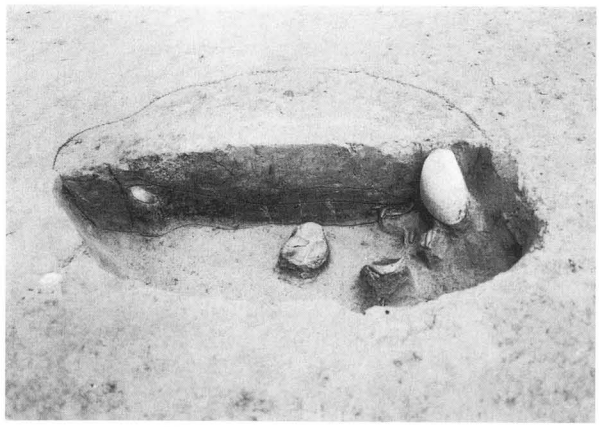


第53号土抗　土層断面

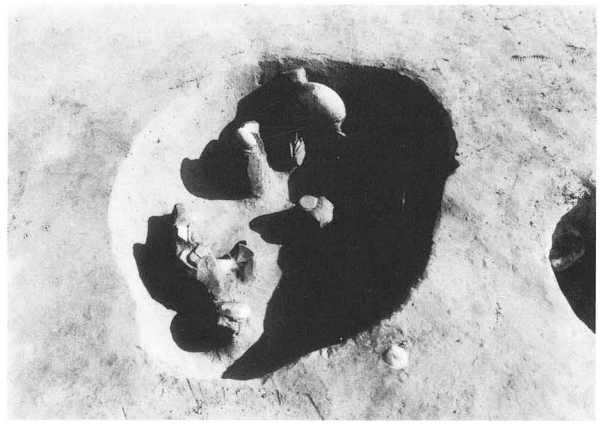


第53号土抗　完掘状況

第45号住居跡と第53号土抗

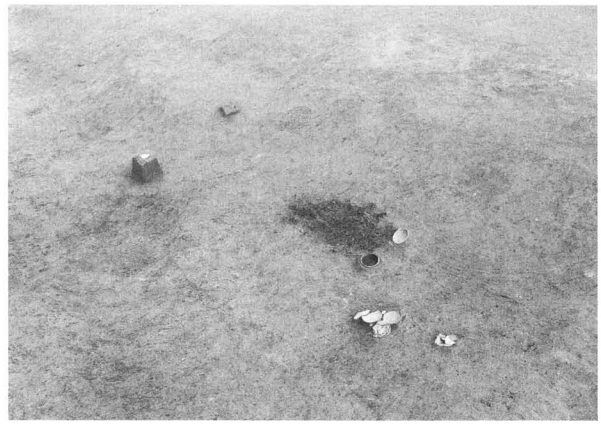


第５号土抗　土層断面

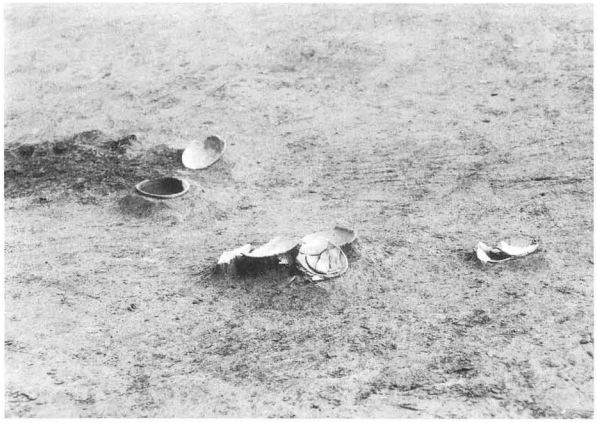


第５号土抗　遺物出土状況

第５号土抗　土錘出土状況



土器祭祀遺構全景（南西から）



土器祭祀遺構近影

土器祭祀遺構全景

土器祭祀遺構近影

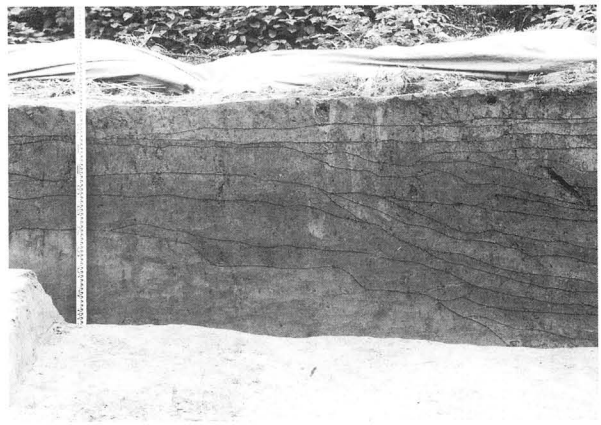
土器祭祀遺構近影

実測風景

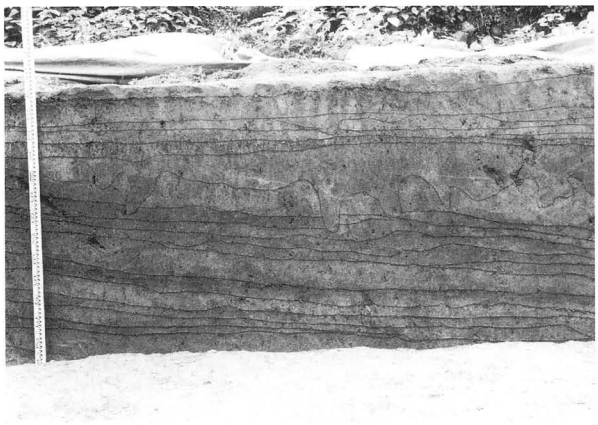
土器祭祀遺構近影（復原）

写真図版 5

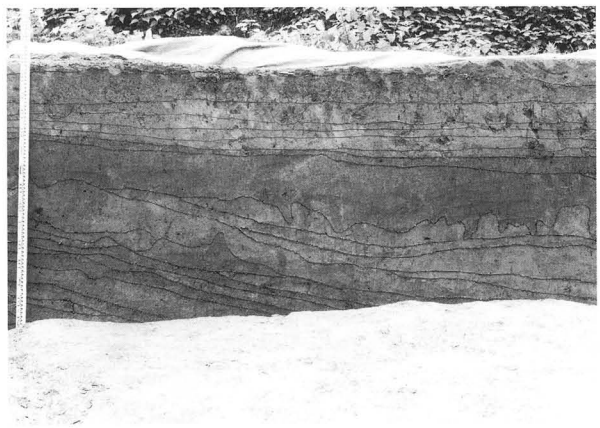
河川跡　土層断面　全景



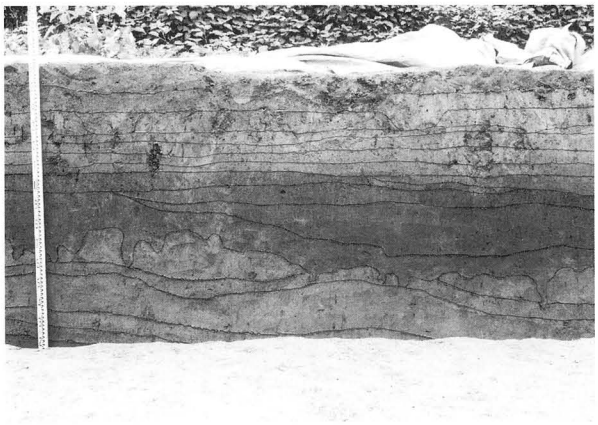
河川跡　土層断面①



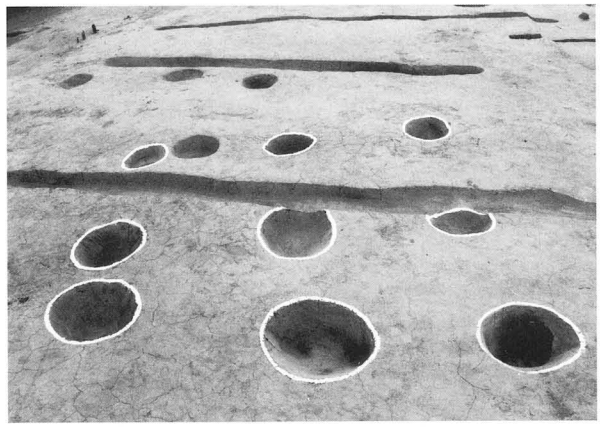
河川跡　土層断面②



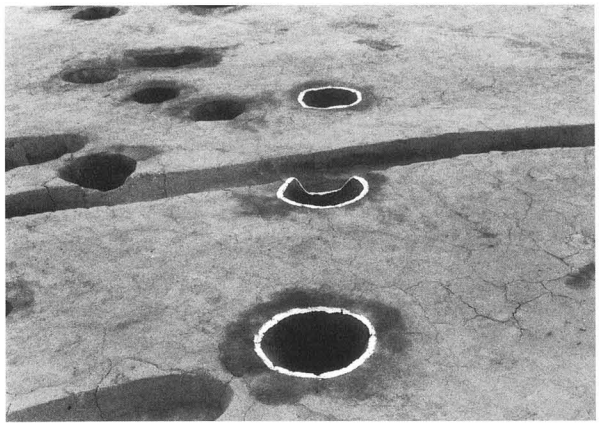
河川跡　土層断面③



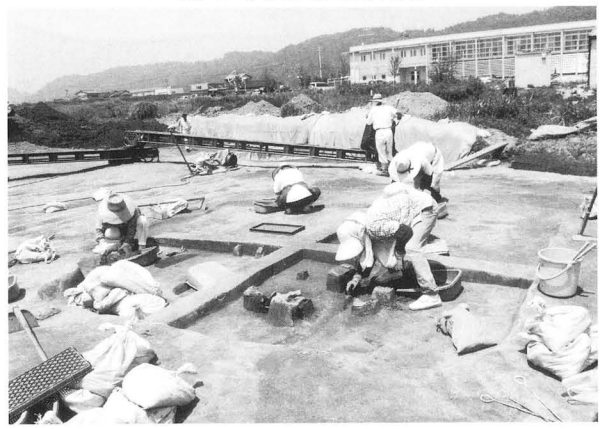
河川跡　土層断面④



第 3 号掘立柱建物跡



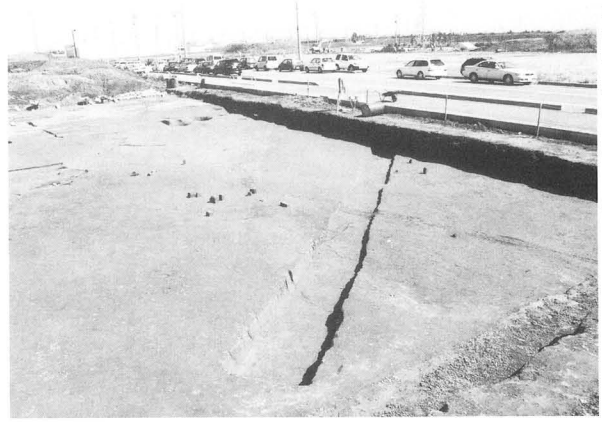
第 1 号柵列跡



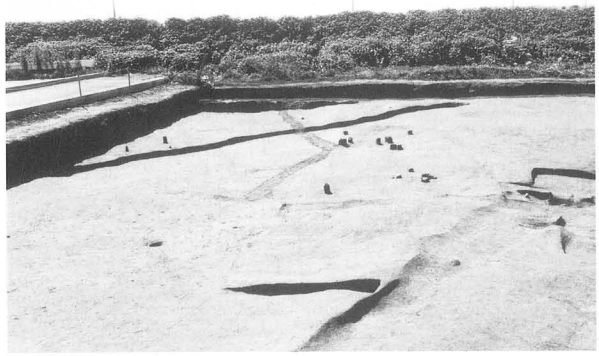
調査作業風景

写真図版 6

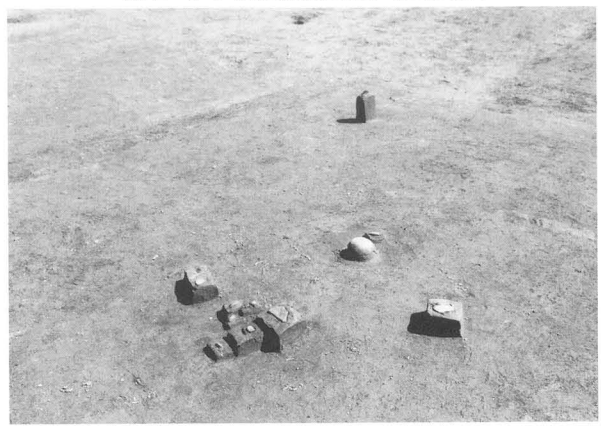
第２号不明遺構全景（南西から）



第２号不明遺構遺物出土状況

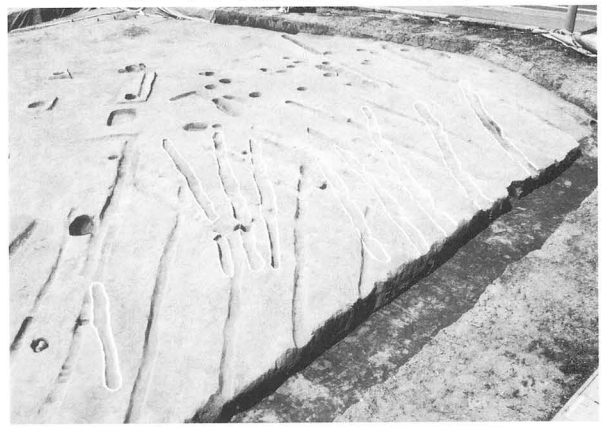


第２号不明遺構遺物出土状況



第２号不明遺構出土遺物近影

畠畝跡　第１群

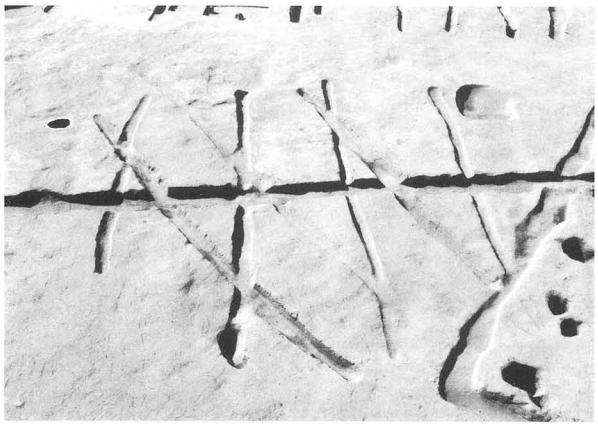


畠畝跡　第２群

畠畝跡　第３群

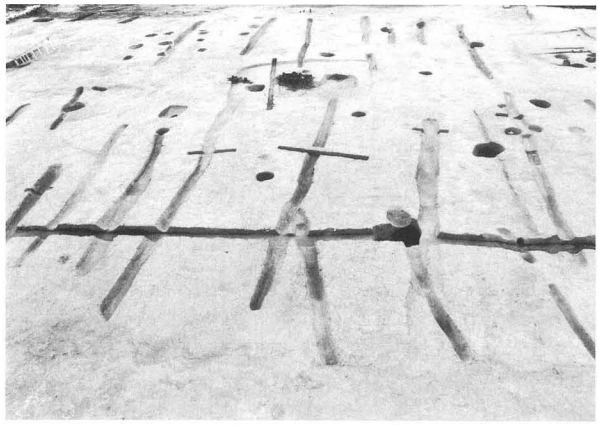
畠畝跡　第４群

写真図版 7

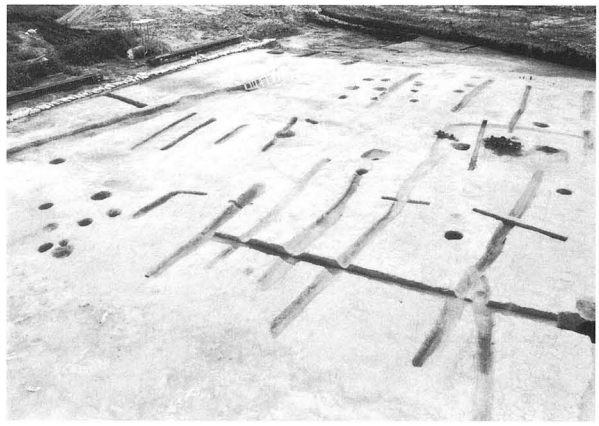


畠畝跡　第５・６群

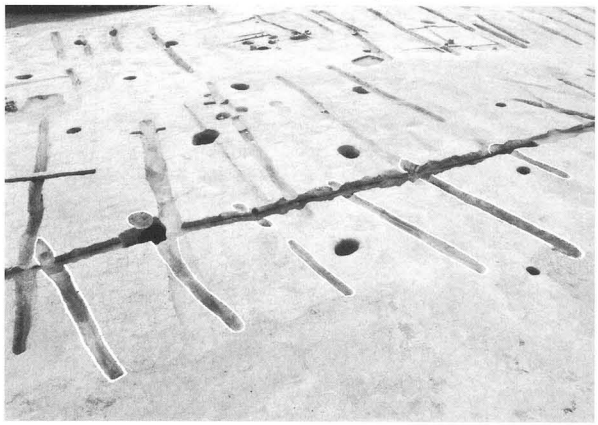
畠畝跡　第７群



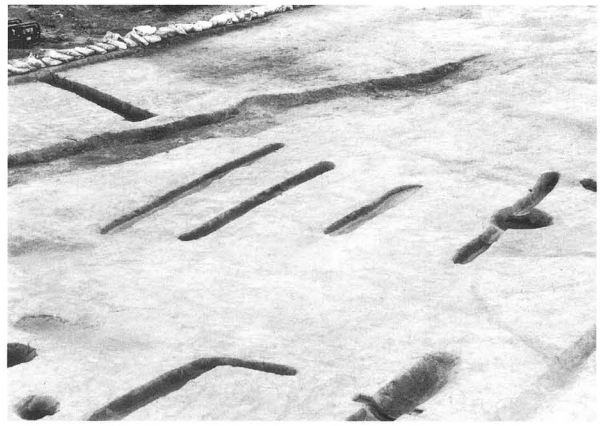
畠畝跡　第８群①



畠畝跡　第８群②



畠畝跡　第９群



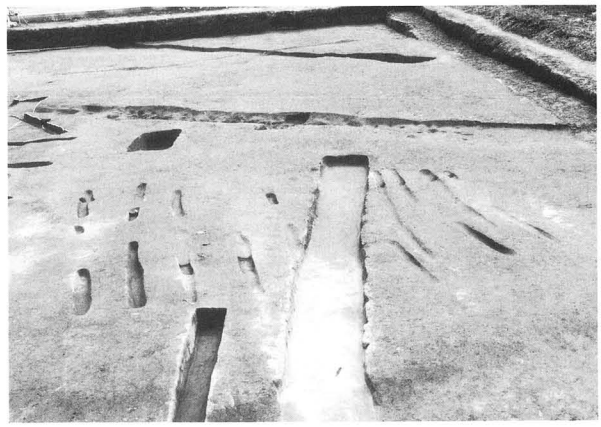
畠畝跡　第10群

畠畝跡　第11群

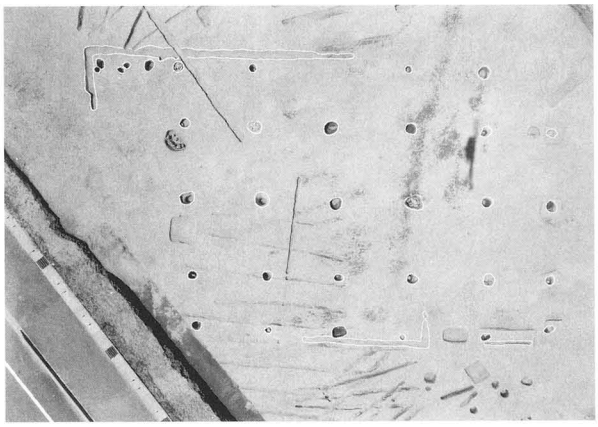
畠畝跡　第12群

写真図版 8

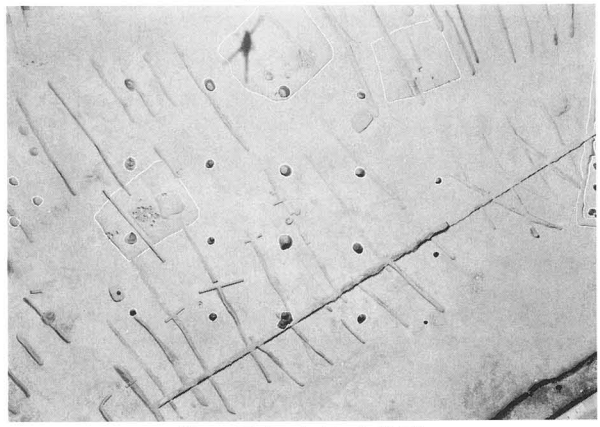
畠畝跡　第13群



畠畝跡　第14群



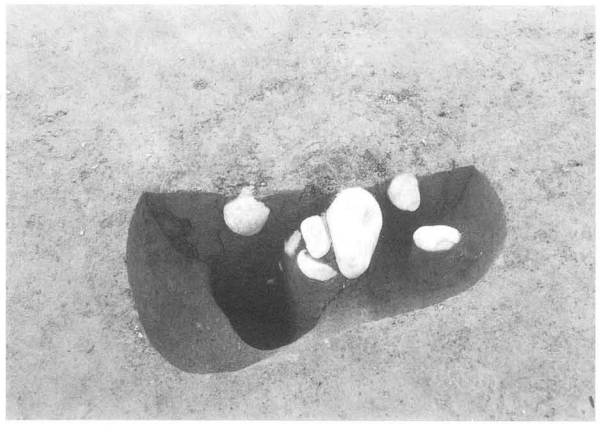
第１号掘立柱建物跡



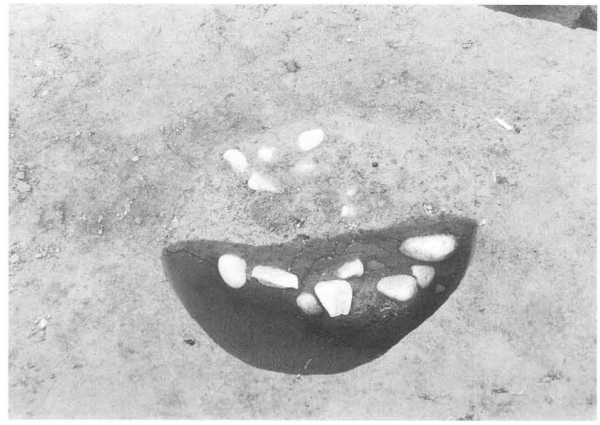
第２号掘立柱建物跡

第１・２号掘立柱建物跡

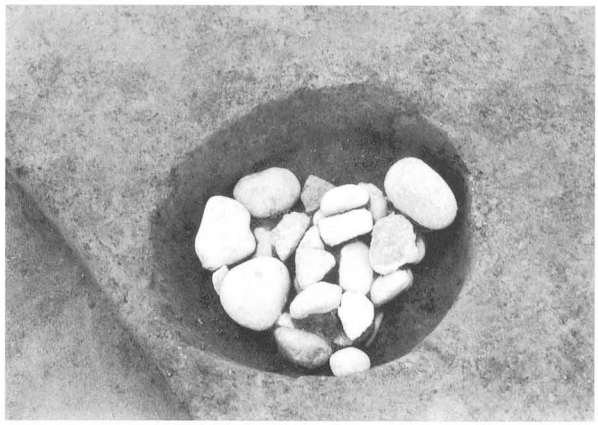
写真図版 9



第１号堀立柱建物跡　Ｐ26



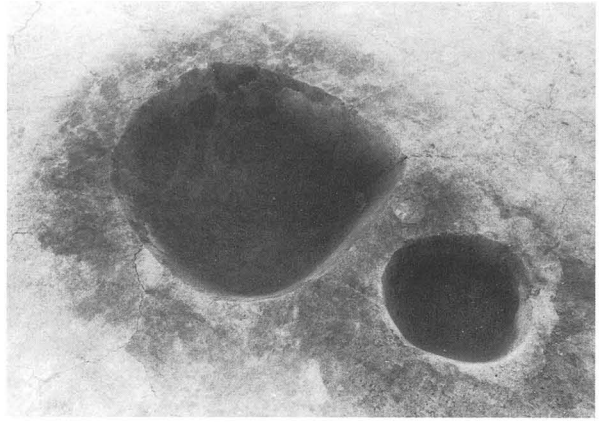
Ｐ27



Ｐ28

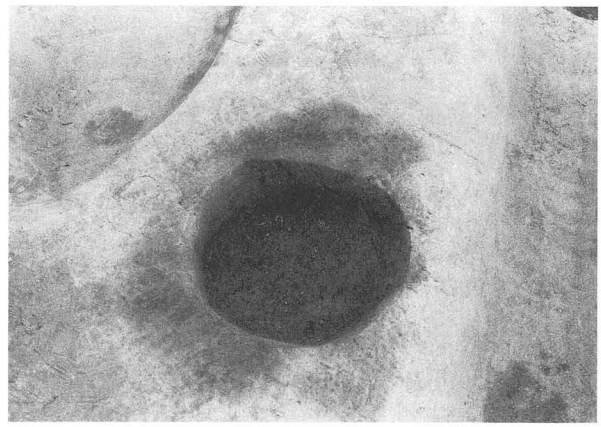
第１号溝状遺構土層断面

第２号溝状遺構全景（南から）

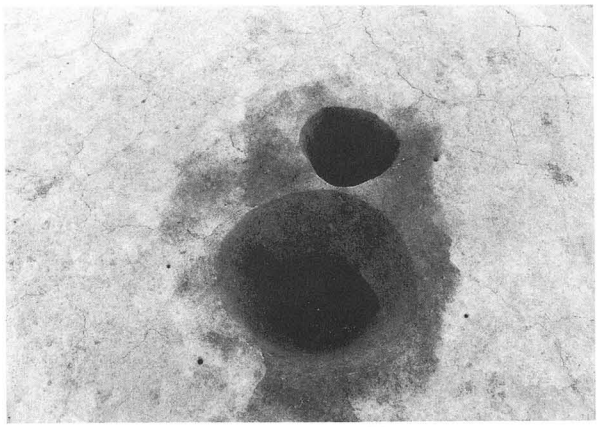


第２・３号土抗

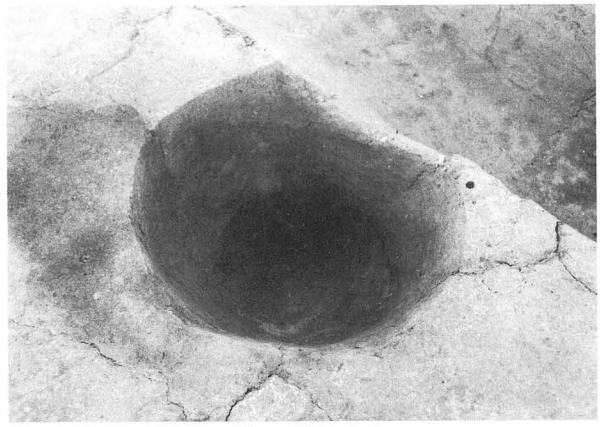
第６号土抗



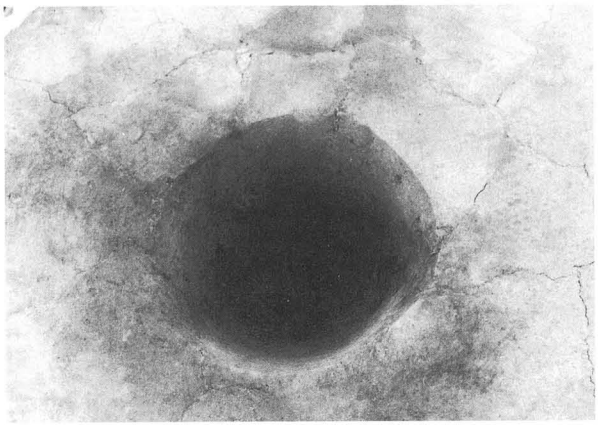
第７号土抗



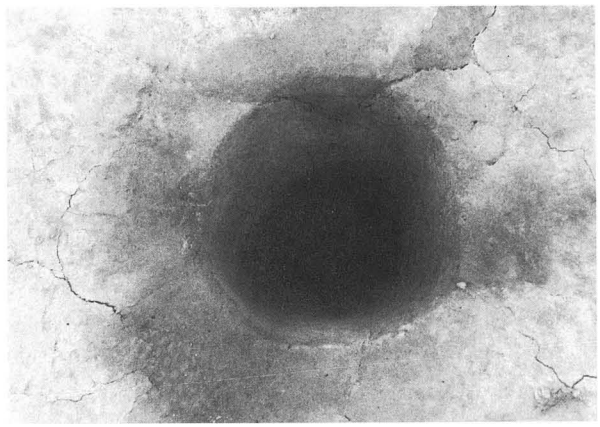
第8・9号土抗



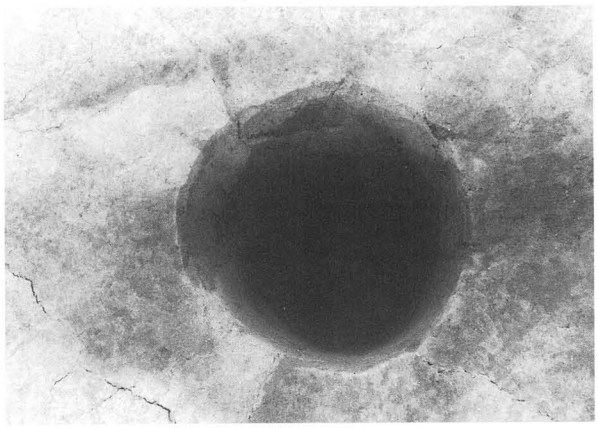
第10号土抗



第11号土抗

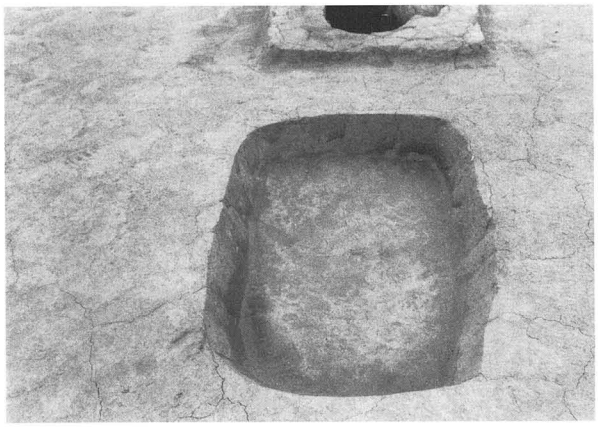


第12号土抗

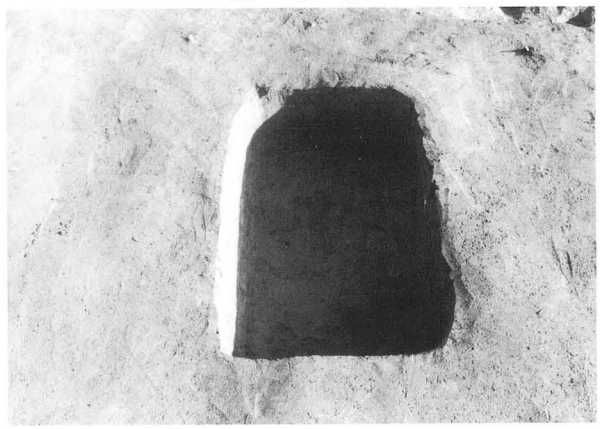


第20号土抗

第21号土抗

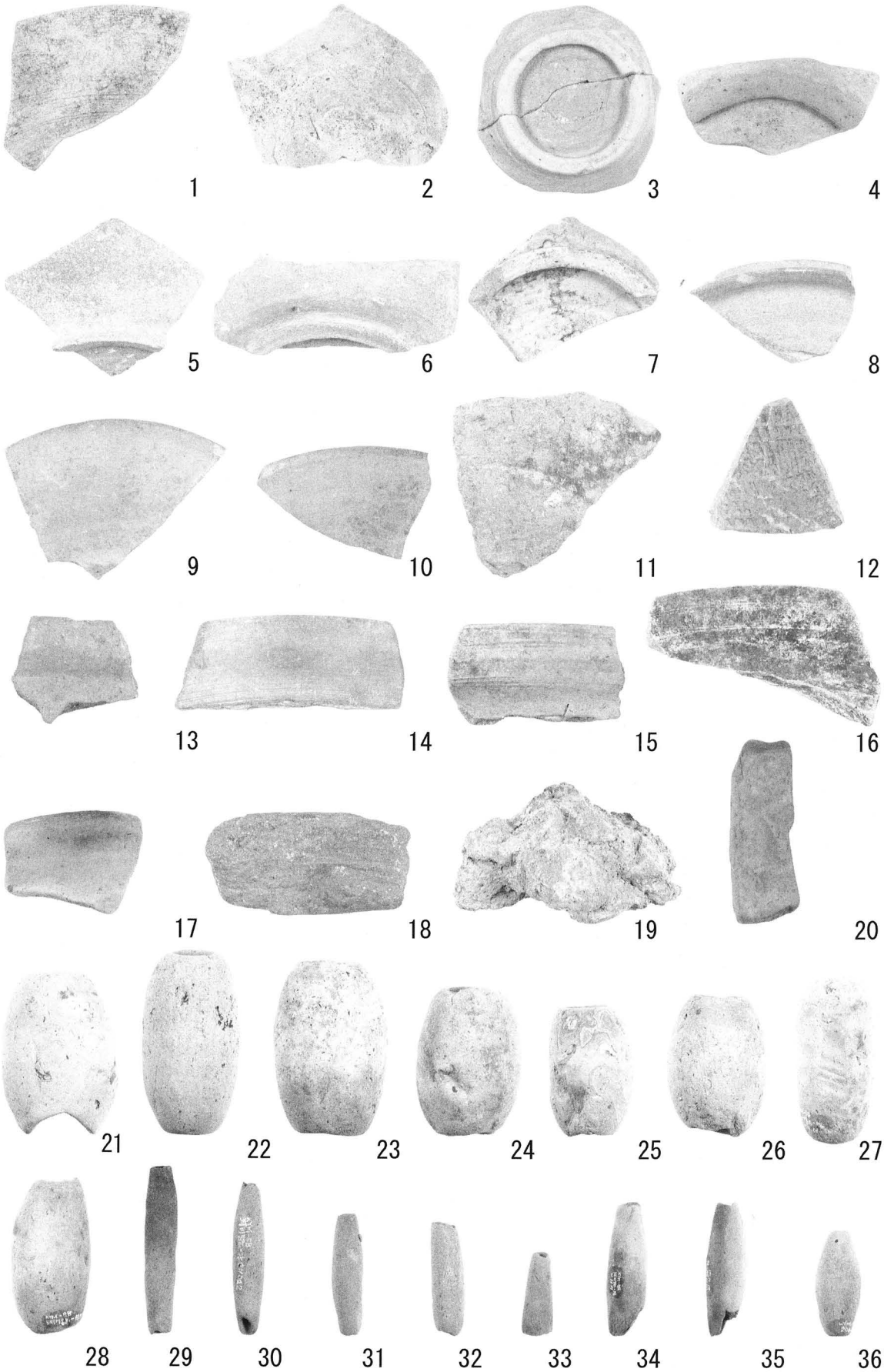


第25号土抗

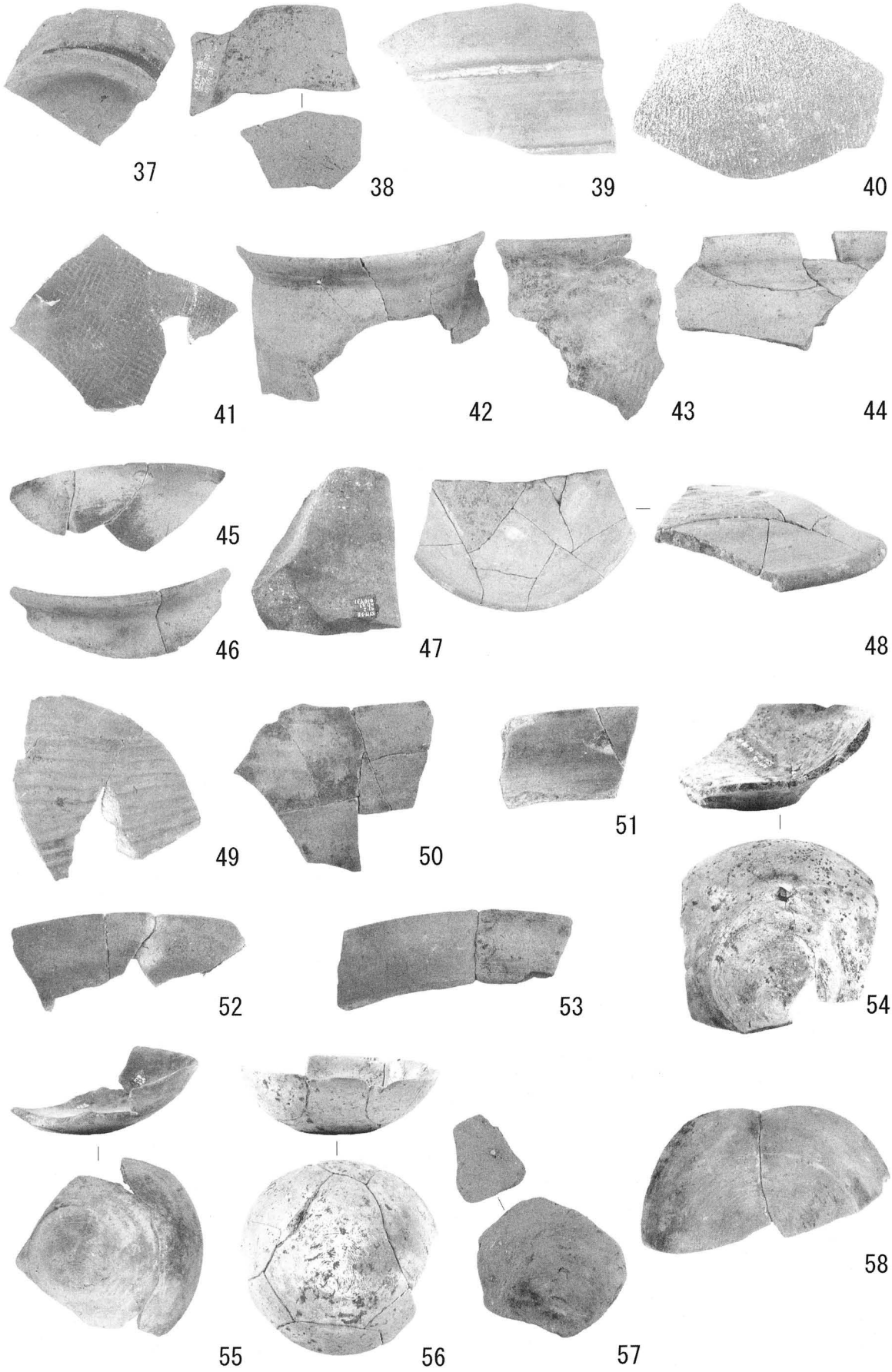


第52号土抗

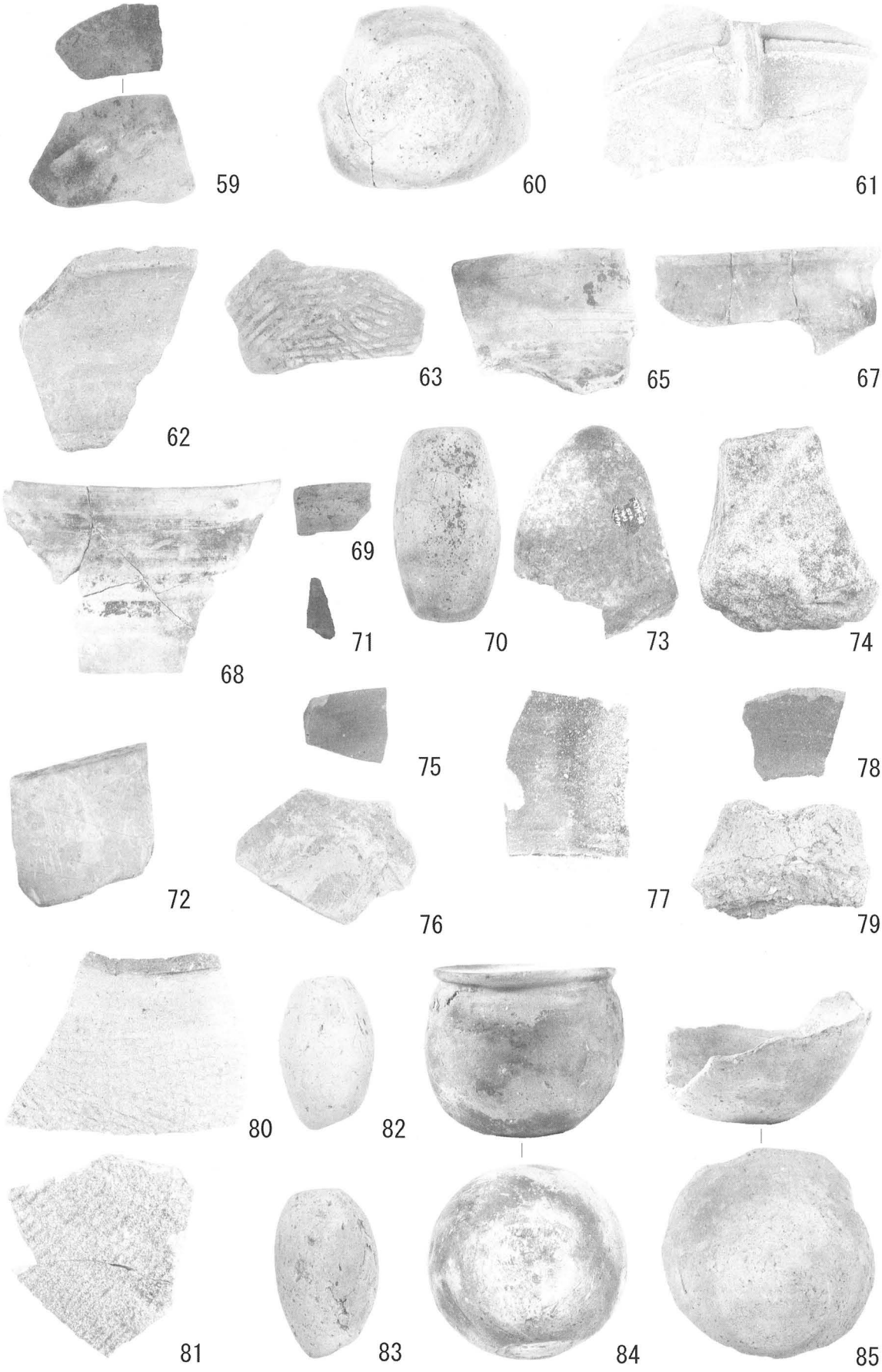
写真図版 11


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36

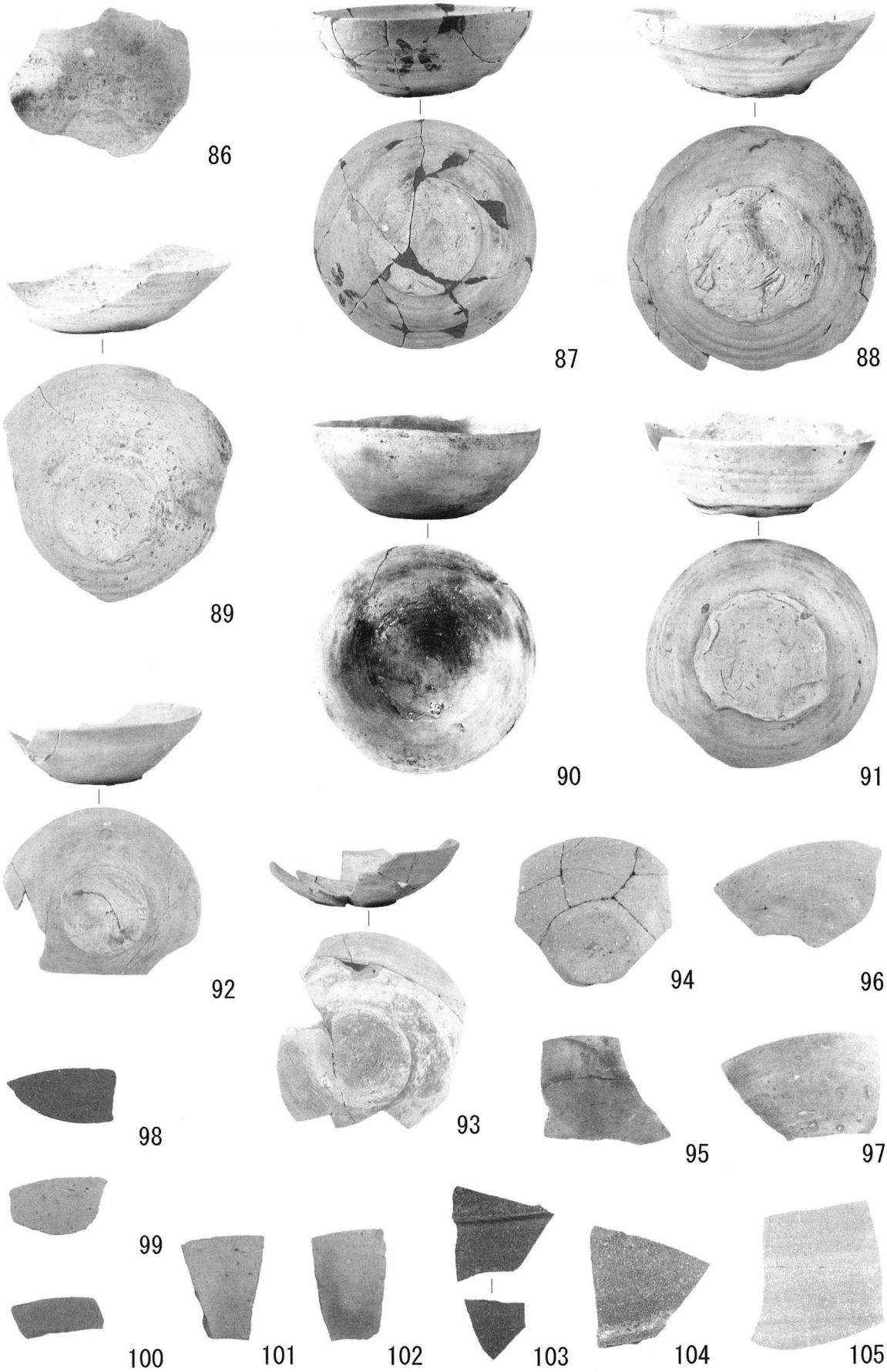
写真図版 12



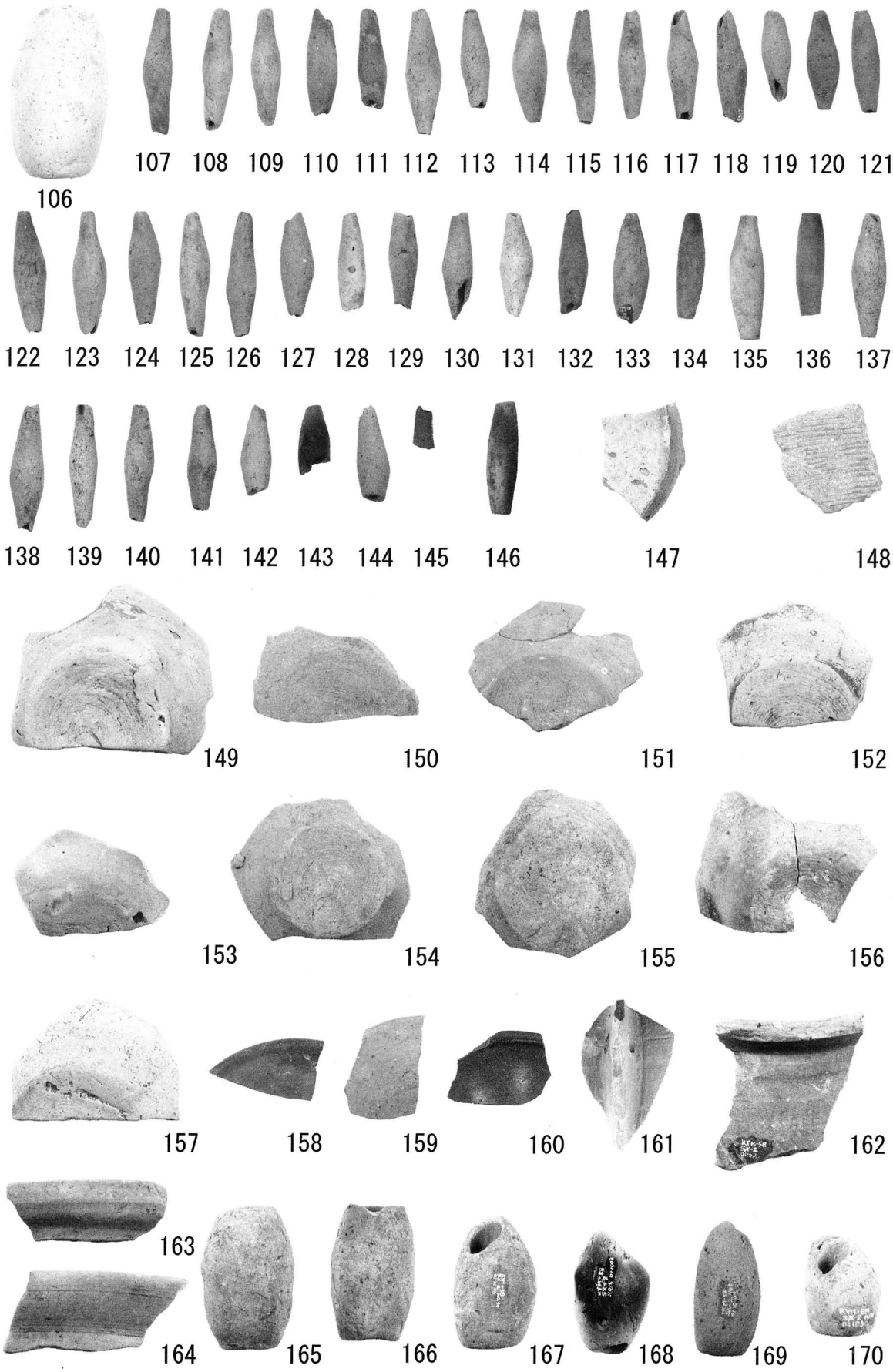
写真図版13


59
60
61
62
63
65
67
68
69
71
70
73
74
72
75
76
77
78
79
80
82
81
83
84
85

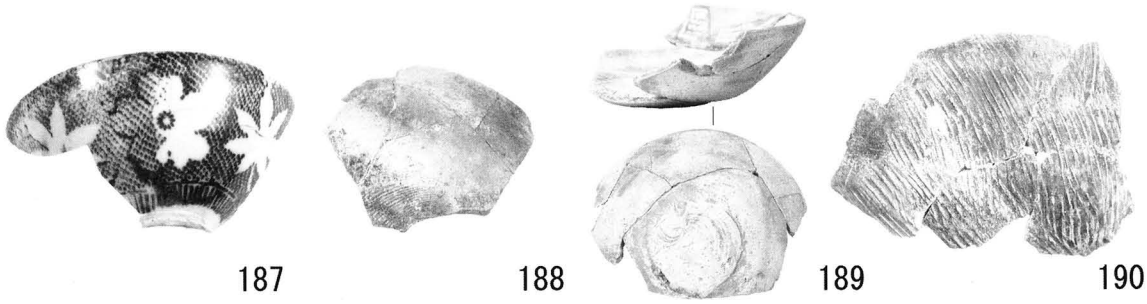
写真図版14



写真図版 15


106
107 108 109 110 111 112 113 114 115 116 117 118 119 120 121
122 123 124 125 126 127 128 129 130 131 132 133 134 135 136 137
138 139 140 141 142 143 144 145 146 147 148
149 150 151 152
153 154 155 156
157 158 159 160 161 162
163
164 165 166 167 168 169 170

171 172 173 174 175 176 177 178 179 180 181 182 183 184 185 186



187 188 189 190

191 192 193 194 195 196 197 198 199 200 201 202 203

204 205 206 207 208 209 210 211 212 213

報 告 書 抄 録

書　　名	富山市金屋南遺跡発掘調査報告書Ⅱ
シリーズ名	金屋企業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（2）
シリーズ番号	(2)
編著者名	小林高範、小林貴郎
編集機関	富山市教育委員会埋蔵文化財センター〒930－0803 富山市下新本町5番12号　TEL076－442－4246
発行機関	富山市教育委員会
発行年月日	西暦　2003年3月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
かなやみなみいせき 金屋南遺跡	とやまけんとやまし 富山県富山市 かなやあざかわばた 金屋字川端 ちない 地内	16201	591	36° 40′ 10″	137° 10′ 20″	20010514 ～ 20011213	4,700㎡	金屋企業団地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
金屋南遺跡	集落跡	平安時代	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 土坑、畠畝跡、 土器祭祀跡、河川跡	須恵器、土師器、土錘、石製品、近世陶磁器	平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土錘が40点一括出土した土坑などを検出した。旧河川の縁では土師器埦と炭化物集中区で構成される祭祀遺構を検出した。土師器埦のひとつには「北」の朱書きがある。また甕の底部を蓋にして小甕を埋納した柱穴を1か所検出した。
		中世	河川跡		
		近世	大型掘立建物跡		

富山市埋蔵文化財調査報告131

富山市金屋南遺跡発掘調査報告書Ⅱ

－金屋企業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（2）－

2003年（平成15年）3月28日発行
発行　富山市教育委員会
編集　富山市教育委員会埋蔵文化財センター
〒930－0803
富山市下新本町5番12号

Tel　０７６－４４２－４２４６
FAX　０７６－４４２－５８１０
E-mail：maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp
印刷　松濤印刷株式会社